

アジアの人々の協働から学ぶ XXV

— learning together in a cooperative work —



桃 山 学 院 大 学

国際ワークキャンプ報告（インドネシア）
（第25回）

A Report of International Work Camp (Indonesia)

2011



Canti

Canti

Uhh?

Jump

Chu

Poco
poco

hari ini
行きたい♪

Kimi ni
mucha-da!
Chu shite♡

IWE 25
angan dan
Tangan
24 Aug 2011

AIG





Saya
Cinta
Anak-
anak

Terima
kasih
untuk
18 hari ini
8.22~9.8

目 次

感謝・感謝	島田勝正	1
初団長と共鳴作用と体感と	松平功	2
アスラマのエコ・ライフ	三宅亨	4
3度目の引率を終えて	福田公教	7
25年を糧にして	南出和余	9
第25回IWCの引率を終えて	松山智樹	12
	Nyoman Forman Supradinate	14
Member of IWC25☆		16
テーマ		18
IWC25 事前活動		19
調理実習		20
募金活動		21
合宿		22
2011年度 第25回国際ワークキャンプ・インドネシア日程表		23
ソカでの植林プログラム		28
入村式		29
プリンビンサリ村		30
プリンビンサリ村地図		31
アスラマ		32
アスラマ地図		34
アスラマの子どもたち		35
第25回IWCのワーク内容		36
日本語プロジェクト		37
パレード		39
日本食		40
交流会		43
パラサリ訪問		46
スポーツ大会		47
衛生指導・そうじ		48
小学校訪問		49
中学校訪問		50
出身村訪問		51

第5 アスラマ	52
離村式	53
ウンタル・ウンタル	54
PPLP	55
エバリュエーション	56
アガペー・フェスティバル	60
文化探訪	61

参加学生のレポート

「人生の中の貴重な18日間」	学生隊長	山内 慎太郎	62
「Bagusな日々を終えて」	学生副隊長	岡野 峻 佑	65
「きらきらの笑顔を忘れない!★」	学生副隊長	中川 美 弥	68
「心に残る笑顔」		小林 弥 生	72
「ひととの出会い」		谷川 優	74
「出会いに感謝」		中西 由 茉	78
「Amazing」		西口 彰	80
「未来の自分に繋がる18日間」		石川 輝 佳	84
「インドネシアでの貴重な体験」		北坂 知 沙	87
「たくさんのお会いに感謝」		北村 穂 波	90
「新しい自分」		鈴木 央 生	92
「インドネシアにて」		岡崎 涼	95
「たくさんのお会いの中で得たもの」		小杉 磨未奈	98
「インドネシアの思い出」		鈴野 祐 介	101
「Tangan dan Tangan ～手と手～」		畑中 沙 織	104
		Derry Lisandra	107
		Emy Ekasari	108
		Jseeica Geifenny	109
		Ni Putu Ari Devita	110
		Joshua A. Kansil	111
		Vickie Vu Vross	112

第25回インドネシアワークキャンプ預り金精算書	114
第26回国際ワークキャンプ参加者募集要項	115
編集後記	117

感謝・感謝



キリスト教センター長 島田勝正

昨年4月の人事異動により、センター長、チャプレン、チャペル事務室職員が全員入れ替わりました。新しくセンター長に着任した私には「国際ワークキャンプ・インドネシア」の実務経験が全くありませんでした。大変不安な船出だったことを今思い出しています。しかし、今年度は松平功チャプレンが昨年度の引率の経験を生かし、団長としてプログラムの一部始終を指導して下さいました。チャプレンの貢献に感謝致します。

現地に同行したわけでもありませんので、具体的なプログラムの詳細への言及は控えますが、このプログラムが無事終了した背景にはたくさんの人たちのご尽力、ご支援があったからと感じております。

まず、お世話になったスィクラマ氏をはじめとするバリ・プロテスタントキリスト教会の皆様、プリンビンサリ村のホームステイ先の皆様、児童養護施設の関係スタッフの皆様と子どもたちに心から感謝の意を表します。

事前研修でインドネシアの歴史文化等の予備知識を提供して下さった小池誠先生（国際教養学部教授）や深見純生先生（国際教養学部教授）をはじめとする新旧の国際ワークキャンプ実行委員会の先生方や、健康管理についての知識を与えて下さった今井敏子さん（保健室看護師）にはお世話になりました。

また、毎週月曜日にインドネシア語を教えて下さったパムンカス先生（本学非常勤講師）にもお世話になりました。

特筆すべきは、スィクラマ氏および看護師の石井美和さんに遠路はるばるインドネシアから本学にお越し頂き、事前研修の段階から、引率者との綿密な打ち合わせや参加学生に対するご指導ご助言をして頂いたことです。

三宅亨先生（経営学部教授・前団長）、福田公教先生（社会学部准教授）には昨年度に引き続き引率をお願いしました。また、南出和余さん（国際教養学部・講師）松山智樹さん（財務課職員）に新しく引率に加わって頂きました。

面倒な事務手続きを一手に引受けて下さった吉田雅憲さん（チャペル事務室参事）およびチャペル事務室の職員の皆様、お疲れさまでした。

最後になりますが、大学当局および多額の資金援助を頂いた教育後援会に厚くお礼申し上げます。

このワークキャンプは四半世紀を経て、新しい段階に入ってきています。要職に就任され多忙を極められるスィクラマ氏の後継者養成は早急に検討すべき問題であることを指摘し、巻頭のご挨拶とさせて頂きます。有難うございました。

初団長と共鳴作用と体感と



団長 チャプレン 松平 功

桃山学院大学創立25周年記念事業として、1986年から始められた国際ワークキャンプ（以下IWC）は、今回で第25回となりました。IWC実施から四半世紀という記念すべき年に、団長を務めさせていただけたのは大変光栄なことでした。ただ、初めての団長ということもあり、今回のIWCは良い意味での緊張と新しい発見の連続でありました。足りないところばかりの団長でしたが、呆れながらも忍耐強くご指導くださった引率教職員の方々、現地スタッフ、および参加学生の皆さんに、この紙面を拝借して心から感謝いたします。

さて、現地でのスケジュールはインドネシア気質を反映しているかのように流動的になることが多く、そういった場合、団長の「する・しない」「行く・行かない」「受ける・受けない」などの決断を引率教職員の方々との「阿吽の呼吸」で合わせなければなりません。会議などを行っている時間はないのです。例えば、パレードの参加要請が突然来たことがありましたが、その時は、引率者の方々から「パレードに出よう」という意気込みを感じて快諾しました。また、高校での体育会参加願いが急にあった時は、教職員の方々のお顔をちらりと見ただけで「行きたくない」という思いが伝わってきましたので、却下しました。これは人の顔色を伺うこととは全く違ったもので、心が通じ合った時に初めて感じ合う「共鳴作用」に他なりません。チームワークの重要性を前回以上に、感じ取ることができ学ばせていただきました。

また、チームワークに関して申し上げますと、IWC25のチームワークは今までのIWCの中でも随一ではないかと思われまます。準備段階から学生達に日本の学生、インドネシアの学生、引率教職員、現地スタッフ全員がひとつのチームであると徹底して教えては来ましたが、これ程一丸となって団結できると思いませんでした。このチームワークを通して、学生達は初めから終わりまで民族・言葉・生活環境の違いなどの壁を越えて、沢山のひと々とふれ合うことができ、多くのことを学び取れたと確信しています。

聖書に「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマ書12：15）という言葉があります。この言葉ほどIWCの精神を適切に語るものにはないと思います。ただ、この教えは簡単なことのように思えるのですが、実際は容易なことではありません。特に「泣く人と共に泣く」ということは「もらい泣き」のようなことを言っているわけではありません。「もらい泣き」なら赤ん坊でもできるのです。泣く人と同じ環境に自分を位置付けて、その人の苦しみを共有して初めて「共に泣く」という意味になるのです。IWCの参加学生の多くは、この言葉を現地で「体感」したはずでです。バニユポ村という養護施設の子どものたちの出身村のひとつを訪れた時のことです。その村には広大なぶどう農園があり、貧しい人々が農園の中に小屋を立てて生活しています。一所懸命に働いても利益の7割を地主に搾取され、とうもろこしだけのご飯を一日一食するのがやっとという貧困にあえぐ人々が約6,500人住んでいます。

子どもだけでも何百人もいるようです。しかし、施設にはこの村の子どもたち全員を受け入れる力はありません。学生達はそれぞれ沈痛な面持ちをしたり、涙を流したりしながら村を見学して行きました。家族や兄弟と離れて施設で暮らす子どもたちの苦しい思いが、この村を訪れた時に学生達に伝わってきたのでしょう。この時の彼らの思いは、「上から下へ」の同情のようなものではありませんでした。彼らは、子どもたちの心の痛みを体を感じ取り、共有して「共に泣く」ことを「体感」したのです。

今年のIWCパティック（インドネシアの正装着）には「五つのパンと二匹の魚」がデザインされています。これは新約聖書のマルコ福音書6章にある「5千人の給食」というお話から来ています。その内容は、男だけで5千人の群衆をイエス・キリストが、ある少年の差し出した五つのパンと二匹の魚だけで満腹にした、という奇跡物語です。奇跡物語といっても、単なるおとぎ話のようなものではなく、明確なメッセージがいくつも込められているとされています。特に「五つのパンと二匹の魚」を献げた、名も無きひとりの少年の行為に大きな意味があると言われています。5千人もの群衆に対して「五つのパンと二匹の魚」だけで何の意味があるだろうか、と誰もが考えるでしょう。しかし、聖書はそのような小さな行為であっても、その行為を通して何かが変わると教えているのです。今回のIWCで活躍した学生は、インドネシアの学生を含めてたった21人です。学生達も「こんな少人数で何ができるのだろうか」と、自分たちの無力さ感じていたかもしれません。そういった学生達に対するメッセージとして、全アスラマ（養護施設）の責任者であり、敬虔なキリスト教徒であるヌガ・スイクラマさんが「五つのパンと二匹の魚」をパティックのデザインに決めたのです。また、そのデザインは、「IWCの活動を通して神様が何らかの奇跡を与えてくださる」という彼の篤い信仰的願いが現わされているのです。

四半世紀を越えてもIWCはまだまだ活躍して行きます。これまでに400人以上の学生がインドネシアと日本の架け橋としてIWCの活動に参加してきました。その行為は、苦しむ人々と共に苦しみ、泣く人々と共に泣くということが、どういう意味を持っているのかを体験する学びです。そして、その体験はその学生だけに留まらず連鎖反应的に広がり多くの影響を日本社会に与えて行くことでしょう。これからも、第30回、40回と続いて「共鳴作用」で理解し合い、また人の苦しみを「体感」できる学生が増え続けることを期待しています。

アスラマのエコ・ライフ



経営学部 教授 三宅 亨

第25回という節目に当たる今年の国際ワークキャンプ（インドネシア）は、私にとっては6度目の引率となる。この数年間で現地プリンビンサリ村は少しずつ変わってきたが、児童養護施設（以下、アスラマと略す）のほうは大きく変わりつつある。

「麻薬と賭博のない村」として知られるプリンビンサリは今でも治安の良い静かな村である。人々は親切で、道で出会うと気さくに声をかけてくれる。一昔前の日本の風景のようだ。しかし、この村でも日本のいくつかの地方と同じように、高齢化と過疎化が進んでいる。私が初めて訪れた2005年には234世帯が住んでいたが、2009年には167世帯にまで減っている。村にはワルン（warung）と呼ばれる小さな雑貨店が数軒あるだけで、食料品を含めて、ちょっとした買い物にも6キロほど離れた市場へ出かけなければならない。これといった現金収入の得られる働き口がないので、若者は仕事を求めて都会に出て行かざるをえない。かつては参加学生が村の若者たちとスポーツ大会を開き、バレーボールなどを楽しんだが、今ではそれも成り立たなくなり、アスラマの子どもたちとのささやかな「運動会」に置き換わった。そんな小さな村落ではあるが、子どもたちは毎日元気に走りまわり、笑顔を絶やさないので今でも変わらない。一方、アスラマの施設は、このところ大きな変化を見せている。今回は、その様子について報告したい。

プリンビンサリの抱える問題の一つは水不足である。水が充分でないので産業が成り立たない。これが人口減少の大きな要因である。外国人観光客で賑わうバリ島の中央部や東部は米の3期作が行われるほど水に恵まれているが、島の西端に近いこの村では北側にある山中の池や小川の水、雨季に降る雨水を水道水として使用している。もちろん、この水はそのままでは飲料水にはならない。掃除や洗濯、炊事、水浴び（mandi）などの生活用水として使用されるが、絶対量が不足しており、水道管も細く、夕餉時にはどの家庭でも水を使うので、村の一番高い所にあるアスラマの中でも水源から一番離れている、私たち引率教職員の滞在するゲストハウスでは時々断水に悩まされる。飲み水は市販の大きなペットボトル（18リットル）入りを購入しなければならない。しかし、ここ第2アスラマでは昨年春から飲料水の自製を始めた。第19回ワークキャンプ学生が作った貯水槽に溜めた水をアメリカ製の浄化装置でフィルターに9回通して濾過すると、市販の飲料水よりも水質の良い水が得られるようになった。今では、余った飲料水を販売するまでになり、数少ない貴重な収入源の一つとなっている。また、この水を常用するようになってから、子どもたちの皮膚がきれいになり、吹き出物が減ったという。

川や池の水の用途の一つとしてナマズの養殖が導入された。ナマズは食用として飼われているが、水の浄化にも役立つ。ナマズから排出された泥と排泄物を利用して野菜の水栽培の試みが始まった。子どもたちとスタッフ約100人の食費は支出の中でも大きな割合を占める。少しでも食糧を自給できれば、とワヤン館長は話す。

以前は、アスラマで出るゴミはプラスチックなどの不燃物も含めてすべて焼却場で燃やしていた。しかし、今はゴミの分別が始まり、野菜クズや残飯など台所から出るゴミは機械で草と混ぜ合わせて、3か月もすると良質の肥料になる。

食用に飼っている牛や豚の排泄物はそのまま肥料として使われてきたが、悪臭を放つだけでなく、二酸化炭素よりも温室効果が高いメタンが大気中に放出されることが知られている（「朝日新聞」2011年9月21日）。アスラマでは、豚の糞尿を発酵槽に貯め、発生するバイオガスを台所の2台のコンロで調理に使用している。固形物のほうも適切な処理を施し、肥料として野菜畑で用いる。

その野菜畑も、今回初めて小型トラクターが入るのを目撃した。畝を整備し、まず土壌改良に効果があるというインゲンマメを育て、その後、ナスや空芯菜などの様々な野菜を栽培する。採れた野菜は子どもたちの食卓に上る。敷地の東側の草地を果樹園に転用する計画もある。ここには子どもたちが大好きなバナナとパイナップルを植える予定である。

以前から敷地内で飼育していた鶏とアヒルの数も増し、大きな小屋が建てられた。卵は子どもたちの栄養源となる。これまで子どもたちは卵を食べる機会が少なかったが、鶏やアヒルの数が増えるにつれて、やがて毎日食べられる日が来るであろう。

このように、ゴミや家畜の排出物を再利用し、食料を自製し、アスラマの生活を向上させる環境にやさしい試みが展開されている。以上が、この数年間で大きく変わった第2アスラマのエコ・ライフの一部についての紹介である。

今この原稿を書いている私の手元にWidhya Ashi Foundation Strategic PlanというA4サイズで約30ページの冊子がある。これには、バリ島の7か所にあるアスラマを運営するウィディア・アシ（「知識と愛の家」を意味する）財団の2011年7月1日から始まった3カ年計画が英語とインドネシア語で説明されている。その冒頭に次のようなVisionが掲げられている。

“We are looked upon as the leading social service agency in all of Bali working to eliminate poverty among our people.”

それに続いて、以下のMissionが述べられている。

“By providing safe and hygienic living space, nourishing food, access to formal education, quality health care, and additional training in wholesome values and productive life skills, we help impoverished people help themselves to break their cycle of poverty.”

この戦略計画を読むと、施設・設備の充実、子どもの衛生面での改善、自立を助ける教育、そしてそれを支える財源の安定的確保などの戦略が多項目にわたって記載されている。私たちが昨年引き続きソカで行った植林活動も財源を確保する活動の一環である。

同計画書では、アスラマ職員の質的向上も重要課題に挙げている。インドネシアでは最近法律が改正され、より質の高い児童福祉が求められるようになった。そのための職員研修も実施されている。子どもの居住スペースも拡大されることになった。第2アスラマでは今回私たちが関わった子ども部屋の改築に加えて、新しく2階建ての子ども部屋の新築が計画されている。全アスラマの統括責任者であり、私の親しい友人であるスィクラマさんは今回も忙しい仕事の合間をぬって熱心に彼の夢を語ってくれた。

今回のワークキャンプがアスラマの夢を実現するうえで少しでも役に立ったとしたら、子どもたちの生活環境の向上に多少なりとも貢献できたとしたら、ワークキャンプ参加者一同にとってこれほど嬉しいことはない。

現地滞在中は、バリ・プロテスタント・キリスト教会（GKPB）やウィディア・アシ財団、アスラマ

の職員、ホストファミリーをはじめとするプリンピンサリ村の人々、炎天下での作業を指導して下さった職人・大工さんなど多くの方々に今回もお世話になった。第21回からお世話になっている、バリ在住の看護師の石井美和さんには、昼夜を問わず私たちの健康管理に細かく気を配って頂いた。これらの人々に改めて、感謝の気持ちを表したい。

「アジアの人々の協働から学ぶ」というワークキャンプの精神を体験した15人の日本人学生と6人のインドネシア人学生には、18日間にわたる協働に感謝するとともに、このキャンプで得たもの、学んだものをこれからの日々の生活のなかで更に高め、立派な社会人として世に出るべく自己の向上に努めて欲しいという私の希望を伝えて、報告書の締め括りとした。

3度目の引率を終えて



社会学部社会福祉学科 准教授 福田 公 教

まずはじめに無事に引率を終えることができたことを嬉しく思います。また、滞りなくワークキャンプを終えることができるようにご協力頂いた、あらゆる関係者の皆さんに感謝します。

インドネシアでの国際ワークキャンプも今回で25回目ということで、四半世紀続いてきたこととなります。このワークキャンプは、大学における体験学習が重視されるようになった昨今、貴重なプログラムになっていると思います。机上での学習だけでなく、多様なプログラムを遂行するなかで、学生達はたくさんの人と出会い、生の声をききながら、色々な角度から物事を考えることができるプログラムになっています。この報告書を一読頂くとそのことがおわかりいただけるものと思います。

インドネシアに限らないことかも知れませんが、海外で活動する時、日本人が考えるように予定通りに事が運ばないことがままあることでしょう。プログラムを学生が遂行していく中で、学生に求められる力は、あらゆる不測の事態に臨機応変に対応することです。その際、たくさんの引き出しがあれば問題ないのですが、学生にとっては、その引き出しを事前の研修のうちに作り上げておくことが求められます。そういう意味では、ワークキャンプの成否は、事前研修の充実度と深く関わります。私は、今回の事前研修に自己紹介のために顔を出したことで、1コマを私の専門に引きつけた研修を行っただけなので、その全容は分かりませんが、その充実ぶりがインドネシアで発揮されたと思いました。

ヌガラにおけるジュンプラナ県の県都祭に参加した折のことです。昨年度は、この県都祭に来賓として招待され、地域ごとのダンスを中心とする出し物を観覧しました。当初、今年度は県都祭への招待はお断りし、ワークキャンプの名の通り、ワークに時間を割く予定でした。しかし、県・村・施設等々のしごらみの中で、どうしても参加して欲しい（日本と国際的な交流事業をやっているということは、とても鼻が高いことなのかも知れませんが）ということになり、参加することとなりました。昨年の観覧ではなく出場するというので、スィクラマでさえ、「大丈夫、歩くだけ…」と聞いていたのですが、実際には、それぞれのグループが出し物をしていることが自分たちの出番の数分前に分かりました。学生達は、インドネシア人学生とともに子どもとの交流会の時のために準備していたダンスを踊ることで息場をしのいだのでした。

終わってからの学生らの感想は、「もっと十分な準備ができていれば良いものを提供できたのに…」と満足したわけではなさそうでした。しかし、もちろん、このことだけにとどまりませんが、十分な準備と臨機に対応した出来事の一例に挙げるができると思います。

この事前の準備には、団長のチャブレン、今回の引率メンバーでは最もインドネシアでのワークキャ

ンプでの経験豊かな三宅先生がリードして下さいました。実際にインドネシアでの活動を想像や伝聞でしか触れることのできない学生にとって、お二人の経験と知識は事前準備の大きな力になったと思います。私は毎回のことですが、ほぼぶっつけ本番で学生を引率することになります。これまでの引率を振り返ると、引率者としてどう学生に対するかを毎回あれこれ考えてきました。学生にどういう姿勢で臨むか、置かれた自分の状況や学生の姿にも左右されるものだとは思いますが。

- ・分からないことがたくさんある

普段自分が慣れ親しんだフィールドとは異なる領域での活動となるので、分からないことがたくさんあります。インドネシアの文化・宗教・言語どれ一つ精通することなく引率することはそういうことです。なかなか不安なことでもありますが、考えてみると自分自身ですら、自分の行動が自分から分からない場合だってあるし、分からないものを抱えて生きているのが人間だと考えることも必要です。

- ・恥をかけばいいじゃないの

分からないこととも連動するかも知れませんが、ワークキャンプでは自分の知らないことだけでなく、得意としないこと、苦手なことを要求されることもあります。仕方がありません。恥をかいてすむ時は、それを引き受ける度量が必要です。Let's dance…

- ・ものごとを表面だけで判断しない

世間は表にあらわれた現象でしかものごとを判断しないようなきらいがありますね。しかし、言うまでもなく表にあらわれる現象は一部分ですし、表にあらわれていることは、事の本質からずれている場合もあるかも知れません。

- ・それぞれの指向性を生かす

これまでみてきたように無知で恥をかくのが私の仕事となります。あまり嬉しいものではありません。そうするとどうしても教員根性が出てきて、何とか指導しようと考えます。もしくは、ものごとを批判的に捉えることに時間を割くようになります。これでは疲れます。だけでなく、自分の知識の及ぶ範囲での指導となるので、まさに我田引水となることも考えられます。したがって、表層だけで学生を判断せずにそれぞれの指向性を信頼することが必要です。37歳のただの人として学生に寄り添う、指導力不足やといわれるとそれすらも引き受ける必要があるでしょう。

このようなものの見方ができるようになったのは、昨年も三宅団長のもと、チャプレン等と引率したからかも知れません。国際交流や異文化理解に対する三宅先生の重厚な知識、キリスト教に対するチャプレンの知識がワークキャンプの大きな推進力になっていました。私はというと、終始見守る、出番に備えてベンチ裏でマッサージを受けていたといっても良いかもしれません。控えの引率者として、出番は少ない方が良いのだらうと思って過ごしました。ご負担が重かった引率者のみなさん、すみません。とはいえ、引率団は、参加学生のよりよい学びに繋がるように毎晩ミーティングを行いました。

ミーティングでは、学生の健康管理のみならず、インドネシアでの文化の理解を助けて下さった石井美和さん。私と同様にぶっつけ本番に近い形で引率された南出先生。学生の兄貴分として、学生の話聞いてワークをこなしてくれた松山さん。インドネシアからはスィクラマにホルマン。何だか引率団としては、それぞれの力を有機的に活用しあえたように思います。

あれこれありますが、最後は参加した学生に一言、第25回のインドネシアワークキャンプ、良いものになりましたね。このワークキャンプでの経験を何度も反芻して、どうぞ豊かな人生を歩んで下さい。

25年を糧にして



国際教養学部・講師 南出和余

消極的な出発

帰国して2ヶ月を経た今（すでに締め切りを過ぎているのだけれど）報告書を書くにあたって、現地で綴った日記を読み返してみた。第25回という節目の年に国際ワークキャンプに参加する機会を得て、引率教員でありながら、多くの学びと経験があったことを改めて再確認している。

正直なところ私の日記は、全くもって消極的な姿勢から始まっている。今回は、団長の松平チャプレンのほか、三宅先生、福田先生、南出、職員の松山さんと、引率者が5人もおり、「15人のワークキャンプに教員が4人も引率するなんておかしい！私は行かなくてもいいんじゃないか！」という疑問が綴られている（今でも4人は多すぎると思っている）。しかも、プログラム運営体制が私の授業日と合わなかったために、準備会には一度も出席できず、引率者間の打ち合わせもなく、いったい私に何が求められているのかをまったく理解しないままに参加したのである。学生たちの名前すら覚えていないまま出発したことは、学生たちに本当に申し訳なかったと思っている。しかし、日記を読み進めるに連れて、そこには私が日ごろ調査地でフィールドワークをする時に匹敵するくらい、たくさんの発見と気づき、そして私自身の気持ちの変化を捉えることができる。

また、出発の直前に勝手に私のなかで決めた役割は、IWC25の撮影である。ふだんは十分な参与観察をしてから映像に収める私にとっては、初めて経験するものに同時にカメラを向けるのは本来のスタイルではないのだけれど、フィルターを通して見るワークキャンプ、そして学生たちの成長を、新鮮な思いで記録しようと思った。また、出発前に1日だけ学生たちに会って、彼ら彼女らがビデオに収めたものの、ワークキャンプへの思い、そしてワークキャンプのイメージストーリーを描いてもらった。結果、18日間を収めた撮影ビデオは22時間に及んだ。私の場合、半年の調査でも30時間に満たないくらいポイントを絞って撮影するスタイルであることを考えると、このワークキャンプがいかに盛りだくさんであったかが分かる。フィルターを通して見る学生たちは、本当に輝いていたし、大きく成長したように思う。ビデオに映る1人1人の輝きと成長は、きっとこの報告書に収められた彼ら彼女らの言葉を証明してくれることだろう。

国際ワークキャンプの意義

日記にはさまざまな気づきが綴られているのだが、紙面の制約上それらをすべて書くことはできないので、印象に残るいくつかの点を書きたい。

四半世紀の歴史をもつ本学の国際ワークキャンプは、開発教育の世界では有名だ。1980年代の開始当初は、今のように各大学が留学プログラムを充実させることもなかったし、ましてワークキャンプを大学が実施するというのも珍しかった。今となっては体験型プログラムをもつ大学も増えており、学内に

もインドネシア以外にいくつかのプログラムが用意されている。ある種パイオニア的なIWCの存在は知っていたが、それが今なお非常に斬新で貴重な取り組みであることを、現地に行って初めて知った。

周知のように、IWCの現地受け入れはWidhya Asih Foundationというバリ・プロテスタント教会（協会）に属するキリスト教系NGOである。大学のプログラムというのは当然ながら教育的意義が第一の目的であり、社会開発や生活改善を目的とするNGOとは若干スタンスが異なる。そのNGOと大学が、互いの目的を達成するために協力体制を築き、25年間に渡ってプログラムを維持していることの意義は大きい。言い換えれば、大学が教育機関としての性格を保ちながら社会開発に関わる一つのモデルを提示している。そこには相互理解と柔軟さが不可欠である。これまでに多くの学生がそこで学び、成長し、それと同様に、バリの多くの子どもたちが、そこで育っている。Widhya Asih Foundationもまた、広い心で大学の小さな働きを活かそうとしてくれている。責任者のスイクラマさんが、25年のワークキャンプ歴代参加者のOB/OG会を作ってはどうかと提案していた。その思いは、単にそこで学んだ学生たちが関わり続けることを願うだけでなく、大学とNGOのコラボレーションの発展形を意図しているのではないかと感じた。

「糧にする」ということ

私事ではあるが、キャンプ中、学生たちを見ながら私は自分が初めてバングラデシュに行ったときのことを思い出していた。ちょうど15年前、大学3年生の夏に、私はNGO主催の「寺子屋訪問スタディツアー」でバングラデシュに行った。学部では英文科だった私がいま人類学を専門にバングラデシュで研究しているのは、紛れもなくその時のバングラデシュとの出会いがあったからだ。しかし、その当時、いま自分がバングラデシュの専門家になっているなど想像もしていなかったし、人生を決める出会いがそこにあったなんて思ってもいなかった。私はそこで何と出会ったのか。そして、インドネシアに來ている学生たちは、今ここで何と出会っているのだろうか、と考えていた。

バングラデシュでの私の出会いは、意外にも聖書によって導かれたと言えるかもしれない。学生たちと同じように私はキリスト教系の大学に通っていた。信仰とは出会えなかったが、精神や思想との出会いは今の私を築いている。バングラデシュのスタディツアーを主催していたNGOも、日本の支援側およびバングラデシュの受け入れ側ともにキリスト教系の団体で、ツアー期間中は常に礼拝の時間があつた。礼拝は単にお祈りをする時間ではない。聖書にはたくさんの教訓やメッセージが含まれていて、信仰の有無に関わらず、自分を振り返る手助けをしてくれるものだと私は考えている。さらに、この世界一のベストセラー書は、文化を越えて語り合うことを可能にしてくれる。「あなたの隣人は誰か」という問いかけは、学生だった当時も今も私のテーマとなっている。きっとその思いが、当時を今に導いているのかもしれない。

その意味で、私の日記に綴られた残念だったことは、キャンプ中の祈りの時間である。学生たちは、本当にあの祈りを自分たちのものとして実施できたのだろうか。自らを振り返る機会となったのだろうか。ローマ字で書かれた日本語を読まされるだけの祈りを、インドネシアの学生たちは理解したのだろうか。でも、たとえ祈りの時間がそのような機能を果たさなかったとしても、彼ら彼女らが、日記をつけ、語り合い、そして帰国後に振り返ることを通じて、ワークキャンプの経験を自分のものとして消化していることを願っている。その過程で、心のモヤモヤに耳を傾け、思いを言葉にする作業を手助けするのが教員の役割だと私は思う。

おわりに

「ワークキャンプに行って自分は変わったのだろうか」という疑問をもつ学生が私に「先生は変わりま

したか」と尋ねた。私は「変わった」と即答した。厳密に言えば、私自身が変わったわけではない。でも、ワークキャンプを終えて秋学期が始まり、18日間を共にした学生たちと、バス停で、キャンパスで会った時、私はそれまでの自分との違いを感じ、以前より少し楽しく授業をしている。出会うことで人はすぐに変わるわけではないけれど、出会いがきっかけとなって、自らを稼働し、そして、15年後に「あの時の経験があったから今の自分がいる」と振り返られるようになることもある。18日間を共にした学生たちの15年後を楽しみにしている。

第25回IWCの引率を終えて



総務部 財務課 松山 智樹

22年度の決算業務も一段落したある日のこと。IWCの引率の話をいただいた。青天の霹靂とはまさにこのこと。海外に行った経験がほとんどない。18日間という長期間の旅程であること。財務課では学生と接する機会がほとんどないにも関わらず、10名を超える学生の引率をするということ。などなど、自分にとって不安要素が多すぎて、引率の話を聞いたときは期待よりも不安が大きかった、と言うより、期待は皆無で不安ばかりであった。

引率することが決まってからは、通常の業務の合間を縫って事前の研修になるべく参加するようにした。が、それでも不安は払拭できなかった。それどころか、語学の研修においては自分の物覚えの悪さを痛感し、こんな状態で現地に行ききちんと引率という役割を果たすことができるのかと更に不安が大きくなっていった。

そんな中、あつという間に出発の8月22日になった。結局、覚えることのできたインドネシア語は簡単な挨拶程度。学生とは日本食の研修時に少し話す機会があった程度で、現地での引率に大きな不安があったのが正直なところだ。ここまでを要約すると、出発するまでは非常に不安が大きく自分のことで精一杯という引率者としてあるまじき心境であった。

そんな心境のなか、関西国際空港から7時間弱のフライトを経てインドネシアはバリ島に到着した。到着後、看護師の石井美和さんとスィクラマさんと合流。お二人には日本での事前研修時にお会いしていたので、合流できたときは少し安心した。バリ島に到着してまず驚いたのが交通事情であった。あの中で車が運転できれば、日本でならどこへ行っても車の運転は簡単なものになるだろうと妙に感心した。そんな中、ホテルへ向かい、インドネシアの学生と合流し、ワークがいよいよ動き出す2日目以降に備えた。

2日目～4日目はソカでの植林を行った。学生と接する機会が少ないだとかと不安を口にしていても何も解決しないので、学生と一緒にになってがむしゃらにワークに取り組んだ。学生も一生懸命に取り組み、結果として1日で約750本の苗木を植えることができ、自分の中でも不安が払拭できた日となった。

植林が予定より早く終わることができたので、ソカの村の中を見学させてもらうことになった。海外では水道水が飲めないのが通常であり、日本のように水道水が飲める国の方が稀有な存在である。インドネシアでも水道水は飲めないのだが、ソカでは飲料水として使われていたのは農薬の混入した水を簡単な装置で濾過したものであった。その濾過はあくまで気休め程度ということで、飲料水の質が劣悪であり、ソカでは年々村の平均寿命が短くなっているとのこと。この現実には衝撃的であった。日本で暮らしていれば当たり前のようにある飲料水を確保できない現実以上に、そんな状況で生活しているにもかかわらず、村の人たちの笑顔は明るく、日本から来た我々の村の見学を受け入れてくれたことに衝撃を受けたのだ。衛生面では日本に比べれば劣悪であることは一目瞭然ではあるが、そこに暮らす人々と

現在の日本人の精神衛生についてどちらが健全であるかを考えさせられた。ソカだけでなく、この後、幾度となく同じことを感じるようになった。

植林のワークがことのほか順調に進み、4日目の午前中は当初予定されていた植林ではなく、プリンビンサリ村での交流会やスポーツ大会などのミーティングを行った。この時点では本学の学生とインドネシアの学生の関係はいいものが築けていたと思う。日本語であっても自分たちの意思を100%伝えることは難しい。それをインドネシア語もしくは英語といった普段自分達の使わない言語を使ってのコミュニケーションを取り、お互いの関係を築いていくのは大変なことだと思う。実際はいろいろ困難もあったであろうが、身振り手振りを交えつつ、それを簡単にやってのけた学生達に驚いた。

午前中のソカでのミーティングを終えて、午後からはプリンビンサリ村に向かった。プリンビンサリ村には10日間滞在させていただいた。その間、ムラヤでのパレードに招待していただいたり、プリンビンサリの子もたちと学生主催の交流会があったり、日曜日には教会へ行ったり、小中学校への訪問、ワークなど様々な経験をする事ができた。そんな中でも最も印象に残っているのがアスラマの子もたちの出身村への訪問である。

アスラマの子もたちはよく笑い、いつも笑顔で挨拶をしてくれる。子もたちは元気で明るい。子もたちは仲が良く、遊びまわっている。もちろん、勉強もする、ガムランの練習もする。そんな子もたちとともに数日間アスラマで過ごしてから、アスラマにいる一部の子もたちの出身村であるパニユボ村へ子もたちと一緒に訪ねることとなった。子もたちにとっては久しぶりに家族に会える機会のようなだった。子もたちの出身村についての話は聞かされてはいたが、実際に訪問してみると想像以上に貧しく過酷な状況であった。そんな状況下で生活しているにも関わらず、村の人々は日本から来た我々に対して大切な収穫物であるブドウをふるまってくれた。いろいろな質問に対しても丁寧に答えてくださった。わたし自身がこのような環境に置かれたらと考えると、外から来た人間に対してあのような対応はできないだろうと思った。なぜ、このような状況下で他人をもてなす心が持てるのか。そして、小学生ながらにして家族から離れて暮らすことになったにも関わらず、健やかで純粹でいられるのか。そんなことをいろいろと考えさせられた。

村からの帰りのバスで一緒に座っていた男の子は家族と別れて寂しそうだった。家族にももらったブドウやお菓子を食べながら、何か考えている様子だった。そのお菓子をわたしに半分分けてくれた。家族からももらった大切なお菓子をだ。その優しさにわたしは心を打たれた。こういった心の持ちようをキリスト教のアガペー（無償の愛）というのだろうか。男の子の考えていること、想っていることを少しでも理解したいと切に思ったのをはっきりと覚えている。

ここまで、ほとんど自分のことばかり書いてきたが、学生達はIWCを通してわたし以上にいろいろと感じ、考えることがあったと思う。それは、ずっと日本で生活しては、おそらく感じることも考えることもなかったであろう貴重なことだと思う。だからこそ、このIWCでの経験を自分の中で大切にしてほしいと思う。3ヶ月以上の時間をかけて準備し、実際にバリ島へ行って自分達でアイデアを出し合い、工夫や努力して現地でのワークや日本食、交流会など様々なことを成功させたことに自信を持ってほしい。ただ、自信が傲慢にならないよう、今回日本での準備や研修、インドネシアでの滞在中の中で多くの人の助けがあったことも忘れないでほしいと思う。自信の中にも謙虚さを忘れず、この貴重な経験を糧にこれから大きく成長してほしい。

最後になったが、今回引率するにあたり快く送り出してくださいました財務課の皆様、一緒に引率させていただいきいろいろとお世話になった三宅先生・松平チャプレン・福田先生・南出先生・石井さん・スイクラマさん、子どもの世話に加えて我々の面倒まで看ていただいたワヤンさん・イヴ達、第25回IWCに携わっていただいた全ての人に感謝の意を記し、今回のIWCの報告を終わりたいと思う。



ウィディア・アシ財団 職員
Nyoman Forman Supradinate

IWC 25th (International Work Camp) as the annual program of St. Andrew University, collaborated with Widhya Asih Foundation as the in-country partner was held last summer, 22nd August – 8th September 2011. For me, it was my second time involved after last year joined the same program. It was a very exciting line up for the reason that I could learn many things. The activities themselves were not so much different from last year work camp. This Work Camp took a place at the orphanage II, which located in Blimbingsari village, west side of Bali. Last year IWC 24th was a new thing for me, since I had no idea about this program before. And the unfortunate thing that I realized, the fact was it had been continuously embraced since 25 years ago. That was a fantastic number of a long aged of cooperation between partnerships.

In this report I wouldn't review about the activities along work camp, on the contrary I would tell about what I attained that might be something precious to share. Just like what I have stated, it was lucky for me being engaged in this work camp as I learned many things that I wouldn't possibly achieved from somewhere or someone else. Culture, language, habit and lots of things that I thought could possibly the main topic here. But the most valuable thing that I discovered was how to honor the time. For many years ago I heard this group of words that was the wise man ever said 'time is money'. Nevertheless, this statement sometime was not working especially for us who lived in a rubber time (jam karet) culture such as Indonesia. It was hard for me too at the first time, that everything or every program in this work camp was strict and timetable-based. In this case, everything was fixed from the beginning until the end with no excuses. However, I steadily understood I should change the culture of 'rubber time' starting from myself first, before changing somebody's habit. Sometime I felt embarrassed, when the Japanese teacher (sensei) said "oh,rubber time/Bali time," when something was not going on time in such particular case. It happened one time, when we started to have a morning prayer as the first thing that we should do at the very first day, Indonesian students almost all came late to the gathering. It's sad to see things like that, but deeply in my heart I knew they did their best and learned something from that morning. The good thing was on the next morning, all Indonesian student didn't come late again. The other thing that I noticed from that morning was also another bad habit from our culture Indonesia. We sometime were feeling hard to regret what mistakes we had done. Being late for us was often considered as a common thing. For this reason, on that morning no words about sorry comes from the Indonesian students, but after

Bapak Nengah Swikrama asked to say apology, they did it. That's what I called fast learning from the beginning of this work camp. Hopefully, this could be a precious lesson for all, not only for Indonesian students but also for the entire member of IWC 25th.

"Ganbatte". This word which came from Japanese language (Nihongo) was very popular along work camp. Which mean "semangat" in Indonesian language (cmiiw). I personally didn't use this word very often in daily life. And I am sure this word also not familiar in whole Indonesian citizen. But the fact was we had this word in Indonesian dictionary. It stressed on the expression of giving support to somebody. On the other hand, sometime it's very hard for us giving support to somebody's difficulties. But that thing I didn't see in this work camp. I really amazed from the Japanese students that they're pleased to support each other. It was proved every time when we worked together in every activity. Compare to Indonesian culture, it's good to imitate this habit. And also to see the Indonesian student imitated and used this word to support their friends was an amazing thing that I had ever seen. This simple word could changed many big things.

So I, myself, with unassumingly thankful for Japanese group, both students and teachers for this positive work camp which deliver us so much lesson. I really appreciated what the students and the teachers from St Andrew University had been done in preparing this program long time before coming to Bali. Thank you for helping Widhya Asih Foundation especially for the children in Orphanage II Blimbingsari for this long age and I hope this program could be last forever. And also for the Indonesian students, thank you for the cooperation so far. You did really good job. See you in IWC 26th ...

Member of IWC25☆

- A班 谷川優☆(ゆう) ★A班リーダー
山内慎太郎☆(やまう) ★隊長
畑中沙織☆(さおり)
Vickie Vu Vross☆(フィッキー)
Jessica Geifenny☆(ジェシカ)
そのダンスにメロメロです♥Do ゆう like dance??
スマートに熟女を狙い撃ち!!!我らがリーダーやまうイルカ☆
モチモチ♥畑中1人カーニバル☆☆
気遣いのインドネシア版阿部ひろし。
電話・でんわ・デンワ!!! 照れた顔が最高でした!!!
- B班 小林弥生☆(やよい) ★B班リーダー
岡野峻佑☆(おかちん) ★副隊長
北坂知沙☆(ちさ)
小杉磨未奈☆(まみな)
Joshua A. Kansil☆(ジョシユア)
見たんです。忍者って本当にいるんですね…。
写真の変顔率No.1!!!IWC史上最強の脱衣系男子!!!
う〜んっと…ちさ、葉…いらなーい!!! が口癖の健康女子。
みんなの妹♥hari ini いきます!!! まみないきまーす!!!
Oh! yeah! 芸達者なサングラス。
- C班 石川輝佳☆(てるか) ★C班リーダー
中川美弥☆(みや) ★副隊長
鈴木央生☆(すずぎ)
岡崎涼☆(りょう)
Ni Putu Ari Devita☆(イタ)
Derry Lisandra☆(デリー)
単位は落とさないけど溝には落ちマース! amazing!!!
ツンツンツンデレ。頼れるアネゴ♥♥♥♥
「ほんとやだー!!!」鳥取なまりのマンデー鈴木☆
ギター持たせとこト クールなギター野郎。
痛っ!!! 絶大な包容力の天才児!!!
ハレルーヤ!!! お調子者のジェントルマン。
- D班 中西由茉☆(ゆま) ★D班リーダー
西口彰☆(あっくん)
北村穂波☆(ほなみ)
鈴野祐介☆(ゆうすけ)
Emy Ekasari☆(エミー)
どんなフリにも応えます!! 空気が読めるすべり人☆
「ワーキャン行ってよかったー!!!」が口癖のシャイボーイ。
あ〜癒し系。いつでもどこでも前髪切りまーす!!!
期待してもいじらないよ。 はいー、
あなたは変わり者。わたしも変わり者♪だって池マンディ!!!
- 引率教員、スタッフ
松平功☆(チャブレン)
三宅亭☆(三宅先生)
福田公教☆(福田先生)
南出和余☆(南出先生)
松山智樹☆(まっちゃん)
石井美和☆(美和さん)
Nengah Swikrama☆(スイクラマさん)
Nyoman Forman Supradinate☆(フォルマン)
我らが団長! キャプテン松平將軍☆
みんなを見守るちょっぴり辛口お父さん!!!
アドバイスは超的確!!! トークと腰は超ガタガタ!!!
スーパーショットをありがとう!!!みんなが大好きでっちの笑顔♪
見えないところで頑張ります!!!!THE奈良顔まっちゃん!!!
この人いなきゃワーキャンできません!!!! Love みわさん♥
インドネシアと日本の架け橋。みんなの優しいビッグダディ!!!!!!
笑顔が素敵なお兄さん、いや弟(笑) 日本語習得中☆



Terima kasih banyak 



テーマ

ワークキャンプのテーマは、「アジアの人々の協働から学ぶ」である。そして、私たちIWC25のテーマとして『アジアの人々と協力して、手と手を取り合って頑張る』という意味を込めた「Tangan dan Tangan」、日本語で「手と手」という意味のテーマを考えた。

「Tangan dan Tangan」を掲げたTシャツも作成し、現地でも日本人学生だけでなくインドネシア人学生、引率の先生方やみんなで着用し、Tシャツに込められた想いを胸にワークに臨んだ。このTシャツはアスラマの施設長であるワヤンさんや職員さんにも贈った。私たちのワークキャンプはテーマ通り、みんなで手と手を取り合い協力して行うことができた。

これが「Tangan dan Tangan」を掲げた今年のTシャツである。



IWC25 事前活動

5/12 事前学習スタート!!! 毎週月、木曜日5限
団長やまう、副団長おかちん、みやに決定!!
各班に振分け。
毎週月、木曜日の昼休みに集会室にてミーティング。

6/20 テーマ Tangan dan Tangan決定。
交流班、スポーツ班出し物決定。

6/27 Tシャツデザイン完成。

7/2 堺市立青少年の家で調理実習。(カレー)
サプライズでみや、おかちん、ゆうの誕生日のお祝い。
パイ投げをしてみんな顔面生クリームだらけに。

7/5 募金活動スタート (3週間)

7/14 結団式、懇親会

7/19 やまう、みや、ゆま、チャブレンで備品購入

7/21~22 発送荷物のパッキング。3箱に収めました。

7/28~8/5 10:00~15:00まで集会室で各班作業
5日は全体ミーティングを行いました。

8/7~8 合宿棟で合宿。

8/10~12 10:00~15:00まで集会室で各班作業、全体練習。

8/17~19 10:00~15:00まで各班通し。
18日南出先生とビデオ撮影の打合せ。
19日IWC24の方が来てくれました。

8/21 最後の事前活動



各班で作業を進める様子



衛生ミーティングの様子



最後の事前学習後の集合写真

夏休みに入り、土日以外は毎日10:00~15:00まで事前準備をしていた。

毎日遅刻者が続出で全員集合も減多になかった。しかし、ミーティングを繰り返し出発が近づくにつれ、みんなの意識が変化していったように感じる。

調理実習

○7月2日（土）堺市立青少年の家

材料

- ・バーモンドカレー・・・2箱
- ・肉・・・1kgぐらい
- ・じゃがいも・・・中6個
- ・にんじん・・・中2～3個
- ・玉ねぎ・・・中8個
- ・水と油・・・適量

*お米は一人一合ずつ持参!!!

*ご飯よそったり煮込むのは手の空いた人が協力!!!



*反省

- ・水を多く入れすぎた。
- ・味見をしなかった。
- ・役割分担をカレーを混ぜる係、ご飯をよそう係など細かく決めるべきだった。

○8月7日（日）シティープラザ

8月7日・8日で1泊2日の合宿をした。1日目に朝からシティープラザを借りて、今回は中辛カレーとハヤシライスを作った!!! 1回目の調理実習より上手くできて、美味しかった。1回目の反省から炒める係、混ぜる係、よそう係を作ったので効率よくカレーを作ることができたと思う。



*反省

- ・今回は肉の代わりにウィンナーを入れたがあまり美味しくなかった。やっぱり肉の方が美味しい!
- ・隊長がおたまを焦がすというハプニングがおきた(笑)

募金活動

- ① 目的…ウィディア・アシ財団の運営資金、一部セゴンの苗購入のため
- ② 実施場所…桃山学院大学チャペル前
- ③ 実施時間…7月5日から22日の昼休み（12：30から13：20）
- ④ 集金合計…約6万円

同年3月に東日本大震災が発生した。そのため、なぜこの時期に東日本への募金ではなくインドネシアへの募金なのか、中止すべきではないのかなどたくさんの批判もあり悩んだが、IWCが今まで24年間続け積み上げてきたものを継続させることが大切だと考えた。

私たちは、7月5日から約3週間に渡り毎日昼休みに募金活動を行った。募金の詳細についてのチラシを配りつつ呼びかけた結果、約6万円の寄付金を集めることができた。集まったお金は毎回1円玉、5円玉など種類別にし集計をした。この募金はバリ・プロテスタントキリスト教会のウィディア・アシ財団の運営資金として活用される。

私たちは、インドネシアで募金の一部を使った植林活動を手伝い、改めて自分たちの行ってきた活動の実感を得ることができた。私たちの植えたセゴンの苗は5年で20mほどに成長し3,000~5,000円もの値段で取引される。（インドネシアの一般家庭の平均月収は約5,000円である。）そのセゴンを売ったお金がたくさんの子どもの助けになるのである。

この募金に参加して下さった沢山の方々に改めて御礼申し上げます。

日付(7月)	集計金額
5日	16,593円
6日	8,745円
7日	1,101円
8日	3,362円
11日	9,322円
13日	1,706円
14日	4,851円
15日	4,040円
18日	8,780円
19日	1,500円
両替の端数	4,700rpa (47円) × 15
合計	60,705円



←私たちがインドネシアで両替した際に出た端数分のお金を募金しました。

合宿

8月7日～8月8日

合宿1日目

- 8:50 シアトルコーヒー前集合
9:00 シティプラザで調理実習（カレー、ハヤシライス）
隊長がヘラを焦がすハプニング!!笑
12:00 お昼ごはん（カレー）
具はソーセージ!!前回よりも断然おいしかった。
キリスト教センター移動 各班作業
16:00 体育館でスポーツ大会の通し
終わって、みんなでリレーとドッジボールで盛り上がった。
18:00 合宿棟移動
19:00 買出し等
夜ご飯（ハヤシライス）
20:00 お風呂
これでみんな裸の付き合い
21:30 日本語授業班発表
交流班発表
23:00 「天使にラブソングを、、、」鑑賞会
みんなのテンションがMAX!!
ひたすら「I Will Follow Him」の練習
5:00 就寝



日本語授業の通しの様子

合宿2日目

- 10:30 起床
11:00 キリセン移動
お昼寝タイム
13:00 各班作業
何とかしおり完成
17:00 衛生発表
小中訪問班決定
18:00 解散
みんなでスシロー



「天使にラブソングを」鑑賞会

8/26	金	7時	朝の集い	
		7時15分	朝食	
		8時	ムラヤ公立高校訪問(ユニホーム)またはワーク	日本語クラス授業 4クラス① A, B 班 7-7 C, D 班
		12時	昼食 休憩 ホームステイ先(天)に帰ってマンデイ	
		15時	ワーク	
		18時	夕食	
		19時	ミーティング	
		20時	帰宅 就寝 21時には必ず帰る!!	プリンピンサリ
8/27	土	7時	朝の集い	
		7時15分	朝食	
		8時	ムラヤ公立高校訪問(ユニホーム)またはワーク	日本語クラス授業 4クラス② C, D 班 7-7 A, B 班
		12時	昼食・休憩	
		15時	ワーク	
		18時	夕食	
		19時	ミーティング	
		20時	帰宅・就寝	プリンピンサリ
8/28	日	7時	朝の集い	
		7時15分	朝食	
		8時30分	出発	
		9時	プリンピンサリ教会訪問(正装)	
		11時15分		
		12時	昼食・昼休み	
		15時	スポーツ大会	12時～又ガラ出発
		17時	スポーツ大会終了 自由時間	14時 パレードに参加。
		18時	夕食	
		19時	ミーティング	
		20時	帰宅・就寝	プリンピンサリ
8/29	月	7時	朝の集い	
		7時15分	朝食	
		8時00分	ワーク、日本食の材料買い出し(引率:南出)	
		12時00分	昼食	(アスラムお泊り)
		14時30分	日本食の準備	ゆう ゆま ita
		17時	日本食パーティ	ホームステイ先家族と子どもたち おかしん すすき Joshu
		19時	ミーティング	
		20時	帰宅 就寝	プリンピンサリ

8/30	火	7時	朝の集い	
		7時15分	朝食	
		8時	ワーク開始	
		12時	昼食・昼休み	
		14時	交流会準備	スタッフはホームステイ先訪問
		18時	夕食	
		19時	交流会 学生と子供たち主催 (IW(25Tシャツ))	
		21時	ミーティング	
		21時30分	帰宅、就寝	プリンピンサリ
8/31	水	7時	朝の集い	
		7時15分	朝食	
		8時	ワーク開始 パラサリ訪問 (ユニフォーム)	作業の確認
		12時	昼食・昼休み	トラックで移動 (アスラマお泊り)
		15時		
		14時	パラサリ訪問(ユニフォーム) スポーツ大会 サッカー試合 日本女子学生VSイザ	カトリック教会と施設見学・交流 ほなみ やよい ちこ Emmy やまう Vickie Derry
		17時	帰宅 自由時間	
		18時	夕食	
		19時	ミーティング	
		20時	帰宅、就寝	プリンピンサリ
9/1	木	7時	朝の集い	
		7時15分	朝食	
		8時	ワーク そうじ、系統しぼいのミーティング	(アスラマお泊り) みや でるか まかな さおり あ、くん りょう
		12時	昼食・休憩 プリンピンサリ村のプール!!	
		15時	系統しぼいのミーティング	小中訪問交流の準備/スタッフはマニユボ村へ
		18時	夕食	
		19時	ミーティング	
		20時	帰宅、就寝	プリンピンサリ
9/2	金	7時	朝の集い	
		7時15分	朝食	
		8時	小・中学校訪問・交流 (ユニフォーム) → 中学校系且は授業後、第5アスラマ 見学	2グループに分かれて 2班にわかれて訪問 授業参観の後、 日本語授業やゲーム スポーツ、歌の指導 等をして過ごす。中学校はムラヤ、トラックで移動。
		12時	昼食・昼休み	
		13時45分		
		14時	子どもたちの出身村訪問(ユニフォーム) 中島子、くろ長ズボン	
		17時	帰宅、自由時間	
		18時	夕食	
		19時	ミーティング	
		21時00分	帰宅、就寝	プリンピンサリ

9/3	土	7時	朝の集い	
		7時15分	朝食	
		8時30分	フリータイム	荷造り等
		12時	昼食・昼休み 石臼磨園に行きたい!! <13:00にアスタマ!!	
		15時	子どもたちと村内散歩	
		18時	離村式 (貸りた民族衣装)	インドネシア語で謝辞
		19時	会食 (バビグリン)	
		21時	ミーティング	
		21時30分	帰宅、就寝	プリンピンサリ
9/4	日	7時	朝の集い	
		7時15分	朝食	
		9時	プリンピンサリ出発	
		12時	ウンタルウンタル到着、昼食 (IWC25Tシャツ)	昼食後、交流会 & 自由時間
		15時30分	ホテルへ	ホテルにてエバリュエーション準備1 ミーティング
		18時	夕食	
		19時	ミーティング	
		20時	就寝	ディアナブラ H
9/5	月	7時	朝の集い	
		7時15分	朝食	
		8時		
		8時30分	PPLP/MAPINDO訪問(正装(ユニフォーム))	
		12時	マタハリで昼食と探訪	各自で昼食すること:両替可
		18時	夕食	
		19時	エバリュエーション準備2 ミーティング	
		20時	就寝	ディアナブラ H
9/6	火	7時	朝の集い	
		7時15分	朝食	
		8時30分		
		9時	文化探訪	ヒンドゥ文化
		12時	昼食	
		13時	文化探訪	ヒンドゥ文化
		16時	ホテル帰着	
		18時	夕食	
		19時	エバリュエーション準備3 ミーティング	
		20時	就寝	ディアナブラ H

9/7	水	7時	朝の集い	募金のお金を渡す。 ノサルア5つの宗教施設へ ノサルアにて マタハリ、フリー、各自夕食
		7時15分	朝食	
		9時	エバリュエーション(正装)	
		10時30分	終了	
		11時	アガベールフェスティバル(正装)	
		12時	感謝の昼食会	
		14時	チェックアウト!!	
		14時30分	荷造り フリー、出発準備	
		15時	インドネシア学生と手紙交換、お別れ会	
		17時	フリータイム	
9/8	木	22時	ホテル出発(ユニホーム)	機内泊
		22時30分	搭乗手続き	
		24時45分	GA882便にて出国(所要時間7:00、時差+1時間)	
		8時50分	関西国際空港	
		9時25分	入国手続き	
		10時00分	感謝の祈り・解散	



ワークキャンプ中に使用したメモ帳、日記帳



WWC25 しおり

ソカでの植林プログラム

8月24日

去年からキャンプのプログラムに入れられたソカでの植林。近年進む地球温暖化によって、インドネシア国内にある樹齢25年以上の木々を他の国々が伐採できなくなった。そこに着目し、木を植え、それを売って施設運営の資金にするという計画が進められている。

私たちは1本100円のセゴンという苗木を植えた。(100円と聞くと安いと感じるかもしれないが、インドネシアでは100円で2キロの米を買うことができる。) その苗木は5年で20mほどに成長し、1本3,000円から5,000円の価値になる。この木は紙の原料などに使われる。

2日で700本の苗木を植えるというのが私たちの目標だった。作業内容は、まず、穴の中に肥料を入れてそれに水をかける作業。(穴は私たちが来る前の日に、現地の職員たちやイブたちが掘ってくれていた。) 次に、苗木をその中に入れる作業。そして、上から土をかぶせる作業。この順序でメンバーと現地の人たち、先生方で協力して行った。まず、肥料の入れ忘れの穴ができないように、横1列に並び上から下へと進んで入れるようにした。肥料を入れ終わると、バケツリレーで水をかけていった。その後は、また列を作り、上から下へと苗木を植えた。午前中で半分以上植え、最終的には750本も植えることができた。1日で2日分の目標を達成できたため、次の日は今後のためにミーティングを行った。

日中の気温は40度を超えていたが、風が涼しくて作業が捗った。しかし、体感温度が低い分、体力の消費に気づかないことが多いので、休憩は日陰でたくさん取り、水分もこまめに摂るようにした。休憩中にバナナなどを現地の人からいただいたりもした。モンキーバナナの甘さには感動した。

1日で750本も植えることができたのは、自分勝手な人がいなく、みんなで協力し合えたからだ。みんなリーダーの言うことを素直に聞き、指示に従い、とてもスムーズに作業することができた。みんなで協力することの大切さをここで学ぶことができた。



ソカ村について

8月24日のソカでの植林の後、ソカ村の見学をした。洗濯やマンデイをする場所は屋外にあり、村の人が男女共有で使っていた。

村の生活水には農薬が混じっており、ろ過されているが十分なものでなく、少し濁っていた。

村の人々はその水で生活をしている。120万円で井戸を作る計画が進められているが、維持費もかかるため難しい現状である。



生活水をろ過する機械
真ん中いろ過された水が貯まる仕組み

入村式

8月25日

バスに揺られプリンビンサリ村に着いた時は、まだ少しソカの疲れが残っている状態だった。アスラマの前にバスが止まり、歩いてアスラマの中へと入っていくと、椅子とココナッツジュースを用意してくれておりみんなは席に着いた。その時なぜか正装をした子どもたちが、遠くの方で私たちの様子を窺っていた。

どうやら子どもたちは、私たちがバスから降りるとすぐパレードを始める予定だったようだが、私たちが早く着いたことで段取りが上手くいかないようだった。子どもたちはどうしようかと戸惑いながらも演奏を始め行進してくれた。その姿が今でも覚えているくらい可愛いく、演奏も素晴らしかった。



子どもたちによる歓迎パレード



IWC25への歓迎の旗

ホームステイ先の発表も終わりアスラマの子どもに連れられてホームステイ先へ行き、その後またホストファミリーと入村式のためアスラマへと戻ってきた。施設長のワヤンさんや教会の方のお話を聞き、その後子どもたちによるガムランという伝統の楽器を使った演奏を聴き、バリダンスを見た。子どもたちの一生懸命な姿はとても素敵だった。

ホストファミリーとの初めての食事はみんな緊張して中々話せていない様子だった。

(実はこの後三宅先生による喝を受け、足早にホームステイ先に帰った...)

私たちのプリンビンサリ、アスラマでの生活が始まった。



歓迎のバリダンス



ガムラン演奏

プリンビンサリ村

私たちが10日間お世話になった村が、このプリンビンサリ村だ。ここが私たちの活動拠点だ。プリンビンサリ村はキリスト教徒の村である。私たちが通った児童養護施設アスラマヤ、お世話になったホームステイの方々の家もこのプリンビンサリ村にある。そしてこの村の中心地点に十字路があり、その近くに教会が建設されている。村の人たちは毎週日曜日に、この教会へ集まり礼拝を行う。私たちがこの礼拝に参加した。その時に、事前に練習してきた「I Will Follow Him」をみんなで歌った。上手く歌えたかは微妙だが、緊張しながらも楽しく歌えた。

この村はバリ・プロテスタントキリスト教会によって運営されており、去年エバリュエーションで意見された事が繁栄されていた。例えば、街灯の数が増えたり、野良犬の数もかなり減っていたようだ。それでも日本に比べると街灯はまだまだ少なく夜道は真っ暗で、歩いていると犬に囲まれたり、吠えられたりしたので、慣れない私たちはみんなで固まって帰った。

最後に、このプリンビンサリ村に来て1番に感じたことが、村の人の温かさだ。知っている人、知らない人関係なく、すれ違うと必ず挨拶してくれた。私たちがそれが自然になり、アスラマヤに行くまでにたくさんの人と笑顔で挨拶した。プリンビンサリ村は、活動の拠点としてとてもお世話になった村と同時に、たくさんの方の温かさに触れることのできた村でもあった。



笑顔で挨拶を交わす子どもたち



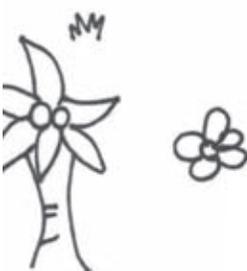
放し飼いにされている犬



村のバリ・プロテスタントキリスト教会



グリーンピンサリ



ゆう・ほなみ

てるか・まみな



プール あっくん・ゆうすけ



おからん・シヨシヨ



やあ・エリ



図書館



アスラマ

教会

みんなで飲んだ
ジュース

行きつけの店



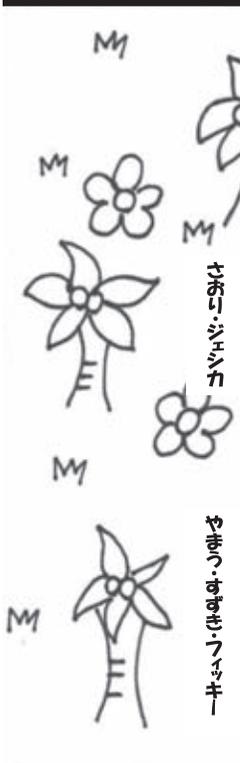
りょう・テリー



小学校

ゆま・さし

みや・イタ



さあ・ら・シ・シ・カ

さあ・ら・シ・シ・カ



アスラマ

●アスラマについて

「アスラマ」はインドネシア語で「学寮」という意味である。バリ島には40施設あり、そのうちバリ・プロテスタントキリスト教会が7施設を運営している。貧困や虐待などの理由で親元を離れた子どもたちが、集団で生活をしている。IWC25の活動拠点である第2アスラマには、3～17歳の子どもたちが約80人いて、うち約90%が小学生である。

子どもたちの親は、貧困や十分な教育を受けることができなかつたので、低賃金の仕事にしか就くことができず貧しい生活が続いている。施設にいる子どもたちの約60%が貧困家庭である。子どもたちの学費や生活費は、ドイツやアメリカなどのNGOが支援している。また、医者が月に一回、子どもたちを診察するために第2アスラマへ来る。



●自給自足

アスラマでは自給自足の生活をするための様々な工夫がなされている。

- ・2010年春、アメリカ製の浄水器の寄付により、水を買わずに済むようになった。
- ・食用でもあり、水を清浄化してくれるなまずを養殖している。
- ・台所から出た生ごみや牛の糞を肥料として利用している。
- ・豚の糞尿から発生するメタンガスを利用してガス代を補っている。
- ・インゲン豆は食用の他に、土壌を良くする働きがあるため、始めに多く栽培している。
- ・飼育しているアヒルは1日に30～40個の卵を産む。





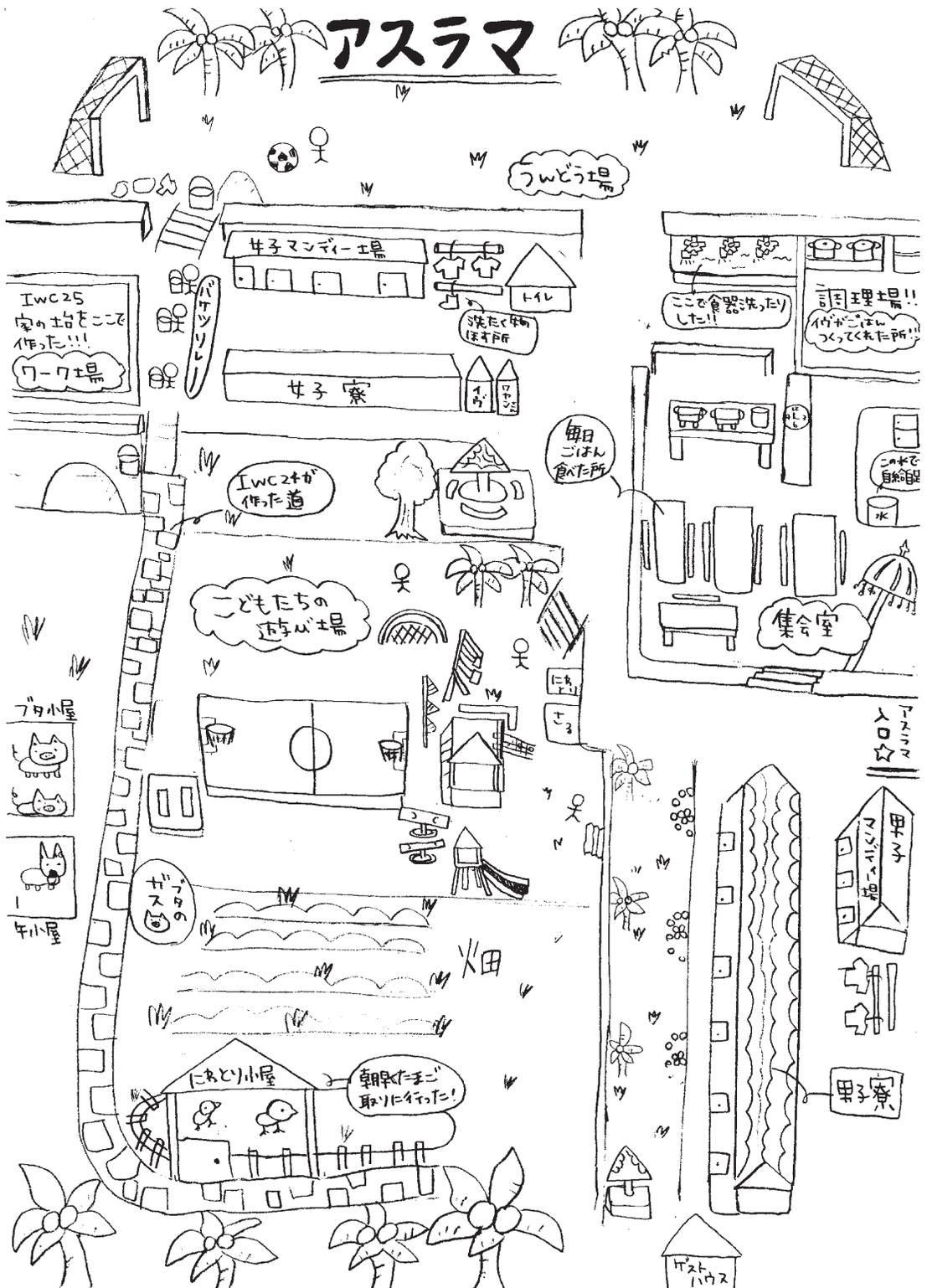
●施設内改善

去年、IWC24がエバリュエーションで出した案を元に、アスラマの施設内が改善されていた。第2アスラマでは将来、子どもたちの木造のベッドを丈夫な鉄製のものに総入れ替えし、男子寮を建て直す予定だ。

- ・手洗い、食器洗いのための水場が増え、屋根ができた。
- ・洗濯機が増設され、新しくなった。
- ・マンディ場が清潔になり、壊れかけていたドアも新しくなった。
- ・施設内の公園の砂地が一部整備され、バスケットコートができた。
- ・ゴミ箱が増設され、分別できるようになった。
- ・食器棚が設置された。



アスラマ



アスラマの子どもたち

子どもたちの1日

- 4:30 起床・マンデイ
- 5:00 朝の祈り
- 5:30 朝食・掃除
- 6:30 登校
- 7:00 授業開始
- 12:00 授業終了・下校
- 12:30 昼食
- 13:00 昼寝
- 15:00 起床・宿題や課外活動
- 16:30 仕事（掃除など）
- 17:00 マンデイ
- 18:00 夕食
- 19:00 宿題・自習
- 21:00 就寝



いろいろな理由で親と暮らすことができないアスラマの子どもたち。「親と離れて暮らす子ども」は「いつも親と一緒にいる子ども」と全く違うことに気がついた。「いつも親と一緒にいる子ども」は我がままで人見知りで、自分のことは親にしてもらっているイメージがある。しかし、親と離れて暮らすアスラマの子どもたちは掃除や食器洗いなど、自分たちのことは全部自分たちです。しっかりしていてどこか大人っぽい部分があった。そんな子どもたちだが、私たちの前ではとても元気で素直で人懐っこい。すぐにくっついてきてとても甘えてくる。普段甘える人がいない子どもたちは、全力で私たちに甘えてきてとても嬉しそうだった。私たちはアスラマの子どもたちとの時間をとても大切にしたい。たくさん遊んだり、掃除を手伝ったり、私たちは子どもたちにたくさんの愛情をそそいだ。しかし、子どもたちの純粋で素敵な笑顔に私たちはそれ以上の愛情をもらった。



第25回IWCのワーク内容

8月26日～9月1日

今年度のワーク内容は、アスラマに新しく建てる女子寮の土台作りだった。日本での事前準備は、何をするのかははっきりわかっていなかったので何もできなかった。重労働とだけ聞いていたので不安もあったが、準備のしようがなかった。

土台作りだが、まずは近くのグラウンドに積まれた大量の砂や岩を、新しく建てる女子寮の近くに移さなければならなかった。バケツに小さめの岩や砂を入れ、列を作り、バケツリレーをした。バケツにシャベルで砂を入れる作業が想像以上に大変だったので、交代しながら行った。大きな岩は力のある男子学生が担当した。今年は主に、この地道な作業だった。この作業の途中からは、新しく建てる女子寮の両サイドに穴を掘り作業をするグループと、バケツリレーのグループに別れて作業を行った。

砂と岩を移し終わり穴も掘り終わると、次は掘った穴に砂のセメントと岩で土台を作っていく作業だった。女子学生がバケツリレーでセメントを運び、男子学生が岩とセメントで土台を作っていた。職員の指示に従い、みんなで協力し土台を作り終えた。この寮が完成すれば私たちが作ったところは見えなくなる。しかし、見えないところを作るという貴重な体験ができて良かった。

気温がすごく高い中で作業だったので、30分ごとに作業と休憩を繰り返した、水分もこまめにたくさん摂るようにした。ワーク中の皆の雰囲気は良く、とても楽しくできた。そして、ワークや植林でのバケツリレーなど現地の人たちを含め、みんなで協力し合うことができた。その様子がまさに今年のテーマ「手と手」そのものだった。



←before

バケツリレーの様子



after→



日本語プロジェクト

8月26・27日

●事前準備

IWCの活動の中に、ムラヤ高校を訪問して日本語授業を担当するプロジェクトがある。今回は上級2クラス、初級2クラスに2日間授業をするということで、私たちも4班に分かれることにした。「楽しみながら日本語を学ぶ」をコンセプトに準備を進めた。授業内容はビンゴゲームや絵ゲーム、日本文化紹介など、みんなで色々な案を出し合い、日本語を使ったゲームを多く取り入れた。インドネシア人学生と協力して授業を進行していくということで、英訳した授業の台本も用意した。この台本の英訳や、教材作り（カルタ、ビンゴ等）には苦労したが、みんなで協力して完成させることができた。また、生徒たちは上級も初級もレベルはあまり変わらないと聞いていたので、同じ授業内容にすることにした。

●現地到着～プロジェクト実行

現地で授業の日数が1日減ることになり、授業内容を大幅に削ることになってしまった。時間をかけて準備したものが全部できなかったのは少し残念だったが、みんな臨機応変に対応してくれた。授業当日までに約5回ミーティングをして、本番に備えた。インドネシア人学生には、私たちが英訳した授業の台本をインドネシア語に訳してもらった。また、生徒へのルール説明の時などとても助けられた。しかし、台本は事前準備の段階でインドネシア語に訳しておいた方がインドネシア人学生の負担を減らすことができるだろう。

<授業内容>

- ・あいうえお発音 … あいうえお表を作って持って行き、みんなで発音練習した。
- ・名札作り …… 一人ひとりに名札を配り、ひらがなで名前を書いてもらった。
- ・自己紹介 …… 名前や趣味などを日本語で1人ずつ言ってもらった。
- ・ビンゴゲーム …… 「りんご」「うさぎ」などの単語カードを使ってゲームをした。
- ・歌（心の友） …… インドネシアで有名な日本の歌「心の友」を、歌詞の意味を紹介して、みんなで歌った。
- ・日本文化紹介 …… 富士山や忍者などの日本文化写真を用意して、紹介した。
- ・告白ゲーム …… 日本語での告白の仕方を教え、生徒に前に出てきてもらい、好きな人に告白してもらった。

*スケジュール上できなかったもの

絵ゲーム、数字ゲーム、曜日ゲーム、マナー講座、カルタゲーム

スケジュール上この場ではできなかったが、多めに用意しておいた方が臨機応変に対応できるだろう。

●初級クラスと上級クラスの違い

初級クラスと上級クラスでは、ほぼ同じ授業を行ったが、進行速度に差が出た。1年間の勉強がしっかり身につけている証拠である。初級クラスでは、盛り上がると思っていた五輪真弓さんの「心の友」という歌と一緒に歌ったのだが、歌詞を知らない生徒が大半だったので思ったようには進まなかった。しかし、上級クラスでは大いに盛り上がった。ひらがなを書くレベルも大きく違い、初級クラスではここに時間を使うことが多い。年齢的なものもあるだろうが、初級クラスの方が恥ずかしさや遠慮がなく、ゲーム感覚の授業に向いていると感じた。



●感想

私たちは教壇の前に立つのも初めてで、とても緊張していた。しかしムラヤの高校生たちは笑顔で迎えてくれ、1人ひとり自己紹介してくれた。また日本の文化紹介では、みんな興味があるようで真剣に聞いてくれた。そして、「告白ゲーム」では、成功した時にはみんなで歓声を上げてとても盛り上がった。こうして楽しい雰囲気の中、無事授業を終えることができた。生徒たちの純粋な笑顔、真剣な顔が印象的だった。充実した授業内容にできたのも、インドネシア人学生の万全なサポートのおかげだ。2時間という短い時間だったが、日本語を教えるという、普段では味わえない貴重な体験ができた。



パレード

8月28日

私たちはヌガラ島の生誕を祝う文化芸能パレードに参加した。去年までのIWCは観客として参加していたが、今年はパレードの行進と一緒に参加させていただいた。パレードに参加していた人たちは、伝統的な衣装を身に纏っていてとても綺麗で圧倒された。私たちが衣装をパティックで統一して、少し仮装をした。また、テレビで報道され、バリ島中にこのパレードが映された。



他県や他島からも集まる祝福のパレードなので、観客も参加者もとても多かった。その為、行進もなかなか進まず10分待つては少し進むというのを繰り返していた。そして、それぞれの団体ごとにムラヤの群長のいる主賓席の前でなにか披露をしていた。

急遽、私たちが群長の前でなにかを披露することになった。出番が迫る中、交流会で披露する予定だったAKB48の「ヘビーローテーション」のサビを踊ることに決めた。即席でインドネシア学生にも覚えてもらい、なんとか形になったものを披露した。このことから「現地でいかに臨機応変に動けるか」ということがとても重要であると感じた。また、事前準備をきちんとしていたことでこのような結果が得られたように思う。



観客がたくさんいることがわかる



主賓席。ここで踊りを披露

日本食

8月29日

10日間お世話になった、ホストファミリー、アスラマの子どもたち、アスラマのスタッフ、イブたちに感謝の気持ちを込めて日本食としてカレーライスを作った。約200人分ということで、簡単にたくさん作ることができるカレーライスが一番良いと思った。また去年も好評だったアイスクリームも買うことにした。

効率よく進めるためにA. B. C. D各班で役割を決め、何の食材を切るか、だいたいのサイズ、炒める係、混ぜる係、よそう係など細かく事前に役割分担をした。コンロは4台（計6口）あったが、米を炊くために使ったので、実際は3つしか使えなかった。当日の午前中、他のメンバーがワーク作業をしている間に日本食係2名、教員1名、イブ1名、ドライバーの計5名で肉屋とスーパーへ買い出しに行った。スーパーだけでは全て買えなかったため市場にも行った。

* 買い出しリスト *

- ◎豚肉 20kg
- ◎玉ねぎ 10kg
- ◎じゃがいも 8kg
- ◎にんじん 5kg
- ◎油 1ℓ
- ◎アイスクリーム 110個



スーパーには、玉ねぎが少ししかなかったので市場に行き購入した。豚肉が16kgしか手に入らないという問題もあった。水はアスラマの浄水された水を使わせて頂いた。

* 調理のために日本から送った物 *

- ◎まな板6枚 ◎包丁8枚
- ◎ピーラー3個 ◎洗剤2個 ◎包丁とぎ1個
- ◎おたま3枚 ◎しゃもじ4個 ◎布巾6枚

少しでも送る荷物を減らすために、カレールー6箱分（6kg）は分担して日本から持っていった。事前研修で調理実習を2回行った。実際、200人分作ると問題点もたくさん出てきたが、その度みんなて話し合い改善していった。

当日は問題点や反省点もあったが、日本食係を中心に1人1人が判断し、臨機応変に動けたと思う。また、みわさんと南出先生には沢山アドバイスをして頂き、とても感謝している。子どもたちやホストファミリーがたくさんおかわりをしてくれ、美味しそうな笑顔を見ることができたので良かった。いつもみんなのご飯を作っているイブ達もこの時だけは、少し休めたと思う。片づけの時に、キッチンを貸してくれたイブに感謝の気持ちを込めて、キッチンの普段イブたちが掃除できてなさそうな所をみんなで掃除した。カレーも美味しいと言ってもらえたのでとてもやりがいを感じた1日だった。

問題点・反省点・改善点

- ◎時間がギリギリだった
- ◎にんじんが固かったので、切るのも、火が通るまでも時間がかかった
→にんじんをもう少し小さめに切ればよかった
- ◎ご飯が足りなくなった→おかわりの分は別に置いておくべき!!!
- ◎コンロの火の強さが弱く、時間がかかった
- ◎200人分に対し、鍋が小さく大変だった



班に分かれて野菜を切っている様子



野菜を炒めている様子



アスラマの台所
カレーを煮込んでいる様子



完成!!!



食べている様子! enak☆

★次のページ (P.42) の作り方を
事前に準備し、しおりに載せて行きました。

カレーの作り方 (How to cook curry)

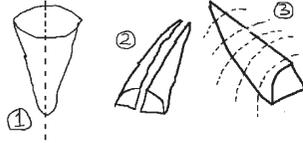
まずは切る!! (First, cut!!)

お肉 (meat)

- ① 3cmにくらいに切る (cut a beef about 3cm)

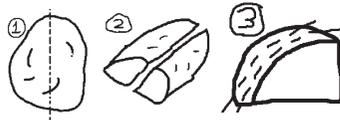
人参 (carrot)

- ① 半分に切る (cut a carrot in half)
 - ② また、半分に切る (cut a carrot half again)
 - ③ それを、縦に切る (cut a carrot in lengthwise)
- ★ 2cmくらい (about 2cm)



じゃがいも (potato)

- ① 半分に切る (cut a potato in half)
 - ② また、半分に切る (cut a potato half again)
 - ③ それを、縦に切る (cut a potato in lengthwise)
- ★ 3cmくらい (about 3cm)



たまねぎ (onion)

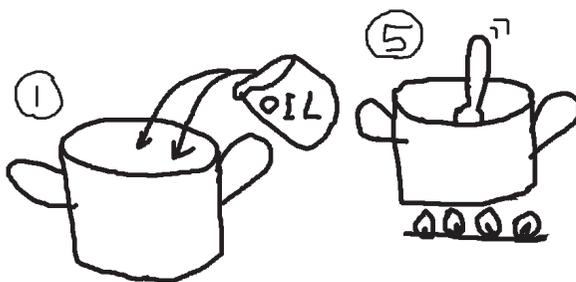
- ① 半分に切る (slice a onion in half)
- ② 縦に切る (slice a onion in lengthwise)



作る!! (Let's cook!!)

- ① なべに油を入れる (put oil in a pot)
- ② 油でお肉を色がつくまでいためる (fry the meat in the oil until golden)
- ③ 野菜を加え一緒にいためる (add vegetables and fry them together)
- ④ その後、水を加える (after that, add water)
- ⑤ カレールーをいれ、弱火でコトコト煮る (put curry roux when it's boiled and simmer on low heat)
- ⑥ 完成!! (finish)

水の前に野菜の
硬さ check!



ルーの味見してね★
(please taste a seasoning of roux)

時々混ぜるのを忘れないでね～★
(Don't forget to stir sometimes!)

交流会

8月30日

私たちは、子どもたちとの親睦をより深めるために交流会を行った。食事や集会に使う広間の机を全て退かし、観客用に椅子だけを広間を囲むように残すと、あっという間に立派な舞台が完成した。開始のあいさつで交流会が始まった。まず、子どもたちが私たちに出し物を披露してくれた。

子どもたちはバリの伝統的な歌とダンスを披露してくれた。子どもたちは伝統衣装に身を包み、いつもの印象とは違った。男の子のガムラン（インドネシアの伝統的な打楽器）に合わせて女の子がバリダンスを踊ってくれた。バリダンスは低学年と高学年で分かれて踊ってくれた。ガムランの音色とバリダンスの優美さが混じり合ってすごく綺麗だった。その次に、子どもたちは全員で歌を披露してくれた。ギターの音に合わせて一生懸命に歌う真剣な姿がすごく印象に残っている。ずっとカメラを手放せなかった。



バリダンスを踊っているところ



ガムランを演奏する姿

<プログラム>

「Hari ini」	歌	学生全員
	歌	インドネシア人学生
「ビリーブ」	歌	日本人学生
「未来へ」	歌	日本人学生
「ポチヨポチヨダンス」	ダンス	学生全員、子どもたち
「ヘビーローテーション」	ダンス	日本人学生
「チョコレイトディスコ」	ダンス	おかちん・ゆう・すずき
「マカレナ」	ダンス	学生全員・子どもたち
「心の友」	歌	学生全員
「I will follow him」	歌	学生全員
「SAYONARA」	歌	学生全員

私たちも歌とダンスを披露した。最初に「hari ini」を歌い、わたしたち学生の出し物が始まった。その次にインドネシア人学生が歌を披露してくれた。たった6人なのに歌の上手さは圧巻だった。そして日本人学生で歌を披露。この後予定していた「世界にひとつだけの花」はギターの調子が悪く出来なかった。立て続けに日本人学生がダンスを踊った。これで学生も子どもたちもとても盛り上がり、そのまま全員参加型のダンス「ポチョポチョダンス」「マカレナ」を踊った。覚えやすいものだったので子どもたちもすぐに習得して一緒に踊ってくれた。



そして「心の友」「I Will Follow Him」をインドネシア人学生と歌いバリダンスをみんなで踊った。1人ずつ踊りに参加していき非常に盛り上がった。そして、交流会の最後には「SAYONARA」を学生で歌って、花道を作って子どもたちを見送った。これは毎年恒例になっており、子どもたちもこの歌が始まると自然と花道を通して帰っていった。この交流会を通して、子どもたちと私たち学生はより仲良くなることが出来た。次の日には、子どもたちが「マカレナ」を踊って見せてくれたり、深く関わるための一つのツールとして交流会はなくてはならないものだと感じた。また、私たち学生も交流会の準備などを通じて深く関わり合うことが出来た。私たちにとても重要なプログラムだった。



<反省と改善点>

交流会で使用したCD再生機などは、事前にワヤンさんにCD再生機を借りる交渉をしていたので、トラブルもなく無事使用できた。交流班班長及び司会は、交流会前日か当日の朝にワヤンさんと交流会についての要望、予定などをしっかり話し合うべきである。出し物の曲についても、もっと子どもたちの参加できるようなものが良かったと思う。

また、インドネシア語を話せないのでインドネシア人学生に非常に助けてもらった。インドネシア人学生とは意思疎通できるようにしておくべきだ。交流会のような発表会でよくあるケースは、時間配分が難しい。今回もそうであった。対策としては、出し物のうちいくつか絶対やりたいものを決めておくことだ。あとは臨機応変にカットしたり、順番変更できるようにしておくべきである。



パラサリ訪問

8月31日

施設内容

この施設は、カトリック系の児童養護施設である。

施設費は寄付金で全てをまかなっており、右の写真の教会は観光地や巡礼地となっており多くのキリスト教信者が訪れる。



パラサリの教会前で子どもたちと

パラサリへ到着すると、シスターから歓迎の言葉の後に子どもたちから歌のプレゼントがあった。

私たちがダンスや歌を披露した。

←子ども達の合唱

(目的)

パラサリへの訪問は、ただの訪問ではなく施設見学と同様に私たちの活動拠点である第2アスラマとの比較をしながらみていき、第2アスラマの現在の問題点について考えようという目的だった。

気づいた点としては第2アスラマでは部屋のベッドを二人で共有していたり、日中でも室内は暗く、読書等学習できない状態だが、パラサリでは部屋全体に光が射しベッドも1人ずつ用意されていた。

ロッカーについても第2アスラマは個人だけという独立した物入れがなく、多くの子がサンダルなどをすぐに捨てたり失くして裸足で遊び、それが原因で足への怪我、細菌感染などがみられた。パラサリは1人ひとりに大きな荷物箱が設置されており第2アスラマにも荷物箱を作るべきではと考えた。

他にもトイレとマンディー場が別であったりと、全体的に清潔な印象だった。



荷物箱を調査



1人ひとりにベッドがあって広々とした空間

スポーツ大会

8月31日

私たちは、子どもたちとの交流の一環としてスポーツ大会を行った。しっぽとり競争と借り人競争の2種目を行う予定だったが、前日にイブたちから日本人女子学生とサッカーの試合をしたいという要望があり、スポーツ大会の時間が1時間短くなってしまった。これにより、私たちは予定を変更し、しっぽとり競争のみを行うことにした。しっぽとり競争はチームを4つに分け、3セット行い得点制で行った。

しっぽとり競争のルール説明の時、私たちの英語ではインドネシア人学生にはなかなか伝わらなかった。実際に一緒に遊んでみて理解してもらった。そのおかげで、インドネシア人学生が子どもたちにわかりやすくルールを説明してくれ、スムーズに競技が進んだ。ルール説明では、言葉の壁にぶつかったが、みんなの協力で理解し合うことができた。この競技は女の子と男の子ともに積極的に参加してくれ、楽しんでくれた。競技前には日本人学生が日本語で盛り上げてくれ、全員が楽しめていたと感じた。その日の夕食の後に、子どもたちからしっぽとり競争で遊ぼうと誘ってくれ、改めてスポーツ大会をして良かったと感じた。



反省点

- ① しっぽとり競争2セット目の後に休憩を入れたのだが、休憩の時間や競技再開の時間を学生に伝え忘れており、3セット目を始めるときに少し手間取ってしまった。
- ② 最後の景品配布の時に、子どもたちに景品を選ばせる時間を取りすぎて、他の子どもが待ちくたびれ、泣いてしまった子もいたので景品の配布をもっとスムーズに行うべきだった。
- ③ ルール説明で使う英語とインドネシア語の完成度をもっと上げておくことができていたならば、他のことに使える時間が増えていただろうと感じた。



衛生指導・そうじ

私たちは、子どもたちの衛生指導を目的に紙芝居を行った。日本での事前準備の段階で日本のアニメキャラを使い、紙芝居を作成した。現地の様子を見ていき、文化の違いをどう伝えるのか、どう理解してもらうのかに苦戦したが、インドネシア人学生と協力して形にしていった。自分たちの伝えようとしていたことと、インドネシア人学生が伝えたいことを一致させるのが難しく苦労した。そのために、紙芝居はインドネシア人学生に読んでもらい、意見を出し合った。最終的に紙芝居の内容は食事前の手洗い、はみがき指導、マンディ指導の3つを行うことに決めた。インドネシア人学生は、私たちが準備した紙芝居をストーリー仕立てにし、子どもに伝わりやすいよう改善してくれた。子どもたちは楽しみながら、しっかりと学んでくれたように感じた。

それに加えて私たちは、活動中頻繁に使用していたトイレの掃除、台所の流しの排水溝の掃除を行った。トイレの掃除では、あらかじめ持ってきた重曹などを使ったが、なかなか汚れが取れず、全てキレイにすることはできなかった。台所の流しは、食器洗いのおきに毎回水が詰まっていた。排水溝に食べかすなどが大量に溜まっていたので、そこを重点的に掃除をした。



9月1日紙芝居の様子

小学校訪問



9月2日

小学校訪問では、ムラヤ公立高校で授業をした時に使用した日本語教材をそのまま代用した。事前準備で何時間もかけて作った教材を高校訪問だけで終わらせずに、小学校・中学校でも使用した。一つでも多く日本について知ってもらいたかったからである。事前準備の段階で小学生の人数が少ないと聞いていたので、予定を変更し、1～3年生・4～6年生に分けて授業を行った。実際行ってみると1学年だいたい20人くらいで、

1つの教室に3学年が入ると少し窮屈に感じたが、全員が座れるスペースはあった。

あいうえお表、合唱（心の友）、日本文化紹介、歌、じゃんけん列車、人間知恵の輪など授業だけでなく、ゲームも取り入れて時間ぎりぎりまで子どもたちと楽しい時間を過ごした。合唱（心の友）の時には授業を見ていた小学校教員の方からの要望で、歌詞の意味を子どもたちも理解できるようにと、日本語からインドネシア語へ訳したりもした。

感想としては、子どもたちが一生懸命メモを取っている姿を見て、インドネシア語と日本語を照らし合わせて教えられるような単語カードを作っていれば、もっと日本語を知ってもらえる事ができたと思う。じゃんけん列車・人間知恵の輪では、教室の隣の小さな広場を使って思う存分楽しんだ。子どもたちの元気で無邪気な姿が印象的で、その笑顔につられて私たちも自然と楽しんでた。次の日、アスラマへ行くために小学校の前を通ると、私たちが教えた日本語の歌が聞こえてきて、私たちは自然と笑顔になっていた。



1～3年生



4～5年生

中学校訪問

9月2日

(中学校について)

私たちが訪問させてもらったムラヤの中学校は、プリンビンサリ村の第2アスラマから車で20分のところにある。この中学校も、バリ・プロテスタントキリスト教会が運営しており、生徒の約9割が学校裏にある第5アスラマの子どもたちだ。今年度の生徒数は80人で、1年生は女子学生が多く、2・3年生は男子学生が多い。職員は警備員・清掃員等を含め、13名で運営している。ここの生徒は優秀で、バリ州ジュンブラナ県内24校中7位の成績である。また、スポーツにも積極的に取り組んでおり、やり投げに関しては特に力を入れている。文武両道の学校であった。授業は1限40分で、日本語を少し話せる学生もいた。



(訪問について)

私たちは、4人1組の3グループ(中1・中2・中3)を作り訪問した。中学校に着くと、校長先生が学校の事について話してくださり、その後各教室で授業や交流をした。内容は高校訪問で用いた日本語授業の内容をした。盛り上がったが、先生方はもっと日本の授業・文化などを教えて欲しかった様だった。



出身村訪問

9月2日

私たちは、アスラマの何人かの子どもたちの出身村であるBanyupoh（バニユポ）村に行った。行く前に三宅先生からこの村のことを教えて頂いた。この村は、1970年に東ティモールで火山が爆発した際に、そこから逃れてきた難民が住んでいて、政府が手を付けることをしない村である。食事は1日に1、2回で、とうもろこしが主食である。水がなく、山も乾燥しているため、木がほとんど生えないはげ山がある。子どもたちの親は、その土地を地主に借り、ブドウ園を営んでおり、そのブドウは主にワインを作るために使われている。収入はあるが、その7割を地主に渡すため、少ない収入で生活しないとイケない。つまり、両親はいても経済的に子どもを育てる余裕がない家庭の子どもたちの出身村である。そこで村のトーマス牧師という人が各家庭を調査し、特に貧しい家庭の子どもを選んでる。しかし、その家庭の子ども全員がアスラマへ行けるわけではなく、兄弟のうちの1人だけ行ける場合もある。



※あまり木の生えていないはげ山



まず村に着いて、飼われている家畜の痩せこけている姿に驚いた。マンディ場などは周りから見えないようにする壁などもなく、ほとんど外といった感じであった。また溜められている水にはコケが生え、衛生的に良いとは言えない様子だった。3人の子どもたちが私たちと一緒にバスに乗り、家族に再会した。短い時間ではあったが、子どもたちも家族たちもとても嬉しそうであった。どの家庭にもアスラマに行っている子どもたちの似顔絵が飾られていた。アスラマにいる方が学校にも通え、食事も3食きちんと食べられるので幸せかもしれない。しかし、いつも私たちに満面の笑みで接してくれる子どもたちが、行きや帰りのバスでふと見せた切ない顔

が頭から離れなかった。この日は私たちにとって、子どもたちの背景を深く知れた日でもあり、今以上にもっとたくさんの愛情を注ぎながら接しようと決意した日でもあった。

家の様子や生活状況は家庭において異なるようだが、やはり良い状況とは言えず、子どもの教育にかける経済的余裕はないという様子だった。ウィディア・アシの活動は子どもたちの将来にとっても、その子どもたちに将来支えられていくこの村にとっても、本当に重要な活動であると分かった。

※痩せこけてぐったり →
している家畜と
家庭のマンディ場



第5 アスラマ

9月2日

第5 アスラマはムラヤ群の中学校のそばにある。子どもたちの多くはプリンピンサリにある小学校を卒業すると、この第5 アスラマに来る。スタッフは7名で、子どもたちは中学生、高校生と数名の大学生が生活している。すべての中学生はムラヤ群の中学校へ行き、高校生はデンパサールまたはヌガラの高校へ。また大学生はジャワ島の大学へ通っている。

子どもたちは学校以外に演奏や農業、レンガ作りなどをして過ごしている。そして服飾室やコンピュータ室などもあり、子どもたちが自由に使えるようになっていた。図書室もあるが本数は少なく、主に勉強部屋として使われている。また第2 アスラマに比べると、全体的にきれいな印象を受けた。

この施設の教育方針は「自己責任」で、子どもたちは日々の生活や勉強などにも責任を持って行動している。アスラマの子どもたちは「勉強が一生を決める」という思いが強く、将来少しでも良い職業に就くために一生懸命勉強をしている。中にはアスラマを出た後に成功した人もおり、アスラマに寄付等を行ってくれているようだ。



離村式

9月3日

プリンビンサリ村を我々が去る前日に離村式が行われた。ホストファミリーに用意してもらった民族衣装などをそれぞれ着用してアスラマの集会所で行われた。

10日間お世話になったホストファミリーのために、インドネシア語で書いた手紙を一家族ずつ読み上げて感謝を述べた。お世話になったホストファミリーへの別れは辛く、謝辞の最中には涙する学生もいた。それほど本当にホストファミリーには皆お世話になった。

私たちにインドネシアの家庭というものを経験させてくれ、アスラマでの活動を支えてくれたインドネシアの家族達に改めて感謝している。



ホストファミリーへの謝辞



バビグリン

離村式では、色々な料理にインドネシアの伝統料理バビグリンという豚の丸焼きも用意されていた。この日は子どもたちも豪華な料理を食べられるとあって、とてもうれしそうだった。

離村式の最後には、子どもたちの何人かはもう会えなくなるという悲しさから日本人学生にしがみつ、なかなか離れず泣きじゃくる子もいた。それほど、私たち学生を受け入れてくれていた事が本当に嬉しかった。

村を離れる事よりも、村の人々と離れないといけなくなる事が本当に悲しかった離村式だった。最後の夜は、各家庭ホストファミリーと思い思いの夜を過ごした。



子どもたちとの最後の別れ



民族衣装でバリポーズ

ウンタル・ウンタル

9月4日

この施設は、バリ・プロテスタントキリスト教会のウィディア・アシ財団が運営している第4アスラマ（児童養護施設）で、1981年に創立された。現在、12歳から23歳までの65人の女性たちが共同生活をしている。特筆すべきは、この施設では運営費の確保のために、アメリカの企業（シアトル）と契約して商品を作っていることである。また、その商品を作ることで、将来において社会で生きていくための訓練となり、生産と独立支援の両立ができることである。しかし、施設が受け入れることのできる人数に限りがあり、施設拡大を視野に入れた改革も必要となるかもしれないと感じた。

我々IWC25のメンバーは、この施設を訪れて、今まで練習を重ねてきたAKB48の「ヘビーローテーション」のダンスや、ゴスペル「I Will Follow Him」を披露した。また椅子取りゲームといった日本のゲームも行い、施設の入所者の女性たちと交流して楽しんだ。入所している女性たちは、非常に明るく素直で貧困や虐待などの悲惨な現実と直面したとはとても思えないほどだった。

交流最後のお別れ前には、施設の女性たちからバリダンスを披露してもらったり、インドネシア人学生に教えてもらったインドネシアの踊りを披露したりと、とても良い時を過ごすことができた。



← これはウンタル・ウンタルの学生が作成した花である。
実はストローでできている。
これはウンタル・ウンタルで買うことができる。



PPLP

9月5日

ディアナブラ大学

- ・インドネシア人学生たちが通っている学校
- ・2011年7月7日に専門学校から総合大学になった
- ・バリ島で、初めて観光学部を開設した大学である
- ・一年間の学費は日本円で約15万円である
因みに桃山学院大学の一年間の学費は102万9千円である
- ・現在この大学には、アスラマ出身の生徒が数名いる
彼らは、バリ・プロテスタントキリスト教会の援助によって無償で授業を受けている
来年以降アスラマ出身者用の枠を10~20人に増やすことを検討している

この大学には以下の方針がある

- 1、海外の大学をみて自分の大学の発展につなげる
- 2、海外の学生とより深い関係を築くためIWCだけでなく大学単位で交流ができるようにする
- 3、人間関係を構築するための教育に力を入れており、クリスチャンの精神や礼儀は授業ではなく普段の大学生活で培っていくようにしている

校章

このマークは瞑想の姿を表わしている。
三角の部分はキリスト教の思想、三位一体を表わしている。



授業風景

料理の授業やマナーの授業など
様々な授業が行われていた。

エバリュエーション



9月7日

エバリュエーションとは「事後評価」という意味である。

今回のワークキャンプにおいて、プリンペンサリ村での生活・アスラマでのワークや交流を通して明らかになった問題点や課題を出し合い、対応策や改善策を協議し、教会関係者・アスラマの責任者等に提案するプログラムである。

すなわち、プログラムを振り返り客観的に見て、どうすればアスラマがもっと良くなるかを考え提案する場である。今回考え出された問題点や改善点は、次回からのワークキャンプに活かされる。

一例としてIWC24では、村の街灯が少なく暗いと提案→街灯が増設された。

<概要>

- *日時・場所 2011年9月7日(水) ディアナプラホテル
9時～
- *参加者 バリ・プロテスタントキリスト教会関係者の方々
スィクラマ氏を含めたアスラマ関係者の方々
教職員・日本人学生・インドネシア人学生
- *形式 日本人学生4名 英語で提案
インドネシア人学生1名 インドネシア語で提案
それに対しバリ・プロテスタントキリスト教会の人たちが応答

IWC25で挙げられた提案は次の通りである。

<日本人学生>

大きく分けて3つの事を提案した。

- I スタッフの質を上げ、また人員を増やす。
- II 比較的低コスト・短時間で解決するであろう小規模改善。
- III 予算と時間を伴うが解決すべきである大規模改善。

I スタッフの質を上げ、また人員を増やす（問題点・提案）

- ① 同じタオル・布巾が様々な用途に使われているため、衛生面を考え用途分離を。
- ② 怪我をしても処置せず傷口が膿んでいる。子どもの怪我への処置・衛生面について。
- ③ クロスの交換をして欲しい。また洗濯機や、洗濯干し場の増設。
- ④ ベッドシートや枕カバーを替えて欲しい。



<回答>

スタッフの指導は必要だと思う。

プリンピンスリの子どもは田舎から来ているため、衛生に対する知識が低いのが現状です。一応スタッフのプログラムとして、年2回衛生スタッフトレーニングを実施していて、次回は11月23日に実施。医療の面では、現在月一回医療スタッフがアスラマに来ている。

アスラマだけでなく、村全体で活動して行きたい。

II 比較的低コスト・短時間で解決するであろう小規模改善（問題点・提案）

- ① 遊具の安全性に問題があると思われるため、砂場の清掃やブランコ等の縄の確認・畑と公園の間に柵を作成し、安全性を確保して欲しい。
- ② 排水溝がよく詰まるのが気になったため、ネットの設置や排水管を増やす、排水溝の穴を増やすなどの改善をして欲しい。
- ③ マンディの後、体を拭かずに服を着ていたり、サンダルを履かずに自分の部屋に戻っている子どもが目立つため、マンディの後、体を乾かすスペース（簀子など）を設けて欲しい。
- ④ 溜まったゴミを手で拾っていたり、掃除道具を置く場所が決まっていないため、掃除道具を置く場所を決めて欲しい。また、ちりとりがあまり見当たらなかったため、ちりとりを増やして欲しい。

<回答>

子どもたちの背景をみると急に変えることができない。少しずつ実現していくため、長期的に考える。しかし、国際的なスタンダードを作りたいので、少し予算が掛かるが意見を積極的に取り入れ、アスラマの中で少しずつ衛生の事を改善していけるようにする。③は、ゲスト（IWC25）が来たことにより、その人たちに甘えて体を拭くのが疎かになっていただけで、マンディ後、普段はタオルを使用している。

Ⅲ 予算と時間を伴うが解決すべきである大規模改善（問題点・提案）

- ① サンドルや靴などを無くす子どもが多いため、自分のものをしっかり管理できる様に1人一つ今より大きなロッカーを設置して欲しい。
- ② 部屋の環境が悪いと勉強に集中できないし、けがにも繋がるため、電気の増設・家具やゴミ箱・収納BOX等の設置をして欲しい。
- ③ アスラマへ続く坂道がきちんと舗装されていないため、通学の子どもたちや買い物へ行くイブ達安全に通れる様にしっかり舗装して欲しい。

<回答>

これらの提案は賛成である。オーストラリアなどにも言われているが実現できていない。今の部屋は古くて低い建物のため、暗い。しかし今後建て替えをする予定である。その際に、タイルを白にした部屋を広くすることに気を付ける。道の事については村長さんと相談したい。

<インドネシア人学生>

1. 狂犬病について

（問題点・提案）

バリの中で狂犬病はニュースとなっている。プリンビンサリ村にも沢山の犬がおり、放し飼いにされている。今の状況では、プリンビンサリ村は危険だと思われる。そのため、飼っている犬をしっかりと鎖でつなぎ、プリンビンサリ村の人たちに狂犬病の知識を深めさせて欲しい。

<回答>

プリンビンサリ村には犬は必要で排除するのは難しい。国の法律で犬は鎖につなぐことが決まった。今までに比べ、放し飼いの犬は減った。しつけをする。

2. キッチンについて（問題点・提案）

料理をする時、床で食料を切っているので、衛生の事を考えて机の上でする様にすべきである。台所が綺麗だと食べ物も綺麗。

<回答>

これから良い方向へ考える。

※後日、インドネシア人学生が手伝う。



<最後に>

その他に、図書館の本（辞書とか指さし本など）を増やす→次回のIWCの人に伝えておくという案が出た。また、ゴミ箱が3種類設置されているが、分別されていなかったなので、ゴミの分別（紙・生ゴミ・プラスチック）を促す→子どもたちにも分かりやすい様に、絵や文字を実際にIWC25が書いて、スィクラマさんに設置してもらうために渡した。

エバリュエーション当日まで数回ミーティングを行った。全体的に、スタッフの質を上げる事で、アスラマの質が上がり、スタッフが子どもたちの見本となる様になって欲しい。「モノを大切に」という事を覚えて欲しいという提案をした。その際、徹夜で英文へと訳して下さり、発音練習に付き合ってく下さった三宅先生には大変お世話になった。

エバリュエーションでの発言は、毎年しっかりと反映されており、一年ごとに施設も変化している。今年の提案についてもすでに検討中や新たに検討してもらえるものもあり、更にアスラマの施設が改善されればと思う。

私たちのアスラマでの現地活動は終わった。活動はほんのわずかな支援でしかない。大事なのは今後も桃山の学生が継続し支援を続ける事だと思う。



アガペー・フェスティバル

9月7日

出会った全ての方々に感謝の気持ちを持ちながら、今回の行程を振り返った。

アガペーとは、キリスト教の神の教えのひとつである、「愛」についてのことである。全ての人々を分け隔てなく「愛する」ことであり、私たちが考える、恋人や配偶者を「愛する」こととは違う意味を持っている。



このフェスティバルでは、ヒンドゥー教の儀式のひとつであるグボガンと呼ばれる果物を盛り付けた塔のようなものを、花で彩られた十字架の真ん中に置いた形で行われた。これは、ヒンドゥー教とキリスト教の融合したバリ・プロテスタントキリスト教会特融の形がみられる。

最初は、重々しい雰囲気の中始まった。しかし、果物と紅茶を今まで共にした仲間に、感謝の気持ちを込めながら渡していくうちに雰囲気は和んだ。私たち学生だけでなく、先生方やスタッフの方々も楽しみながら、笑顔の絶えないフェスティバルとなった。最後まで、私たちがらしいIWC25の色がみえた。今回の旅が笑顔であふれるものになり、どんな旅をしてきたのかが窺えるものになった。



文化探訪

9月6日

文化探訪に行った理由：インドネシアの人々に密着した宗教文化を知るために、現地でも特に有名な宗教施設を訪問した！！

○バロンダンス

禪の象徴である聖獣「バロン」と悪の象徴である魔女「ラダン」の終わりなき戦いを描いたバリ舞踊の代表的作品。バロンは別名バナスパティ・ラジャ（森の王）とも呼ばれている。



○ティルタ・ウンブル寺院

タンパクシリンの北外にある聖なる泉の湧く寺院。ヒンドゥー教の聖地であるため、手に傷があったり汚れている者は入ることができない寺院。この寺院に入る時には、腰に布を巻いて入った。



○キンタマーニ

バリ島北東部に位置し、バリで有名な観光スポットとなっている。キンタマーニが見える絶景の場所で昼ご飯を食べた。

ヒンドゥー



カトリック



○5つの寺院

1980年代初頭、ヌサドゥアは荒地だったがリゾートとして開発。その結果、ヌサドゥアの丘を「祈りの丘」と呼び5つの宗教施設（カトリック・プロテスタント・ヒンドゥー・イスラム・仏教）が建つ複合体の一つとなった。多宗教のインドネシアならではのと感じた。

イスラム



プロテスタント



仏教



参加学生のレポート

人生の中の貴重な18日間

学生隊長 社会学部 山内 慎太郎（やまう）



インドネシアに行こうと思った事は大学中に何度もあった、国際ワークキャンプ（以下IWC）の存在もなんとなく知っていた。しかし、行こうと思うだけで色々な理由で結局行かなかった。

大学4回生になり大学生生活の最後の年に何かしたいと感じており、自分が大学でしてきた活動を振り返ると、教育の勉強やインドへの海外ボランティア、社会福祉関係のボランティア、留学生との交流などが思い浮かび、IWCにその全部の内容が含まれている事に運命的なものを感じて、大学生生活の集大成として絶対に参加したいと思い最終的に参加を決めた。

8月22日から9月8日の18日間の間に私たちIWC25メンバーはインドネシアで多くの経験をさせていただいたが、実際にIWCは4月から始まっており、事前準備や語学の勉強と全てを合わせるとほぼ半年間の活動をしてきた。

そのため、行く前からメンバーの雰囲気もわかっており、準備に関しては、臨機応変にしていこうという楽観的な子が多く少し不安な面も正直あった。しかし、団結力が強く現地での活動も含め全員で協力でき、最高のメンバーだと今でも本当に思う。

今回のIWCの主な目的はワークはもちろんであるが、事前準備の中で得るのに苦労したアスラマの状況などの情報という面について、ビデオやカメラを用いてアスラマや、ワークキャンプの活動についての情報を細かい部分まで撮影して映像

として残し、次回からのワークキャンプにつなげていこうというものである。

バリに着いてスィクラマさんやホルマン君と会い、バスに乗り、街を見ながらホテルへ向かった。空港周辺は観光地バリという雰囲気があり、あまりワークに来た思いは湧いてこなかった。

ホテルに着きインドネシア人学生と対面した。男子学生はデリー、フィッキー、ジョシュア、女子学生はエミー、ジェシカ、イタの全部で6人。新しい仲間を迎えて私たちのワークが始まった。

植林活動

次の日にはソカという村に移動し植林活動を始めた。

植林における募金活動には桃山の学生、教授の方々に大変お世話になりしっかりとその分働こうと意気込んでおり、全員が2日分のノルマを一日でクリアすることができた。

植林活動で植えた木は5年程で20mにまで成長し、バリ・プロテスタントキリスト教会に属する全ての福祉施設の資金となり子どもの教育や施設の環境が改善されていくという重要なものである。

水の環境については実際にソカ村の民家に行き現状を見せてもらうと、農薬の混じっている水や雨水などを用いて生活水として使用している状況で本当に危険な状態だった。この水の問題についても何とか改善できないだろうか。

私はソカで聞いた福田先生のお話で「僕達がアスラマに着いて子どもと関わって楽しませてあげること、もちろん重要な事だけれど、本当の支援という意味では、この植林活動などのワークが長期的に子どもたちやこのプログラムに関係するすべての人にとって有益なものになる」という言葉を今でも印象強く覚えており、自分達がわずかでもその長期的な支援の手伝いができた事に本当に今回参加した意味を感じる事ができ嬉しかった。

プリンピンサリ村・ホストファミリー

4日目から私たちの10日間の拠点となるプリンピンサリ村にあるアスラマ（児童養護施設）に着いた。子どもたちは楽器の演奏で私たちを迎えてくれた。演奏と施設長のワヤンさんの挨拶のあと、ホストファミリーを発表され、アスラマの中学生に案内されて私のホストファミリーの家まで行きパパ達に会った。

家の様子は伝統的なバリ風建築でお風呂場（マンディ場）でお湯は使えない。「THEインドネシアのマンディ場」という造りでこれから先10日間くらい水浴びで生活できるかどうか正直不安だった。しかし、最終的にはマンディが気持ちよく感じ、寒い朝にマンディをして目覚めるのは爽快だった。

家族とのコミュニケーションはインドネシア人学生のフィッキーがルームメイトだったことや、パパや兄妹達も英語が話せるという事もあるあって、一緒に家族の昔の写真をみたり仕事の話や聞いたりと色々な話が出来た。

私たち学生を息子と呼んでくれて、何か発表があるたびに「あのスピーチは本当にバリ人みたいだったよ」とか歌の指揮をした時も「あの指揮も歌も本当に良かった！」といつもしっかりと私たちの様子を見ていてくれた。先生方のホームステイ先訪問の際にもさりげなく「私の息子達は…」と言って聞いているのを聞いて本当に嬉しかった。

イブは英語が話せないけれど、そんな事は関係なくいつも話しかけてくれ毎朝ご飯も作ってくれた。離村式の時には私たちのためにバリの民族衣装を作ってくれた。

本当にパパやイブや兄妹達にお世話になりとても感謝している。絶対にまた会いたい。

アスラマ・子どもたち

アスラマには色々な背景をもった子どもたちがいるというのは聞いていたし、子どもたちのたくさんの笑顔の写真は今までのIWC参加者から見せてもらったりと、まるでこの施設の事を知っているような気でした。

しかし実際に施設に行ってみると写真では全然伝わってこないモノがたくさんあった。

子どもたちの笑顔は写真で見るとより本当に可愛く、写真では知ることのできなかった子どもたちの普段の表情や行動を見る事ができた。

アスラマの子どもたちと接した際に感じた事は愛情表現の激しさで、人見知りという事をする子があまりいなくいつも私たちに寄ってきては遊びたがり、他国の人が来る事になれているのだなと感じた。その慣れが良い面もあれば見知らぬ人への慣れという面では少し危ない部分もあるのではと感じました。南出先生から「人見知りをしない子は実際に施設の内の人間と外の人間とをしっかり区別できていない事が多い」と聞いた時は、「だから着いた初日から子どもたちはあんなにも初対面の私たちに接触してきたのかな、その区別がつかないのであれば、それは危険だな」と感じた。

子どもの出身村訪問では子どもの生まれ育った環境を見て、とても学習に集中できる環境ではないということや衛生状況もあまり良くないと感じ、アスラマという施設の重要性を強く感じた。しかし、子どもたちは親の近くで生活できないという事についてはとても辛いらしいと思った。ありきたりな感想になってしまうかも知れないが、日本で私たちが育ってきた環境や親との生活がどれほど恵まれているのか改めて感じた。

また、アスラマの子どもへの心に対するケアは行われないのかと感じ、インドネシア人学生もそのことについては本当に気にしており、涙を流して心配している者もいた。

日本に帰ってから日本の児童養護施設について調べたが、やはりカウンセラーやカウンセリング室というものはあり、施設のみでなく小中高にも定期的にカウンセラーが訪れているなど、子どもの心のケアについては日本では重要視されていることや、カウンセラーでなくとも教師や施設の人々は子どもの心に耳を傾けているという事が分かった。

しかし、アスラマの現状ではカウンセラーを雇う十分な予算もなくスタッフにも1人ひとり子どもの話をきいてあげる時間の余裕がないという

ことだったので、そこは徐々に改善されて欲しいと感じた。

まとめ

ワークキャンプでは色々な事を経験する事ができた。でも私たちは経験させてもらうばかりで、何か自発的に出来る事がもっとあったのではないだろうか、とふと考えてしまう事がある。

自分達の意見をエバリュエーションで伝えたことが反映された時に、大きな達成感が持てるのか、ワークで作った土台の建物が完成した時に達成感が得られるのか、そもそも達成感を感じる必要はないのかなとも感じる。

ただ、またアスラマに行きたいし、子どもたちやホストファミリーに会いたい、アスラマのために出来る事があれば是非手伝いたいという気持ちは強くあり、IWC25として今後のIWCにも協力したい。

このワークキャンプに参加して本当に良かった。本当に貴重な経験ができた。初めにも述べたが大学生生活の自分の今までの活動の集大成として、この活動ができ本当に良かった。

ソカの植林から始まり、アスラマ、交流会、日本語授業、ワークなど細かく書くことのできない経験も多々ある、この事を書いていたら自分1人で報告書を一冊作ってしまうほどの莫大なレポートになってしまうだろう。それくらい本当にたくさんの事を経験した。

みんなで練習して教会でうたった「I Will Follow Him」についても熱く語りたいが私がそれについて語り始めると、みんなにもういいです。といわれそうなので辞めておこうと思う。ただ一つ言える事は「I Will Follow Him」が徐々にインドネシア人学生との息が合っていくように私たちの関係も息が合っていく最後には本当に素晴らしい絆が生まれた。

最後にインドネシア人学生と一緒に歌った時に本当にそれを強く感じた。

ワークキャンプ、本当に楽しかった。

愛という言葉は日本で使うのは正直本当に恥ずかしい。でもIWCの中では本当にたくさんの愛

を感じる事ができた。こんな良い経験をさせてくれたこのキャンプにお礼を言いたい。

そして、最後になりましたがお世話になったチャブレン、三宅先生、福田先生、南出先生、松山さん、スイクラマさん、ホルマン君、みわさん、インドネシアの学生、日本の学生のみならず支えてくださったキリスト教センターのみなさん、本当にありがとうございました！

Terima Kasih Indonesia

Shintarou Yamauchi (yamau)

Pertama saya ingin mengucapkan terima kasih kepada mahasiswa Indonesia, Bapak sikuram, Bapak Horuman, Miwa Ishii, dan tuan rumah saya.

Mahasiswa Indonesia selalu membantu kami, hampir semua mahasiswa Jepang tidak bisa berbicara bahasa Indonesia maupun bahasa Inggris jadi mahasiswa Indonesia banyak membantu kami.

Bapak sikuram dan Bapak Horuman selalu memberikan dukungan kepada kami.

Kami pun tidak sakit karena Ibu Miwa selalu membantu menjaga kesehatan kami.

Jadi sekali lagi saya mengucapkan terima kasih. Saya dapat dengan mudah mengingat pengalaman saya di Indonesia.

Saya dapat mengetahui kondisi Indonesia sekarang ini dan apa itu kasih yang terpenting dalam hidup saya.

Saya sangat bersyukur dapat mengikuti program ini dan berjumpa dengan mahasiswa Indonesia, anak-anak Indonesia dan tuan rumah saya.

Semua orang yang saya jumpai di program ini adalah harta bagi saya.

Saya tidak akan pernah melupakan program ini.

Sebenarnya sebelum saya pergi ke Indonesia

saya merasa sangat gugup.
Karena saya ketua dari mahasiswa Jepang jadi saya harus memimpin mahasiswa dari Jepang. Tetapi saya tidak percaya diri sebagai ketua. Tetapi sekarang saya berpikir bahwa saya tidak butuh khawatir akan hal itu.
Karena kami dapat bekerja sama satu dengan yang lain, dengan mahasiswa Indonesia, dan dengan para guru-guru.
Kami mendapatkan pengalaman yang luar biasa selama 18 hari.
Saya sangat mencintai Bali dan teman-teman saya.

Terima kasih

「Bagusな日々を終えて」

学生副隊長 国際教養学部 岡野 峻佑 (おかちん)



はじめに

いつも思う。ボランティアに行くと、たくさんのもをもらって帰ってくる。思い出や仲間や成長だ。去年もベトナムに行って同じような事を感じた。様々なボランティアをしてきたが、やればやるほどボランティアとは何かわからなくなる。受け取っているのは自分ばかりではないのか、与えることやしてあげるといのは自己満足で、相手のニーズに応える事がボランティアではないのかと。では相手のニーズに応える事は、与えることと何が違うのか。ボランティアをする事自体が上から目線ではないのだろうか。考えてもきりが無い。去年は学年も下という事もあり、ただがむしゃらにワークをした。たくさん感謝をして、

かわりに自分ができることを一生懸命やった。間違いではないと思う。結局、ボランティアとは何かわからなかったけど、1年経ち今回を通して自分なりに答えがでた。それは、人とのお付き合いと一緒にということだった。いやいや、まじめに答えている。難しく考えても、簡単に考えても一緒にだった。目に見えないものを感じ合い、困っていないか気を配り、時にはプレゼントをあげる。一方通行にならないよう、常に思い合う。そして助け合う。国際ワークキャンプの目的は、「アジアの人々の協働から学ぶ」であり、私たちのスローガンは、「Tangan dan tangan (手と手)」である。そして、アガペーというものがある。(前のページに説明あり)私の「ボランティアとは？」という疑問の答えは、事前研修の時点で出ているのかもしれない。だが、それを実際に体験したことによって、私の中で納得のいくものに仕上がったのだと思う。

4回生として

4回生ということもあり、チャレンジするばかりでなく周りを見渡す余裕を持って臨むことができた。後輩たちの成長がおもしろいように見え、彼らを1歩外から見るとい楽しみが、今までのボランティアとは全く違う経験であった。逆に4回生だからこそ、行動に制限をかける必要があったことも確かだが、隊長と比べるとたいしたことはなかった。隊長は考えることも多く、いつでも大きな責任と問題に対応していかなければならない。私たちがここまで楽しむことができたのは、周りの方々やスタッフの方々のおかげであると同時に、隊長のおかげでもあった。私は、同じ4回生として彼を支えていきかけたのだが力になれたのだろうか。残念ながら、逆にたくさん支えてもらった記憶の方が強い。隊長に感謝である。また、後輩たちをうらやましいと思う時も多く、こんな体験を1回生の時からしている後輩たちは、これからの大学生活に大きな変化を与えられると思う。英語がうまくしゃべれなかった悔しさをこれからたくさん勉強して、また何かにチャレンジすれば良いと思うし、出会えた仲間とまだまだ一

緒に過ごすことができる。大学中にもう1度パリに行くこともできる。英語を強制的に話さなければいけない環境になりやすく、インドネシア語など言葉に触れる機会も多いので、話す能力は身につくと思う。そして、これらをきっかけに留学に行ったり日本語教師をめざしたりと、大学生活の幅は大きくひろく。そういう意味において、「大学生活で何かしたい!」「思い出を作りたい!」と考えている方は、重く「ボランティアだ」と、考えずにIWCに参加してみることをお勧めする。4回生も4回生ならではの楽しみ方があるので、ぜひ最後の夏であっても参加してほしい。4回生だからと偉そうなことを言っているが、私に特に能力があるわけでもなく、勝手にみんなの様子を見て楽しんでた。なにかとこの人見てくる、一緒にいたら私の仕事が多い、と感じた人はごめんなさい。君たちの活躍を見る事が趣味のようになっていた。

IWC25のメンバーたち

今年のIWCに参加できて本当に良かった。1回生の頃から知っていたのだが、なかなかスケジュールが合わず、気がつけば4回生になっていた。ただ、そのおかげでこのメンバーと共に行動できたのは感謝である。もちろん学生だけではない。スタッフの方々や、インドネシア人学生のみんな、アスラマの子どもたちに、イブやホームステイの家族たち、出会った人々全員が、IWC25を良いものに作り上げたメンバーだ。このメンバーたちにこの場を借りて感謝を伝えたい。たくさんの人に助けてもらい、笑顔ももらった。時には叱られることもあったが、それ以上に褒めてもらうこともあった。このキャンプを成功に導いて下さり、ありがとうございました。私の楽しみのひとつである、みんなの成長はインドネシア人学生も一緒だった。インドネシア人学生も私たちと同じようにキャンプ中は新しい出来事ばかりで、同じ国の中なのに文化が違うことが多々あった。そして、日本との異文化交流を体験した。みんなとても素直で、優しかった。私たちのつたない英語を根気よく聞いてくれて理解してくれた。「子ど

もたちのために」という気持ちが強く、それをモットーに良い形で団結できたと思う。日本の学生は、英語で話すことの恐怖を取り除き、インドネシア人学生は理解し分かり合おうという姿勢が強くみられた。事前研修や初めてインドネシア人学生と打ち合わせをした時の頃と比べて、私を含め本当に成長した。「なんとかなる」が口癖のような感じだったが、準備や普段の観察、そしてみんなの感受性の豊かさが、「なんとかなる」という余裕を作った。これは、詰め込みすぎたり、マニュアル通りになることを回避させ、応用の利くチームを作ることができたと自負している。スタッフや周りの方々に迷惑をかけることも多かったが、チームとしてよく頑張ってくれたと感じている。

体験し感じたこと

IWCではやはり、日本では味わえない体験や異文化に触れることができる。それが醍醐味である。宗教が生活の一部になっていて、日本人では馴染みのない生活が送れる。毎日があっという間に過ぎていった。そして、異文化に触れて思うことは、自分の国のことをよく知らないということだ。私がパリに興味があるように、インドネシア人も日本のことが知りたい。違いはたくさん発見できる。でも、「なぜ違うのか?」「日本人はなぜこう思うのか?」などの質問に答えることができないことがたくさんあった。そして、やはり「日本の方が良かった」と思うことや、「インドネシアの方が良い」と感じることもいっぱいあった。パリで生活していて、一番印象に残っていることは「笑顔」である。あちらでは本当の笑顔に囲まれていた。村を歩いていて知らない人でもあいさつをしてくれる。子どもたちの笑顔や、ホストファミリーの優しい笑顔も忘れられない。IWCのメンバーも良い表情をしていた。人の内面は表情に出る。すごく感じたことだった。日本でよく見る愛想笑いなど作った顔はない。日本人は、知らない人にあいさつをする時あんな顔ができるだろうか。そもそもあいさつをするのか。村人たちは、バイクに乗っていても笑顔をくれる。

バリでの生活で何よりも感じたことだった。ワーク中でも、一緒に働いてくれたおっちゃんと全く言葉は通じないが、楽しみながら頑張ることができた。個人的な話になるが、時間がある時は子どもたちとサッカーをした。初めて入れてもらった時は、誰がチームかわからなくて、スポーツなら絶対に早く仲良くなれると思っていたのに上手くいかなかった。次の日には目印をつけてもらって参加した。腕にビニールテープを巻いてもらうという方法を使った。炎天下の中、裸にさせるのは良くないし、ゼッケンなどもなかった。でも、この工夫ひとつで急激に仲を深めることができた。そして、村対抗の試合にも出してもらうことができた。一緒に戦ったというこの出来事は、数あるイベントの中でもとても良い思い出になっている。あの時のみんなの応援やイブたちの楽しそうな姿は忘れられない。いつも忙しくしているイブたちがあんなにはしゃいでいるところは見たことがない。最初に失敗した時から次の時に、輪に入るのをためらいもしたが、少し工夫するだけで大きく環境が変わることを実感した。滞在中は本当に体と頭を休めさせる時間はない。事前準備でやってきたことも、その場で急に変更など当たり前だ。だがそれも、どう上手く対処していくのかと楽しみながらできた。あまり具体的な内容を書いていないが、書き出すときがない。ただ、大学生活の中でこれほど人と協力して何かをすることはない。日本語授業でも交流会でも、終わった時の達成感は言葉にならないくらい大きい。頑張った分だけ子どもたちもそれに応えてくれ、子どもたちとも仲間とも絆が深まる。日本の文化とインドネシアの文化の違いはあっても笑顔は共通であり、それは大人であろうが子どもであろうが関係なく幸せな気持ちにさせてくれる。そして、人と協働するにあたって上手に手を取り合っていくにも、笑顔は最大の武器になる。滞在中、笑顔が絶えることはなかった。

楽しむ事だけがワークキャンプではない

もちろん楽しいことばかりで終わることはない。私たちは新しい試みで、アスラマで宿泊させ

てもらうことができた。それ自体はとても良い経験だった。一緒に寝て、朝も一緒に掃除したり、マンディをしたりできるのである。しかし、考えさせられたのは夜のことであった。1人だけ咳がひどくなかなか寝付けない子どもがいた。心配になり、一緒に横になったのだが、昼は甘えたりイタズラする子なのに、本当にしんどい時には甘えることができなかった。狸寝入りをし、背を向けるのである。背中を摩り続けていると、狸寝入りをしながら少しずつ近づいてくる。最後には腕を体にまわしてくれたが、寝付くにはかなりの時間が掛かった。咳は背中を摩っていると落ち着くようだった。アスラマはとても素晴らしい所だ。年齢も様々なので、みんな兄弟のようになれる。しかし友達や、兄弟愛は足りているかもしれないが、親の愛情という面がなかなか補えない。もし、この子が背中を摩ってもらいながら寝るのが初めてなら、これから体調を崩した時、摩ってもらうと楽になることを覚えたことになる。大人に素直に甘えるのもなかなかできない子が、次は誰にやってもらうのだろうか。楽になることを知ったら、誰でも次の時またやってもらいたくなるはずである。私はずっとその子の側にいれるわけでもなく、「その場限りの優しさで無責任なことをしたのはないか」と、その子の寝顔を見ながら考えた。私たちが小さい頃は、熱が出たら親に看病してもらい、咳などで呼吸しにくければ簡単に親に背中を摩ってもらうことができた。この私たちとの大きな違いを改めて実感した出来事だった。他にも、子どもたちの出身村の訪問の時、一緒に帰る子どもたちの嬉しそうに話をしてくれる姿や、「アスラマに親が来るんだ」と話してくれる姿が目には焼きついている。この姿は、とても嬉しくて楽しいことなのに、自分達との違いの大きさを実感する印象の方が強くなってしまっている。アスラマでは、しっかりと自給自足できる人間に育つことができる。でもこの歳で親元を離れそれをしなくてはならなくて、それでもアスラマにこれる子どもたちは幸せであり、ここで生活したい子どもたちはたくさんいるのである。この子たちと数日だけ一緒に過ごし、私たちはなにを残していけるのか。

これを考えない日はなかった。

一期一会

このキャンプで私は、協働について学んだ。手と手を取り合って協力し合い、それによって繋がっていることを感じた。短い時間の中でしか関われなかったし、一回限りの出会いになる人もたくさんいるであろう。それでも私は、その人たちからたくさんを学び、感じて、思い出を作った。それは一生の宝になると思っているし、確実に私の一部になっている。その場限りの優しさ、と悩んだり、「一時だけの楽しさを感じさせているのではないか」と、不安もあったが、子どもたちも私と同じことを感じていてくれれば、私の中のボランティアは成功し、これをを超えるものになるであろう。少しのことで良い。私たちとの出会いの中で子どもたちが何かを感じて、これからの未来に繋がるきっかけになったことを願っている。

Terima kasih

Shunsuke Okano (okachin)

Setiap orang adalah waktu yang lama. Saya lupa untuk tinggal di Indonesia. Dan menghabiskan semua kenangan adalah harta. Banyak bahkan akan repot-repot.

Saya berbicara bahasa Inggris. Namun, perusahaan selalu mendengarkan saya.

Hal itu sangat senang. Terima kasih, hal itu mungkin untuk tahu banyak tentang Indonesia. Mampu berteman dengan semua orang. Indonesia adalah menyenangkan dan menarik. Untuk memenuhi semua orang. Untuk melihat anak tersenyum lagi. Apakah Anda pikir kita bisa lakukan untuk anak-anak? Kami berharap bahwa anak-anak hidup bahagia. Perasaan ini, kami bersatu. Berarti, seperti melihat anak-anak tumbuh. Pada waktu itu, pergi untuk

melihat bersama-sama. Pada saat itu, Anda harus belajar bahasa Inggris dan bahasa Indonesia. Untuk keluarga tuan rumah, Apakah homestay pertama. Apakah dipenuhi dengan kecemasan. Namun, yakinlah Anda mudah. Terima kasih. Terima kasih kepada semua orang yang kutemui. Saya suka jalan pulang. Berjalan santai, saya ingin menyapa dengan tersenyum. Di Bali, menghabiskan dikelilingi oleh senyum yang nyata. Di Jepang, senyum ini tidak terlihat seperti ini. Apakah dipenuhi dengan kehangatan dan kelembutan manusia. Saya ingin orang-orang seperti ini. Senang untuk berpartisipasi dalam IWC. Memori ini adalah bagian dari diriku. Akan terus tumbuh bersama. Terima kasih banyak, Indonesia.

「きらきらの笑顔を忘れない!★」

学生副隊長 国際教養学部 中川 美弥 (みや)



報告書を書き始める前に、桃山学院大学、募金に協力して下さった方々、事前の研修や準備などでお世話になった方々、笑顔で送り出してくれた家族や友達、インドネシアで出会った方々、子どもたち、そして先生方を含むIWC25のメンバー、IWCに関わっていただいた全ての方々々に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

【どんなことでもなんとかなる!】

私がこのIWCに参加しようと決めたのは高3で訪れた、オープンキャンパスの時でした。オープンキャンパスのことは遊び感覚で来ていたこともありほとんど覚えていないが、このIWCだけ

はなぜか「絶対参加しよう」とその時心に決めていたのである。1回生の時は募集が終わっており、参加した友達に「いいなー」と言ったことを覚えている。2回生は他にやりたいことを見つけたので、3回生で参加することにした。テストはほろほろだったし、面接では「私を連れて行かないと損をすると思います!!」と、大口を叩いてしまったが、実は私は蚊も殺せないくらい虫が嫌いである。また、日本でも洋式トイレでは腰を浮かせるくらいの潔癖症なのである。バリ島の大自然には全くの不向きと言っている。だから、実際に参加できると決まった時、実は不安でいっぱいだった。しかし、「なるようになるし、なるようにする」という考えで、「実際その場に行ったら、慣れるか!」という気持ちに切り替えてからは不安もなく、副隊長になり全力で事前準備に取り組んだつもりである。全員がマイペースなのか、適当なのかかわからないが、「まあ、なんとかなるやろ!!」が合言葉のようになっていき、実際、虫やトイレや水のシャワー、こんな私でもすぐになんとかになりました。

【インドネシア人学生のすごさ!】

インドネシア人学生と対面し、一緒に食事を食べ、班ごとに分かれ日本語授業のミーティングをした。インドネシア語どころか英語もほとんど話せないが、私のつたない英語を理解してくれて、良い感じにミーティングは進んだ。最後に私たちが日本で練習に力を入れすぎたといっても過言ではないくらいの「I Will Follow Him」を歌った。インドネシア人学生の、はもりのおかげで良い感じに歌え、「これはいける!!」とひそかに確信した。まず、彼らは歌がとても上手であった。毎日毎晩、何度も繰り返したミーティングで彼らは、私たちの英語とはとてもいえない英語でも、一生懸命理解してくれて、「どう思う?」と、尋ねたら良いアイデアを出してくれた。日本語を一生懸命覚えて使ってくれて、私たちと一緒にばかなことをしてくれた。真剣な話の時は真剣にぶつかってきてくれて、子どもたちのために泣けるくらい繊細な心をもっていた。いつの間にか、私たちは1つの

チームになれていた。通訳してくれたり、ギターが弾けたり、日本語をすぐに理解したり、昔話で子どもたちを集めたり、絵がとても上手だったり、彼らはとてもすごかった。そんな彼らがいなければこのワークキャンプは成立しなかっただろう。本当に心から感謝しているし、心から彼らが大好きである。

【布林ビンサリの私の家族】

アスラマにつき、ホームステイのペア発表をしていた時、私はみんなの名札を探していた。すると名前を呼ばれた。インドネシア人学生のイタと一緒にだった。インドネシア人学生とペアになるような気は軽くしていたが、実際その瞬間はとても心細かった。私の重いスーツケースを子どもが運んでくれて家に着いた。きれいな家でとてもやさしい家族で安心したが、元々イタがその家族かと思うくらい仲よくインドネシア語で話しているの聞き、大きな孤独感に襲われた。そして、私は疲れているというのを理由にコミュニケーションをとることをせずに寝てしまった。不安や孤独から逃げてしまった。ぎりぎりまで寝て、入村式に行き、同じくインドネシア人学生とペアになっている女子学生と励ましあったし、先生にも励ましてもらった。家に帰るのが憂鬱だった。ところが同じ状況の男子学生にもどんな感じか聞くと、「全然、大丈夫!!」と言ったから驚いた。それと同時に、「私は何をしているのか」と悔しくなった。このままではだめだと思い、「よし!話すぞ!!」と決意して家に帰るとすごく温かく迎えてくれた。インドネシア語ができなさ過ぎて、直接ではなくイタに英語で通訳をしてもらいながらだが積極的にホストファミリーと会話をした。とても楽しかった。そして、その瞬間から家はとても心地よい空間に変わった。毎朝イブは「チャンティー、パギー」と言いながら、部屋に紅茶とご飯を持ってきてくれた。その中でもピサングレン(バナナの天ぷら)は格別でどこのピサングレンよりもおいしかった。笑顔が素敵なババも私がリビングにいる限りそばにいてくれて、「いぬ、いぬ!」と覚えた日本語などで私に話しかけてくれた。娘の

ウィウィも英語と少しの日本語で沢山話してくれて、離村式には私の髪の毛のセットまでしてくれた。そこにイタが加わり、いつの間にか本当に私の家族になってくれた。「あなたたちは本当の家族。結婚しても旦那さんと一緒にまた来てね」と言ってくれた時は本当にうれしかった。インドネシアにもうひとつ、私の大切に大好きな家族ができた。

【可愛すぎる子どもたち】

子どもたちのきらきらの笑顔。今でも私の心にやきついている。親と一緒に暮らせないという背景を感じさせない子どもたち。あんなに小さいのに私よりずっと大人だった。「みや!!!」と子どもたちが名前を呼んでくれるだけで嬉しかったので、私も子どもたちの名前を「これでもか」というくらい呼んだ。顔を見るなり抱きついてくる子、いたずらしてくる子、私の髪を編みこんでくれる子、折り紙でハートを作ってくれる子、絵本を読んでくれる子、大人びている子、私が教えたアンパンマンのものまねをずっとしてくれる子、他の子と遊んでいたらやきもちをやく子、恋人と言ってくれる子、カメラにポーズを決めてくる子、名前を覚えてくれない子、捕まえるまで一生懸命逃げ続ける子、「おいで」というとすぐ抱っこされに来る子、私が泣いて落ちたマスカラを手でとってくれる子、大きくなったら日本にきてくれるという子など、沢山の友達が出来た。私が子どもたちにしてあげられることは限られていたが、反対に私は子どもたちのきらきらの笑顔に何度も癒された。子どもたちに沢山の愛をもらった。私もその愛を返せるように抱きしめて、抱きしめて、抱きしめた。今でも目を閉じると子どもたちのきらきらの笑顔が浮かんでくる。

【Tangan dan Tangan】

18日間を振り返ると、とても楽しかったが、副隊長として、またIWCとしての無力さにとても悩み、眠れない夜もあった。悩んでいる事をあまり他人には話さない性格なので1人で悶々としていた。「私たちに何ができるのか?」「私は何をすれば良いのか?」「副隊長として何かできている

のか?」「私が副隊長ではないほうが良かったのではないか?」などと考えれば考えるほどわけがわからなくなっていった。そんな時に自分の立つべき位置のことや、自分に厳しくなどといったアドバイスをもらった。私は「人に優しく、自分にもっと優しく」で生きていた。自分に余裕がない時はイライラしていた。そもそも副隊長としての自覚がなかったのだと思う。そういったことに気を付け、周りをもっとよく見て、副隊長としての行動をしようと思った。その日以降、私なりにだが、自分から考えて行動することにした。すると他のメンバーが悩みを相談してきてくれたり、自分の考え方を考えることができたりと、私の中で新しい毎日が始まった。苦しいとき、つらいとき、悲しいときには、必ずと言っていいほど、誰かが背中を押してくれる。手を差し伸べてくれる。私たちが何気なく決めたテーマの“Tangan dan Tangan”「手と手」を実感した瞬間だった。また、このワークキャンプでは、その他にも自分を見つめなおすきっかけが沢山あった。そのきっかけをくれた先生方を含むメンバー、子どもたち、バリの方々、このIWCに私はとても感謝しているし、私も自然と手を差し伸べられるような人間になろうと決めた。

【今の気持ち】

帰国した今、あの18日間は本当に夢のような18日間だったなと感じる。私は海外に行くといつの間にか早く帰りたいと思ってしまったり、実はインドネシアでも3日目くらいまでは少し思っていた。しかしそれ以降は気づけば「帰りたくないなあ〜」と口にしていた。インドネシアはそのように思わせてくれる不思議な魅力のある国である。必ず、私はバリに帰るだろう。また、ふとした瞬間に、子どもたちやホストファミリー、IWC25のメンバーのことを思い出す。帰って来た時に、何か大きく変わるかなと期待していたが、行く前の私と今の私がそう簡単に変わるはずもなく、ただただとした毎日を過ごしている。しかし何も変わらなかったわけでもなく、行く前では考えられないような考え方もできるようになった。当た

り前のことすぎて恥ずかしい話だし、ちょっとした変化にすぎないが、自分の洗物さえやっていた私に家族の分まで自分から洗うようになった。しかし、このちょっとした変化が大切なのではないかと思いたい。この夏、私にはかけがえのない最高の思い出、友達、家族、仲間ができた。これは私の一生の財産になるだろう。「なぜOB・OGの方々はインドネシアにまた行くのだろうか？」と今まで疑問に思っていたし、私は「今回は最初で最後だろう」と思っていた。しかし帰ってきた今、そんな風に思っていた自分はもういない。帰ってきたからこれで終わりではなく、これが始まりなのである。私はアスラマで「子どもたちやイブのために何かできたのか？」と言えば正直できていないと思う。それに、もっとインドネシア語を勉強しておけば良かった、もっと積極的に動いておけば良かった、もっと色々な疑問を聞けば良かった、もっと色々な子どもたちと話せば良かった、などといった沢山の反省と後悔がある。しかし、これで終わりではない。この先もずっとずっと続くであろうIWCを支えていくのが、今まで支えてもらったIWC25の私たちの役割である。

やはり私の文章力では、あの18日間をここに書ききれません。子どもたちのこと、メンバーのこと、楽しかったこと、うれしかったこと、もっともっと書きたいことがあるけれどうまくまとめられません。ごめんなさい。しかし、1つ言えることは「参加して良かった」ということです。この報告書を読んでくれて、少しでも参加しようかどうか迷っている人はぜひ参加してほしいです。本当に。

最後に、バリで出会った皆さん！ プリンピンの家族！ 可愛くて仕方がない子どもたち♥
18日間一緒に過ごしたIWC25のメンバー!!!
みんなのきらきとした温かい笑顔を忘れません。
みんな本当に大好き。ありがとう。

♥Saya mencintai kalian♥

Miya Nakagawa (Miya)

Selamat siang! Lama tidak bertemu! Apa kabar? Saya baik-baik saja!!!

Musim panas ini adalah khusus bagi saya karena saya punya kenangan terbaik, teman terbaik dan keluarga terbaik.

Terima kasih atas waktu selama 18 hari ini. Saya menghabiskan 18 hari di Bali seperti mimpi. Saya tidak akan pernah melupakan musim panas ini karena itu sangat istimewa bagi saya.

♥Untuk bapak, ibu, wifik dan Ita,

Maaf saya tidak bisa bahasa Indonesia. Tetapi kalian begitu baik pada saya. Saya sangat senang bahwa saya dapat menghabiskan waktu bersama keluarga saya di Blimbingsari. Saya suka pisang goreng yang ibu buat. Saya ingin makan lagi. Kalian adalah keluarga saya di Blimbingsari. Saya mencintai keluarga saya di Blimbingsari!!!
☆

♥Untuk pelajar Indonesia,

Terima kasih banyak!!! Terima kasih telah menterjemahkan karena bahasa inggris saya yang buruk. IWC25 telah sukses berkat kalian. Kita selamanya teman! Saya mencintai kalian!!!
★

♥Untuk Ibu-ibu, stuff dan Anak-anak di asrama,
Saya senang bertemu kalian. Terima kasih atas sarapan yang lezat dan makan malamnya. Senyum anak-anak telah membahagiakan saya. Saya mencintai kalian!!! ☆

Saya pikir saya telah matang sebagai hasil dari pengalaman saya di Bali. Saya ingin belajar

bahasa Indonesia lebih banyak dari sekarang karena saya ingin pergi ke Bali lagi.

Terima kasih untuk segalanya!! Semua adalah keluarga saya!!! Saya senang dapat berjumpa dengan semua orang di Bali.

Saya cinta IWC25 ♥ Saya cinta Bali ♥ Terima kasih banyak!!!!!!

「心に残る笑顔」

国際教養学部 小林 弥生 (やよい)



<きっかけ>

「大学に入ってから何一つ頑張っていないし、何のために行っているのだろう。」そんなことを考えていた2回生の時、IWC23に参加した学生に出会った。彼女は目を輝かせながら、アスラマという施設で出会った子どもたちの話をしてくれた。私はあまり人に影響されるタイプではないが、その話には魅了された。「興味があるものをせずに、このまま大学生活を終わらせたくない!」と思った。そこで、怠け者で引っ込み思案な自分を変えるためにも、一歩を踏み出してみることにした。

<日本人学生>

それぞれの意思で集まった15人。共に活動する仲間だ。夏休み前の研修では、先生方からインドネシア語や、インドネシアの文化・歴史を教わった。夏休みに入ってから、事前準備で朝早くからキリスト教センターの集会所に集まり、歌やダンスの練習、台本作りなどの作業をした。インドネシアへ行くまで毎日のように集まっていたの

で、自然と打ち解けることができた。いつの間にか1人ひとりが、私にとって大切な存在になっていた。

<バリの雰囲気>

インドネシアへ行くのは今回が初めてだ。デンパサール空港に到着した時は、予想していたほど暑さは感じなかった。日本のジメジメした暑さとは異なる、カラッとした空気が心地よかった。

バスでホテルへ移動中、バイクの多さに驚いた。日本では見られない光景だった。街中の人は目が合うと笑顔で手を振ってくれた。早速、インドネシア人のフレンドリーさに触れて感動した。

<インドネシア人学生>

彼らはいつも明るく、よく歌を歌っていた。

6人のインドネシア人学生と初対面したのは、初日の夕食の時だった。みんな英語が話せるので、コミュニケーションは基本英語だ。それなのに、私は話すことも聞くこともままならず、申し訳なかった。「英語を話せるようになりたい!」と、こんなに強く思ったのは初めてだ。

18日間、たくさんの協働を通して、21人が1つのチームになれたことを嬉しく思う。初めてのミーティングは、ムラヤ高校で行う日本語授業の打ち合わせから始まった。インドネシア人学生は優しかった。私の片言英語も片言インドネシア語も、頑張っ理解しようとしてくれた。彼らは理解力が高く、私たちの要求にも真剣に答えて取り組んでくれた。おかげで十分な準備が出来て、本番は大いに盛り上がった。

私はホームステイ先もインドネシア人学生と一緒にだった。彼女はとても親切にしてくれた。マンデイ(水浴び)の時はいつも「お先にどうぞ」と言ってくれた。夜寝る前に、アスラマの子どもたちについて話し合ったこともあった。言いたいことをなかなか伝えることができず、ここでも英語力の必要性を感じた。ワークをして疲れて帰った時、暑そうにしている私を見て、バリダンスで使う扇子をプレゼントしてくれた。彼女の優しさや気遣いは、見習いたいと思った。

<ホームステイ先のパパとイブ>

「英語もインドネシア語もできないのに、大丈夫かな」と内心ドキドキだった。パパとイブは笑顔で私たちを迎えてくれた。家族に「おかえり」と、言われているような気持ちになって安心した。

家ではニワトリを飼っていた。たまに庭でカカオを干していた。パパは大きな木のドアを作っていた。新しい部屋を造るらしい。イブは花に水をあげていた。ここではゆったりとした時間が流れていた。田舎のおじいちゃんとおばあちゃんの家遊びに来ているような感覚だった。

イブとパパの歳は60代後半で英語は話せない。毎日インドネシア語でやり取りをする。簡単な会話でも、何を言っているのか理解できないことが多々あった。何度も話すうちにわかってくるインドネシア語もあって、通じ合うって素晴らしいと思った。

イブは私を「プトゥ（長女）ヤヨイ」と呼んで、抱きしめてくれた。毎朝、甘くて温かいteh（紅茶）を入れてくれた。パパがお菓子を買ってきてくれたこともあった。本当の家族のように、自然に接してくれたことが嬉しかった。一番の思い出は、イブと一緒にピサングレン（バナナの天ぷら）を作ったことだ。油が手にはねて「あっつー！」と跳びあがってしまったが、笑いがとれたので良かった。4人で出来たてのピサングレンを食べた。衣がカリカリで、バナナはもっちりしていてすごく美味しかった。パパに勧められているうちに5つも食べてしまった。ゆっくり過ぎる時間が幸せだった。

<ブリンピンサリ村とアスラマ>

ここの人たちは、私たちが来るまでに万全な準備をしてくれていた。今までにない歓迎ムードに包まれた。たくさん子どもたちのキラキラした笑顔に迎えられて、胸が高鳴った。

ブリンピンサリ村の道では、ニワトリや犬が普通に歩いていた。村の人たちは、すれ違いざまに笑顔を向けてくれた。のどかな雰囲気と朗らかな人柄に触れて、穏やかな気持ちになった。

アスラマのイブ（女性スタッフ）は、みんなの

お母さんのような存在だ。子どものご飯80人分を作るだけでも大変なはずなのに、私たちの分も朝昼晩、毎日作ってくれた。インドネシア料理は辛いと聞いていたが、イブは私たちの口に合うように作ってくれた。優しさの味が身にしみた。ワークの休憩時間にイブの台所へ行って「サヤビサバントゥ？（お手伝いしましょうか?）」と言うと、快く手伝わせてくれた。台所の衛生状態はあまり良くなかった。私たちが行った時期はハエが多かった。イブは基本、床で作業をしていた。木のまな板も包丁もガタガタだった。日本の百円均一店で購入した包丁研ぎをプレゼントすると、早速使ってくれた。切れ味がだイブ良くなったことに、「わお！」と喜んでくれたことが印象的だ。

アスラマの子どもたちは、貧困や虐待など、それぞれの理由で親元を離れて、共に生活している。私たちと一緒に遊んで笑い合ったり、友達と喧嘩して怒ったり、別れが悲しくて泣いたり、いろいろな表情を見せてくれた。まさに天真爛漫だ。

子どもたちは毎朝5時くらいに起きる。私は、朝のマンディを手伝った。普段手が届かず洗えない背中や、足の裏まできれいに洗ってあげるとすごく喜んだ。日本語で嬉しそうに、「ありがとう！」と言ってくれた。ご飯の時はみんなでお祈りをして、洗い物も床掃除も自分たちでやっていた。夜は、ご飯を食べる場所に集まって学校の宿題をしていた。手伝いたいと思ったがインドネシア語はわからないし、逆に勉強の邪魔になるといけないので、遠くから見守ることにした。子どもたちの寝る時間になり、私たちも帰ろうとした時、いつもやんちゃな男の子が部屋から顔をのぞかせた。目が合うと、「抱きしめて」というように両手を広げてきた。まだまだお母さんと一緒に寝たい年頃だ。ぎゅっと抱きしめると、その子もぎゅっと抱きしめ返してくれた。愛をこめて触れ合うことの大切さを、改めて実感した。

私は、あまり多くの子どもたちの名前を覚えることができなかったことを悔んでいる。子どもに名前を聞いたら、特徴と一緒に書きとめよう。後になってそう思った。いつかまた会えたら、1人ひとりと向き合って、ちゃんと名前を覚えて、たくさ

ん呼びかけたい。

<感謝の気持ち>

日本に帰りたくないと思うほど、インドネシアを好きになるとは思っていなかった。涙が出るほど別れが悲しかったのは、出会った人たちを大好きになったからだ。毎日、人の温かさを感じていた。私はインドネシアでもらった笑顔を一生忘れないだろう。

お世話になった人、周りで支えてくれた人、IWCに関わる全ての人たちへ。心をこめて、感謝の気持ちを伝えたい。

<これから>

IWCの活動は、報告会で終わりではない。桃山祭では毎年、インドネシア料理の模擬店、雑貨店などを出して、アスラマの子どもたちのための募金活動をしている。IWCに参加した人たちの想いはつながっていく。私自身も、ずっとつなげていきたいと思う。

自分にとって新しいことをする時、勇気がある。でもちょっとした決心をして一步を踏み出せば、何かが変わる。その先にはきっと良い出会いがある。

IWC25で得たものを信じて、失敗を恐れず、いろんなことに挑戦していきたい。

Sampai jumpa

Yayoi Kobayashi (yayoi)

Nama saya Yayoi.

Sudah lama tidak berjumpa, apa kabar? Saya sudah pulang ke Jepang dan universitas kembali. Saya dan IWC25 anggota, semua baik-baik saja.

Terima kasih banyak atas segalanya ketika saya berada di bali. Terima kasih atas pertolongan yang diberikan tuan selama saya berada di Indonesia. Terima kasih banyak atas masakan Indonesia yang enak. Saya suka membuat ibu

pisang goreng, nasi goreng, mi goreng dan teh.

Saya telah dapat melewatkan waktu dengan gembira. Saya senang sekali ketika berada di Blimbingsari. Asurama meninggalkan kesan yang dalam. Senang sekali bias mengobrol dengan Anda. Terima kasih, karena anda mudah. Bahagia sekali bias membantu ibu. Saya menyenangkan sekali permainan dengan anak-anak. Saya cinta pada anak-anak. Saya mau lihat lagi gamelan dan tari legong. Bahasa Indonesia ramah dan ceria dan kebaikan hati. Menghabiskan hari di sini, melupakan kehidupan. Saya sayang Blimbingsari dan Asurama.

Bagi saya, 18 hari di Indonesia adalah harta karun.

Saya senang bertemu kalian. Saya suka senyum Anda.

Saya belum bisa berbahasa Indonesia. Saya belum bisa banyak menulis karena kemampuan bahasa Indonesia saya yang tidak memadai. Tetapi di Jepang dan sekarang belajar di Indonesia. Alasannya adalah karena mereka mengambil untuk berkomunikasi dengan Anda lebih.

Saya menanti hari yang dapat bertemu lagi dengan setiap orang.

Kami harap kalian senantiasa rukun dan berbahagia.

「ひととの出会い」

社会学部 谷川 優 (ゆう)



「せっかくの大学生活、無駄にしてない？」この始まりはこう思ったことからだった。思えば

いつも貴重な夏休みの2ヶ月間をだらだら過ごしてただけだった。私には学生時代に頑張ったと胸を張れることなんてなかった。そこで友達に勧められたワークキャンプ、本当に行ってよかった。本当に参加出来てよかった。きっかけはすごく小さいものだったが、行くと決心し行動に移したおかげで人生で一番の経験をする事が出来た。

事前準備

自分で行くと決めたワークキャンプだったが、正直最初のほうは何をしていいのかさえわからず、事前準備をかなりめんどくさく思っていた。また、どこかにみんなとの温度差も感じていた。でも、みんなとの距離がだんだん縮まっていくうちに温度差なんて消えていた。夏休みには、お盆休み以外を来る日も来る日もキリスト教センターの集会室で集まった。みんなで協力して日本語授業の教材を作ったりダンスや歌の練習などをした。毎日毎日会ってるから、1日会わないだけでも寂しく思った。私たち15人は同じ夏休みを過ごしてかなり仲良くなっていた。

正直言えば、インドネシアに行きたくなかった。だんだん出発の日が近づいてきて、準備が終わっていくのがすごく悲しかった。こうやって集まってる形にしたものがあつという間に終わってしまうと思うとやっぱり行きたくなかった。

まさか自分がこんなことを思うなんて思ってもみなかった。この事前準備はインドネシアに行くからの自分たちのためでもあり、私たち15人の絆を強くしたのもでもあった。インドネシアに行く前から私は参加出来て本当によかったと感じていた。そして、この事前準備のおかげで現地で臨機応変に対応することができ、何も無駄じゃないと言われている気がしてすごくうれしかった。

インドネシア

今回のワークキャンプで初海外を体験させてもらうこととなった。日本語が通じない、文化も習慣も違う異国で自分がいったい何を感じ、何を学ぶのかに少し期待していた。インドネシアに着くと日本とは違う空気やにおいがした。そういう

気がした。すべてが日本とは異なっていた。当たり前と思っていることがここではそうではない。日本での自分を捨ててたくさん吸収しよう、たくさん学ぼうと思った。

ブリンビンサリ

インドネシアに着いて、ホテルやバンガローを経験し4日目に私たちはブリンビンサリ村へ移動した。着くまでは不安がすごく大きかったのを覚えている。いったい誰と一緒にいいのか、ホームステイ先の人とはどんな人なのか、ちゃんと言葉が通じるのかなど、考えてもきりのないことばかりをあれこれと考えていた。でも、アスラマに着くとそんな不安はすぐに吹き飛んだ。まず子どもたちの笑顔に癒され、新しい土地に来たという好奇心の方がその瞬間から大きくなっていった。また、不安だったホストファミリーとの対面も、会った瞬間に力いっぱいハグで出迎えてもらい、不安を消し去るところか安心感までも同時に与えてもらった。素敵なファミリーに出会えてよかった。

どんなに遅くに帰ってもいつもハグをしてくれた。いつも一言でも喋ろうとしてくれた。いつもおいしいコーヒーと紅茶を用意してくれた。教会に行く日にはネイルをしてくれた。

思い返せば、してもらってばかりだった。こんな時にやっぱりインドネシア語をもっと勉強するべきだったなと思い知らされる。私たちはいったい何を与えることが出来たのかな。

もっともっと喋りたかった。もっともっと愛を伝えたかった。

私はこの村がほんとうに好きだ。道ですれ違いとみんな笑顔であいさつしてくれる。知らない人とあいさつすることは簡単なようだが、日本では絶対にしないことだ。あいさつをするだけで、不思議と今日も頑張ろうと思えた。あいさつすることの大切さをこの村に教えてもらった気がする。

アスラマ

「え、きれい。」これがアスラマの第一印象だった。すこし拍子抜けした。マンディ場も思ったよりきれいだったし全体的に汚いというイメージ

は全くなかった。ただ、過ごしているうちにたくさんさんの問題は見えてきた。しかし、文化とか習慣を私たちが変えることなんて出来なし、いったいどこまで口出ししていいのかなんてわからなかった。すごく難しいことなんだと改めて感じた。たくさんさん過ごしてみて、まずはいろんなことに気づくことが変えていく第一歩なのかなと思う。どんなことでも気づいて発信することが大事なように感じた。

でも、こうやって頭で考えるより子どもたちと接していく上で気づいたことのほうが多かったように思う。子どもたちと接しているとすごく純粋な気持ちになれる。見栄も何もきっといらなから、お互い本気でぶつかりあえたんだと思う。

いろんな関わり方をした。この歳になって全速力でおいかけっこをした。歌を教えてあげた。一緒にブランコを漕いだ。おりがみを一緒におった。手遊びを教えてもらった。言い出せばきりが無いけど、どれをとっても楽しかった。楽しませてあげるといよりは、自分自身が楽しくて楽しくってしかたがなかった。むしろ、遊んでもらっていた感覚だった。子どもたちとは、覚えていった数少ないインドネシア語と身振り手振りでコミュニケーションを取っていった。もっときちんとインドネシア語を勉強していくべきだった。後悔するのは目に見えていたけど、やっぱりひどく後悔した。

子どもたちといろんな話をできるインドネシア人学生がうらやましくって仕方なかった。たくさんさん喋ってくれたのに、きっといろいろと教えてくれているのに全くわかってあげることが出来なかった。こんなにも、こんなにも愛しく思うのに、伝えることが出来ない。私が覚えていった数少ないインドネシア語では伝えることが出来るわけがなかった。言葉の壁は思っているより大きかった。代わりにといっぱいハグをした。伝わっているといいけど。

子どもたちからは教えられることだらけだったように思う。すごく純粋でまっすぐ気持ちが伝わってきたし、それでいてどこか大人な部分も持ち合わせていた。子どもたちにはそれぞれに複雑な

背景がある。だから、ときどき悲しそうな寂しそうな表情を見せたが、またすぐきらきらの笑顔を与える。あの笑顔はほんとうに魔法だと思う。またあの笑顔が見たい。

お別れするときに、わたしが泣いていたら仲良かった女の子（イス）に「ゆう、すまいる」と笑顔で何回も言われた。「うん、ごめんね。笑うよ！笑う！」と日本語で言いながらお別れのバスがあるところまで手を繋いで歩いた。バスに乗り込むのに手を離れた瞬間、イスが泣き出した。「イス！すまいる！」と言いながらわたしもやっぱり泣いていた。号泣しながら力いっぱいハグをしてお別れをした。

こんなに心の底から笑えて、泣いたのは子どもたちのおかげだったなと強く思った。たくさんさんの笑顔がありがとう。

植林とワーク

私たちはソカで1日だけ植林をした。ソカは私の思い描いていたインドネシアのイメージと近かった。見渡す限りの緑、緑、緑。そしてきれいな空とのコントラスト。とにかく最高の景色だった。そこでみんなで協力しあって植林をした。どうやれば効率がいいかを考え、バケツリレーをしたりした。生きている実感がして、純粋に楽しかった。私たちが埋めた苗が大きく成長してそれが施設の運営にまわる。植林の目的はこうだってわかっているけど、なんとなく変な感じだ。少しでも役に立てていたらいいなと思う。

アスラマでのワークは、思っていたより地味だった。ひたすらバケツリレーをした。私たちは家の土台作りと解体だったので、形になるようなものではなかった。でも、こうやって私たちが今回したことを引き継いで続けていくことでアスラマが変わっていく。ボランティアは継続していくことが大事だと感じた。

さいごに

インドネシアで過ごした18日間は何にもかえることの出来ないものになった。たくさんさんの出会いと別れがあつと言う間に過ぎ去っていった。まず、

最初から最後までずっと一緒にいてくれたインドネシア人学生。いつも私たち日本人の無茶ブリに応じてくれ、つたない英語しか喋れなくても理解してくれた。全員の包容力に感謝。もっと本当はいろんな話をしたかった。あまり上手く喋れなかったけれど、本当に出会えて良かった。過ごした時間が何よりのものだと思う。

そして、ホームステイ先のイブ、アスラマのイブ。私たちがここに来たことでいつもより多く料理を作ってくれて、たくさん気を遣わせたのにもいつもたくさん愛をくれた。インドネシアに行っていて、してもらってばかりだったなと思う。また、アスラマの子どもたちや引率してくれた教員の方々、言い出せばきりが無いけれどひとつひとつの出会いにほんとうに感謝の気持ちでいっぱい。

インドネシアに行っていて自分の中にすごく変化が表れたように思う。行く前と帰って来てからでは、確実に自分が成長したのがわかる。成長なんて大袈裟だが。自分の知らない自分を発見することが出来た。21年間生きてきても知らない自分がまだいたことに感動した。これはこのワークキャンプに参加していなければ得ることが出来なかった、絶対。

さいごに。IWC25のみんな、本当に本当にありがとう。みんながいたから頑張れました。貴重な体験をみんなと共に出来て本当に良かった。もっともっと早く出会っていたかった。でも、ここで出会えて良かったなって思う。支えてくれてありがとう。愛してます！

Banyak terima kasih dan cinta

Yu Tanigawa (Yu)

Menghabiskan 18 hari di Bali penting bagi saya. Saya bisa belajar banyak. Hubungan antara orang-orang. Untuk menyetuk budaya lain pentingnya kata-kata. Sekarang tahu bahwa ada perasaan.

Saya pikir saya merasa ini semua berkat 25 kali.

Tapi hanya setengah bisa bahasa Indonesia dan Inggris. Saya sangat menyesal. Tapi banyak dari kita berbicara. Dan kau tahu aku. Indonesia adalah siswa penuh bersyukur.

Saya senang untuk berbagi pengalaman berharga dengan semua orang. Aku hanya tidak bisa melupakan kenangan.

Ini adalah pengalaman khusus bagi saya, terutama di Asurama. Anak-anak bermain dengan itu. Membuat makanan Jepang. O lahraga, pertukaran. Kerja berkeringat, Istirahat kerja. Benar-bener menghabiskan banyak waktu.

Ketahuilah bahwa ada sentimen manis bahwa anak-anak dalam kontak dengan Asurama. Yakin apakah akan menyadari Jepang. Selain itu, relawan dapat berpikir tantang. Baru saja diberikan lebih untuk memberi.

Saya suka IWC25. Benar-benar senang bertemu. Saya menghargai pengalaman ini, ini juga anggota. Ingin berbagi waktu dengan dia lagi suatu hari nanti. Untuk berjalan jalan bersama lagi suatu hari nanti Asurama. Terima kasih untuk kenangan yang baik.

Cinta dan terima kasih banyak.

Sampai jumpa lagi.

出会いに感謝

社会学部 3 回生 中西 由茉 (ゆま)



<はじめり>

私が国際ワークキャンプ（以下IWC）に参加したきっかけは、1、2 回生の時にずっとアルバイト生活をしていて、桃山に来て何もしていない自分を変えたかったからだ。はじめは、内モンゴルの緑化体験や他のボランティアに目が向いていたのだが、23回のIWCに参加した友達に、「参加するなら絶対にIWCがいい」という言葉をもらい、IWCの参加を決意した。しかし、インドネシアの知識もなく、英語もインドネシア語もまったく話せず、IWCは私にとって本当に0からのスタートだった。

<言葉>

私はまったく英語が話せない。事前研修でインドネシア語を学んだが、とりわけ話せるわけでもなかった。しかし、楽観的な性格からか、出発前から何とかなるだろうという気持ちでインドネシアに出発した。だが、インドネシアでは何度も言葉の壁にぶつかる事となった。

まず、高校の日本語授業の打ち合わせだ。高校の日本語の授業には、私たちの授業の流れをスムーズに行えるように、英語の台本を用意していた。台本を用意したのは良かったが、私たちの班には、あまり英語を話せる人がいなかった。インドネシア人学生に「台本のここがわからない」と質問をされてもうまく答えられず、向こうの質問さえ理解できないことも多々あった。そんな中、インドネシア人学生は理解しようと一生懸命に耳を傾けてくれた。台本を渡した次の日には、台本にいっぱい書き込みがしてあり、ほかの班のイン

ドネシア人学生とも確認をとりながら、必死に理解してくれようとした姿勢が伝わり、泣きそうなくらいうれしかった。それと同時に、インドネシア人学生に対してうまく説明できない自分に腹が立ち、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

高校の日本語の授業以外でも、ミーティングで日本の学生からインドネシア人学生に何かを伝えるときは、英語のできる隊長に頼ってばかりだった。やっぱり英語が出来る人が居ると、意思の疎通ができてすごく助かる。他にもさまざまな場面で自分の思ったことや気持ちを伝えられなくて、悔しい思いをした。言葉が通じれば子どもたちやインドネシア人学生、ホームステイ先の家族の人とも、いろんな話をしたかったし、もっといろんなことを知れたのではないかと思う。

<体調管理>

インドネシアに着き、短い滞在期間のうちに、みんながきるだけたくさんのをやろうとして頑張った。普段なら、何ともないが異国の地での生活、食事、ワークによって体調不良者もでた。参加者の大半の人は看護師の美和さんから薬をもらい続けて、旅の後半では不足している薬もあったほどだ。私もはじめは短い期間の間で、できるだけいっぱい働きたい気持ちが強くて、先を見据えて体調のことを考えていなかった。しかし、アスラマに泊まった次の日から喉の調子が悪くなり、美和さんに「もしかしたら風邪につながるかもしれない」と言われ、風邪薬をもらった。その瞬間に体調が悪くなれば、プログラムに参加できなくなるかもしれないという危機感を感じた。とりあえず喉がはやく治るようと、その日からできるだけ早く寝て、早く治ることを願った。喉の調子は良くはならなかったが、熱も出なかったので体調を見ながら活動ができて、無事に全てのプログラムに参加できた。体調不良をおこせば、日本に居る間に今までたくさん準備してきたことが水の泡になる。そうなれば、活動を行うことのできない本人が1番悔しい思いをすると感じた。先生方も私たちの様子を見てワークの休憩を促したり、疲れが溜まった様子を見てミーティングを

なくしたり、的確な判断をしてくださっていたとインドネシアでの日々を振り返っていて思った。

<プリンピンサリ村に入って>

プリンピンサリ村はすごく穏やかな雰囲気で、ゆったりと時間が流れているように感じた。すぐに私はプリンピンサリ村の雰囲気に魅了され、大好きになった。そして、いよいよプリンピンサリ村にあるアスラマで子どもたちと対面。私は緊張していたが、子どもたちのキラキラした笑顔が緊張を吹き飛ばしてくれた。初対面から手を握りに来てくれる子や、照れてどこかにいってしまう子、いろんな子どもたちの姿を見ることが出来た。

プリンピンサリ村の生活に慣れ、1日の決まったプログラムをこなし、1日1日が本当にあつという間に過ぎていく中で色々なことを思った。子どもたちに愛情を持って接し、イブたちの手伝いもできるが、私たちがいなくなればそれを続けることができない。その場限りになってしまう。長い目で見て子どもたちやイブに何ができるのか。頭の中で、考えてはいたがはっきりした答えが出ずに時間だけが流れて、何も行動できない自分がいた。

また、アスラマについては事前研修で学び、IWC24の方の話を参考にして、手洗い指導や掃除の指導などの衛生面に力を入れようと出発前に話し合っていたが、実際アスラマの子どもたちは毎日掃除を行っていたし、食事の前には手を洗っていた。先生方から毎年アスラマを訪れるたびに、施設がどんどん良くなっていくと聞き、去年よりも改善されているのだと感じた。しかし、手洗いや掃除が改善されてきているからこそ、私たちには何が出来るのだろうかと思うようになった。

そんな中のある日、福田先生と話す機会があった。何もできていない現状を話すと「子どもたちやイブと接することで知らなかったことや目に見えない何かが見えてくるよ」と言ってくださり、その日から子どもたちと接するときは全力で遊び、スキンシップを多くとった。そして、空いた時間にはできるだけイブの手伝いをした。その日の夜のミーティングでは、思っていることをみんな

に伝え、何ができるか話し合った結果、まずアスラマの施設長であるワヤンさんにアスラマの現状について直接話を聞くことになった。次の日にワヤンさんとお話しする機会を設けて話を聞いたうえで、私たちは小さい子のマンディの手伝いや掃除、マンディ、歯磨きについての紙芝居、排水溝、ゲスト用トイレの掃除を行うことになった。マンディを手伝ってみると、子どもによって洗ひ方の丁寧さのばらつきが目立ったし、怪我をしても足をしっかり洗わないため、そこから菌が増えて膿んでしまっている子が多くいた。衛生面での低さを見ることが出来た。目に見えているものだけで判断していたが、目に見えているものだけが全てではないと知れたし、実際に何をすれば良かったのか、答えは出なかったとしても、積極的に行動をおこしていけば、いろんな可能性が広がるのだと学ぶことができたと思う。

<ホームスティ>

私はパパ、イブ、息子2人の4人家族の家にホームスティした。はじめはぎこちなかった会話が日に日にコミュニケーションが取れるようになっていき、アスラマから帰ると、家の外のベンチでホストファミリーと飲み物を飲みながら会話をするのが日課になった。最終日の夜は私たちの「ってきます」と「ただいま」が聞けなくなるのが寂しいとあって、パパが泣いたので思わず私も泣いてしまった。ホームスティ先で家族と一緒に生活して、家族の一員になれた気がしたし、家族の温かさを知れた。

「家族ってものすごくいいものだな」と思った。家族の温かさを知ることによって、あらためて家族の大切さに気付いた。普段日本では何気なく過ごし、そんな気持ちを忘れていた。家族の存在に感謝しなければならぬ。

<Terima kasih>

インドネシア人学生には本当に助けられた。何から何までサポートしてもらっていた気がする。インドネシア人学生は私たちが話す日本語にもすごく反応してくれて、吸収力と頭の良さには驚い

た。また、よく歌を歌ったり、とても陽気でワークや疲れがたまっていたときに、その陽気に元気をもらうことが度々あった。生まれ育った国も文化も違うが、私にとって最高の仲間だといえる。

インドネシアでの日々は1日1日が本当にあっという間だった。1つ1つプログラムが終わっていくのに、すごく寂しさを感じていたくらいだ。IWCでは様々な出会いがあって、たくさんの人の温もりを知ることができた。また、自分の新しい一面を知ることができ、たくさん学ぶことがあった。1人では何もできないけど、みんながいることですごく頑張れた。ワークキャンプを通して出会った全ての人々に感謝します。

Terima kasih!!

Bali bagus!!!

YUMA NAKANISHI (YUMA)

Apa kabar?

Saya di sini baik-baik saja.

satu bulan telah berlalu, sejak saya kembali ke Jepang,

saya kembali teringat dengan jelas hari-hari yang saya habiskan di Indonesia.

Tiap hari yang menyenangkan sehingga dalam sekejap waktu sudah berlalu.

Meskipun waktunya singkat, tetapi banyak yang saya pelajari selama bergaul dengan anggota Indonesia.

jika saya bisa berbahasa Indonesia,saya pasti akan berbicara bermacam-macam hal.

Orang Indonesia sangat ramah dan begitu hangat...

pengalaman tak terlupakan bahwa saya benar-benar bisa mencintai seseorang

Saya sangat bahagia bisa bertemu dengan

teman-teman IWC 25

Saya tidak akan pernah melupakan hari-hari yang saya habiskan di Indonesia

Senang bisa bertemu dengan semua orang di asrama,

Ibu Ishii, swikrama, forman, mahasiswa Indonesia,,, anggota IWC25.

Sampai bertemu lagi. Semoga berhasil.

Terima kasih banyak.

<Amazing>

法学部3回生 西口 彰 (あっくん)



<<そ大学生>

私は指定校推薦でこの桃山学院大学の法学部に入学した。指定校推薦と言っても、私の高校で桃山学院大学の法学部を志望したのが私だけで、評定がぎりぎりだったのに幸運なことに入学できた。入学はできたが案の定である。授業には全くついていけなかった。ついていけなかっただけでなく、何も目標がなく、家が近いというだけで選んだので、入学できたというのに満足してしまい、やる気が全くなかった。

決まったクラスがない大学では、人見知りで見つきの悪い私には友達があまりできなかった。また、クラブやサークルにも見学には行くものの、結局どこにも入らなかった。地元が大学のある和泉市なので高校までの友達と遊べる。だから別に大学の友達がいなくてもいいと思っていた。そして、授業をちよくちよく休むようになり、1回生のときの修得単位数は平均よりグンと少なかった。学校に行かず、大学でできた友達も2人ほど、

単位も取れていない。「くそ大学生（ダメ人間）」だった。

<IWCとの出会い>

2回生になると、大学で1番仲の良い友達がIWC24の説明会に行くと言った。その時誘われたが、人見知りで面倒くさがりの私は行かなかった。その友達は女学生である。彼女も私と同じで、学校に来ず、大学の友達も少なく、単位も取れていない「くそ大学生」だった。むしろ私よりダメ学生だった。そんな学生がIWC24に参加した。IWCに参加してから彼女は、学校に行くようになり、授業も受け、IWCの事前研修に行き、びっくりするほど変わった。そんな中、私は相変わらず、「くそ大学生」の日々を送っていた。

彼女が、インドネシアへ行くまでの準備を終え、インドネシアへ行き、日本へ帰って来ると、私は沢山の話を聞かされた。写真も沢山見せられた。その時の彼女は清らかな表情だった。彼女は友達も増え、2回生の単位は全部取った。そんな中、私は相変わらず、「くそ大学生」の日々を送っていた。

私は彼女が羨ましく思えてきた。離れていく気もした。しかし、その時は来年のIWC25に参加しようとは思っていなかった。

<きっかけ>

私の周りには大学に行かず、高卒で働き出した友達が沢山いる。そんな友達にある日、「何のために大学行っているのか?」「将来何になるのか?」と聞かれた。しかし、何の目標も夢もなく、とりあえず大学に行っていた私には、その質問に答えることができなくて笑いでごまかした。それがすごく悔しかった。

私はそのことを昔から仲の良い2つ年上の先輩に話した。先輩は、「とりあえずどこでもいいから、地元から飛び出せばいいよ!」と答えた。その先輩は、夏は他県の海の家に働きに行ったり、冬は他県のスキー場に働きに行ったりしていた。そして、やりたいことが見つかると、スキューバダイビングの仕事を得て来年から沖縄で住むことにな

っている。私は視野を広げるためにもどこかへ行くかと決心した。でも、大学のプログラムで行かないと、大学に来た意味がないと思った。場所はどこでも良かった。そこで、IWCしか知らなかったのも、IWC25に参加することに決めたのだ。

<親からの反対>

IWCに参加することに決めた私は、まず父に「この夏にインドネシア行く」と言って、説明会でもらった資料とIWC24の報告書を見せた。答えはNOだった。「ボランティアに行くのなら東北に行け!日本がこんな状況なのに何を言っているのか!」と諭された。東日本大震災のことを言っているのだ。私は「ボランティアとは違う!」と返した。私はIWCをボランティアだと思っていなかったのである。なぜなら、ボランティア活動に参加したことのない私にとって、ボランティアとは何かすら知らなかったのだ。この時の自分にとって、IWCに参加することは誰かのため、何かのためではなく、単に自分のためでしかなかったのである。

結局、父の承諾は得られないまま、私は勝手に申込書に印鑑を捺して提出した。テストも面接も受けて、見事IWC25の15人のメンバーに選ばれた。しかし、家に最終確認のハガキが届き、父にばれた。そのハガキを出さないとインドネシアに行くことができないのだ。

私は父を説得しなければならなかった。しかし、そう簡単ではなかった。父からの質問地獄に私はくじけそうになっていた。「行ってどうする!」「何を学ぶ!」「行ったら何かが変わるのか?」など、わからないことを聞かれ続けた。私は最後に「行ってみなければわからない」と言ってあきらめた。そして、最終確認のハガキの締め切り日ぎりぎりに、父から無言でハガキを渡された。私はすごく嬉しかった。

<出発まで>

すごく嬉しかったが、すごく不安もあった。初めての顔合わせの時、IWC25のメンバーは真面目そうな人ばかりで、着いて行けるのかどうか不

安だった。さらに、人見知りな私は15人の中に溶け込めるかどうか不安だった。私はとりあえず休まずに、必死に着いて行こうと思った。

事前研修が始まった頃は、皆遠慮していたのか、とても静かだった。しかし、日が経つに連れて少しずつ仲良くなり、賑やかになっていった。真面目そうと思っていたが面白い人ばかりだった。しかし、喋る人と喋らない人で分かれていた。

皆が皆、すごく仲良くなったのは夏休みにした合宿からだと思う。事前研修では、講義が終るとすぐに帰ってしまい、あまり話したりできない人もいた。仲良くなる時間がなかった。合宿ではそんな時間がたっぷりあって、すごく仲良くなれたと思う。私は大学で友達ができたと思えずごく嬉しかった。あと、IWCの準備もこの合宿でかなり進んだ。一泊二日だけだったが本当にためになった合宿だった。

夏休みはほぼ毎日皆で集まり、準備をした。それは私にとってすごく新鮮だった。やり方、取組み方が自分にとって新しすぎて、ワクワク感がたまらなかった。周りのメンバーは真剣な時は考え方や集中力がすごい。私は、周りがすごいから今のうちにいっぱい恥をかこうと思った。気づけば、いろんな不安はなくなっていた。

合宿が終わってから、すごく時間が経つのが早く感じた。そして、出発の日がやって来てインドネシアへ飛び立った。

<インドネシア人学生>

インドネシアに着いて、まず緊張したのが、インドネシア人学生との初対面である。日本で買ってきた指差しの本で必死にコミュニケーションを取ろうとしたが、なかなか上手く会話ができない。しかし、インドネシア人学生から沢山話しかけて来てくれて、日が経つに連れて仲良くなっていき、言葉が通じなくても簡単な単語や身振り手振りなどで、コミュニケーションを取れるようになってきた。

インドネシア人学生とのコミュニケーションは本当に大切だった。中学、高校での日本語授業や、紙芝居、交流会、スポーツ大会など、すべてはイ

ンドネシア人学生がいないとできなかったことだからだ。

インドネシア人学生との別れの時、本当に悲しかった。私はこのインドネシア人学生のこと、一生懸命協力しあったことを忘れることはないだろう。

<ワーク>

私はワーク班の班長である。しっかりしているとは言えないが、やる気は誰よりもあった。まずはソカでの植林で、ワーク班の班長だった私は、皆に指示を出したり、休憩のタイミングを決めたりしないといけなかった。IWCではいつも誰かの後ろに居た私は、皆を指示するなど上手くできるかどうか不安だった。しかし、やる気は誰よりもあったつもりだ。

そして、誰よりもやる気があった私は、皆に指示を出した。先生や先輩などのアドバイスもあって、水をバケツリレーで運んだり、班ごとに役割を分けたりして、何とかグダグダになることはなかったと思う。

そして、次はプリンビンサリのアスラマでのワークだ。事前準備の時は、解体作業？組み立て作業？何をするのか、どんなことをするのかわからなかった。着いてから聞くと、新しく建てる女子寮の土台作りだった。まずは、大量の砂や岩を建てる前の寮の近くに移す作業だった。それも、バケツリレーでし、大きな岩は力のある男が運ぶようにした。そして、建てる前の寮のサイドに穴を掘り、岩とセメントで土台を作った。この寮が完成すれば私たちが作ったところは見えなくなる。しかし、見えないところを作るという貴重な体験ができて良かった。

私はワーク班の班長になって、ワークでの効率の良い方法を考えるために、実はすごく頭を使っていた。少しは成長したと思った。

<プリンビンサリ>

私たちはプリンビンサリという村でホームステイさせてもらった。ホームステイ先の人たちとのコミュニケーションは、指差しの本などで積極的

にとった。ホームステイ先の人はすごく親切で優しくかった。そして、イブが作ってくれたコーヒーや紅茶はすごく甘かったが私はそれが大好きだった。

寝泊まりはホームステイだが、私たちはプリンビンサリ村にいるほとんどの間、アスラマというところで活動していた。そこには、最初に紹介した、去年のIWC24に参加していた友達が見せてくれた写真に写っていた子どもたちがちょこちょこいた。アスラマとは、親がいない子や、何らかの事情があって親と暮らせない子が集まるところだ。子どもたちの背景は深刻だが、そんな背景があるなんて全然感じられなかった。

子どもたちは人懐っこくて、すごく仲良くなった。子どもたちはスポーツ大会や遊びなど、何をやるのにも、いつも一生懸命だった。私は日本でも小学生くらいの子どもたちと関わることはあまりなかった。だから、余計に良かったのかもしれない。何にでも興味を持って、何にでも一生懸命になれる小さい子どもを見てみると、まだ私は若いのに寂しい感じになった。思うがままという感じが良かった。いつから私に子どもたちのような一生懸命さがなくなってきたのだろうかと感じた。いろいろなことを知る代償なのかもしれないと思った。それは、インドネシアでも日本でも同じだと思う。

アスラマの子どもと日本の子どもの違いは、アスラマの子どもはわがままではない。私には子どもはわがままですぐに泣く印象があった。しかし、アスラマの子どもたちは、しっかりしていて、少しくらいのことでは泣いたりしなかった。

正直、私たちが何をすればアスラマの子どもたちのためになれるのかわからなかった。子どもたちと遊んであげることか、掃除を手伝ってあげることか、体を洗ってあげることか、私はとりあえず、自分にできることをした。朝早く起きてアスラマへ行き、子どもたちの体を洗ってあげた。ゴミがあれば拾った。子どもたちといっぱい遊んだ。これが子どもたちのためになったかどうかかわからないが、自分なりにできることをしたつもりである。

そして、プリンビンサリ村との別れの時がやってきた。ホームステイ先の人との別れ、アスラマの子どもたちとの別れ、その時は涙を見せたくなくて堪えていた。アスラマの子どもたちは入れ替わりが多いらしい。だから、もう二度と会えないかもしれないということが、悲しくてたまらなかった。プリンビンサリ村の皆とお別れして、バスで号泣してしまった。日本で私を知っている地元の友達に、私が号泣したということを話しても、誰も信じてくれない。自分でもまさか泣くなんて思ってもいなかった。プリンビンサリはすごく温かい村だった。

<星空、景色、夜景>

インドネシアでの景色などにかなり癒された。緑がたくさんあって、私たちが泊まったホテルの近くには海もあった。空が広がった。夜は星も綺麗だった。そして、キンタマーニ高原の景色と、帰りの飛行機から見えたインドネシアの夜景は最高に綺麗だった。

私はデジカメで風景などをいっぱい撮った。しかし、上手く撮れなかった。画素数が少なかったということもあるかもしれないが、星空に関しては何も写らなかった。大事なモノや本当に綺麗なモノは、レンズを通して決して見ることができないのかもしれない。「自分の目でしっかり見ろ!」ということだと思う。本当に大事なモノや綺麗なモノは目に焼き付いて忘れることはないだろう。

<変化>

インドネシアから帰ってきて、普段の生活に戻った。結局、将来の目標や夢は見つからなかった。しかし、確実に変わったところがある。それは、この桃山学院大学に入学して本当によかったと思えたことだ。IWC25のメンバーという最高の仲間もできた。最高の経験、最高の思い出もできた。学校もほとんど休まなくなった。気づけば、私は「そ大学生」ではなくなっていた。

<最後に>

IWCで得られたモノはすごく多かった。私の

中でIWCはボランティアではないと、父への反抗のときに思っていたのは、自分のためになると思っていたからだ。だから、こんな言い方は変だが、私からすれば「やらせてもらっている」でも、向こうからしたら「やってもらっている」。どちらとも受身で、どちらとも何かをもらっている。私の中でIWCは、そんなすばらしいもらいあいのプログラムだった。

後期の履修登録では、インドネシアに行くまでは全く興味がなかった、国際協力という、ボランティアなどについての講義をとった。3回生にして友達ができ、やっと大学が楽しくなってきた。

Pikiran dan terima kasih

Akira Nishiguchi (Akkun)

Aku berada di luar negeri untuk pertama kalinya ini IWC. Jadi cemas adalah awal. Bahasa Inggris secara tradisional lemah, saya pikir untuk keluar dari Jepang. Tapi kemudian saya mengumpulkan keberanian untuk bergabung IWC telah berubah ini. Masuk ke Indonesia, Jepang, dan pandangan yang berbeda, jika pemandangan, saya merasa sangat segar. Saya cukup disembuhkan. Dalam hal ini IWC, sekarang tertarik di dunia.

IWC, sahabat bisa, Anda adalah kenangan terbaik. Mahasiswa dan Indonesia, Mahasiswa dan IndonesiaBurinbinsari beberapa homestay kami, staf Asurama dan anak-anak, sekolah dasar, menengah sekolah, sekolah tinggi, kami ingin berterima kasih kepada semua yang terlibat dalam IWC. Dan terima kasih kepada semua orang yang terlibat dalam IWC St Andrew. Mari saya bergabung IWC, Terima kasih juga kepada orangtua saya. Itu bisa berpartisipasi dalam IWC, Universitas telah mengubah hidup saya. Saya benar-benar baik pada siswa St Andrew. Terima kasih.

「未来の自分に繋がる18日間」

社会学部社会福祉学科 石川 輝佳 (てるか)



私は昔から恥ずかしがり屋で人見知りだった。人前に立つと手が震え出すほどで、いつも人前に立つことを避けていた。だけどその反面「こんな自分を変えたい」とも思っていた。そんな時に国際ワークキャンプ（以下IWC）の存在を知った。入学時のガイダンスでIWCの募集チラシが配られ、直感で「これに行きたい!」と思った。だけどすぐに払える費用ではなかったのでバイトをして費用を貯め、次の年に参加しようと決めた。特別仲が良い子と申し込んだ訳でもなく1人で決めて挑戦したことだったので、はじめのうちは人見知りを発揮し、不安に思ったりもしたが、事前準備を通して少しずつみんなと打ち解けていけるようになった。夏休みになると事前準備で毎日顔を合わすので自然と仲が深まり、毎日が楽しかった。事前準備ですら終わるのが寂しく思えたほどだ。

春から毎週行われてきた事前準備も含め、IWCでの体験が私の中の何かを変えた。1回生のうちはただ何となく学校に通い、これといった目標もなくバイトをして友達と遊び、毎日が過ぎて行った。だけど事前準備が始まってからは、一日一日があっという間に過ぎ、1カ月がとても短く感じるようになっていた。みんなで一つのものを作り上げていくという達成感も覚えた。そしてこのインドネシアワークキャンプは多くの人達に支えられて成り立っていることを実感し、感謝の気持ちをもって当日の朝を迎えた。

バリについてからの18日間は充実でしかなかった。19年間の人生で、今までこんなに毎日が充実していると思ったことはなかったし、初海外の私にとっては目に映るすべての物が新鮮で魅力的だ

った。そしてメンバー同士、とにかく仲が良かった。事前準備を含め一度も衝突することなく、また、インドネシア人学生との仲も日に日に深まっていき、本当に中身の詰まった毎日を送ることができた。

<ソカでの植林>

インドネシアに来て、初めてみんなで力を合わせて成し遂げたことと言えば、ソカでの植林。肥料を穴に入れ、重い水をバケツリレーし、みんなで苗を植えていった。汗だくになりながらもみんな笑顔で、お互いを助け合っていたことが今でも記憶に残っている。そして二日間滞在したバンガローでは、部屋のドアを開けると目の前に海が広がっていて、夜になると波の音が怖いくらいに聞こえてきて、すごく星が綺麗だった。みんなで砂浜にいて寝転んで星を見たり、いろんな話をして楽しい時間を過ごした。あんな綺麗な星空を見たのは初めてだった。

<アスラマでの様々な出会い>

アスラマに入る前日は、正直すごく緊張した。ホストファミリーや子どもたちと「うまくやっていけるだろうか」という気持ちでいっぱいだった。だが、そんな不安はアスラマに着いた瞬間消えた。1人の女の子が名前を聞いてくれて、それからはずっと隣で手を握っていてくれた。子どもたちを見てまず最初に思ったこと。笑顔がかわいい。どの子どもも目がキラキラしていて、笑ってくれる度に癒された。とても人なつっこく一緒に遊んでいると疲れも吹っ飛んだ。

そしてアスラマではもう一つ新たな出会いをした。それはドイツから1人でアスラマに来ていたある女性との出会いだ。私は彼女のことがもっと知りたいと思い、南出先生の英語の力を借りて、ここに来ようと思った動機やドイツでは何をしてきたのかを聞くことができた。その女性の持つ意見や考え方、行動力のすごさを知り、今の私の年でアスラマに半年間ボランティアに来ていたこと、そして今度は医師として人の力になりたいと思っていること等を知り、同じ女性としてすごく

かっこいいと思ったし尊敬した。また私も、もっといろんな事に挑戦していこうというやる気にも繋がった。出会って不思議だなと思ったし、こういった一つひとつの出会いをこれからも大切にしていこうと改めて思った。

アスラマに来てからは、とにかく子どもたちとたくさん遊んだ。いっぱい笑顔もらった。子どもたちの背景をわかりつつも、この時はまだ本当の意味ではわかっていなかったのかもしれない。ただ、ぎゅうっと抱きしめてあげて「かわいいー！すきー！」という気持ちを体いっぱい表現しようと毎日思っていた。そんなある日、私はアスラマの子どもたちと一緒に一泊することができた。その日はたまたま私が泊まらせてもらった部屋の子のお母さんが一泊だけしに来ていて、手土産には新しい服とお菓子。夜十時を過ぎてもその親子は楽しそうに会話をしていた。そして他の子どもたちはその親子を見守るように、会話が終わるまで部屋の電気を消さずに待っていた。すると、ある1人の女の子が気を利かせてか、「私のベッドと一緒に寝て下さい。」と自分が寝ていたベッドを親子に譲った。その親子を見ていた他の子達にもいろいろな感情があっただろう。たった七、八歳のまだまだ甘えたで幼いと思っていた子どもたちのそんな姿を見て、私は何とも言えない気持ちになりながら眠りについた。翌朝見た、親子が抱き合って幸せそうに寝ている姿、子どもたちの天使のような寝顔はきっと一生忘れることはない。次の日の朝、お母さんとバイバイして戻ってきたその子の目は真っ赤で、でも笑顔で学校に行く準備をしていた。子どもたちの背景を深く考えるようになったのはこの日からだった。

そして子どもたちの出身村訪問の日がやってきた。三宅先生から事前に説明を受けてはいたものの、やっぱり自分の目で見て感じるが一番の理解に繋がると思ったので、こういった機会を与えて下さったことをすごくありがたいと思った。そしてバニユポ村へ着いてからは、いろいろな感情が押し寄せてきた。言葉が出なくなった時もあった。現実を突き付けられたようで、涙しているメンバーもいた。バニユポ村を回っている間、私

は「この現実を知った今、自分にできることは何だろう？」とずっと考えていた。でも考えれば考えるほど答えは出なくて、自分にできる事なんてなくて。ただ、自分が日本でどれほど裕福で何不自由な生活を送っていたかを考え直させられただけだった。ただでマイナスな考えをするより、少しでもプラスになる事をしていこうと思い、残された時間は少なかったが「とにかく子どもたちといっぱい遊んで、いっぱい笑顔になってもらおう！」という気持ちでアスラマに帰って行った。私だけじゃなく、メンバー全員思っていたことだと思うが、やっぱり子どもたちの笑顔が何よりも癒しだった。

<ホストファミリー>

私は、後輩とホームステイ先が一緒だった。アスラマでは常に一緒に行動していたので、この十日間ですごく仲良くなった。ホームステイ先ではいつも何かしら笑っていて、寝る前もいろいろな話をしたり、ホームステイ先の人が毎日出してくれる甘い紅茶やお菓子を頑張って二人で食べたりと、楽しい時間を過ごした。だが、ホストファミリーとは、なかなか打ち解けられずアスラマに来てからの数日間はすごく悩んだ。先生達にも相談してインドネシア語の辞書をもう一冊借してもらったり、美和さんにも会話が広がるようなインドネシア語をたくさん教えてもらった。ホストファミリーとの時間をなるべく増やそうと、朝5時に起きて子どもたちと遊んだり、寝る前や少しの空き時間でも家に帰ってコミュニケーションをとるように心掛けた。そんな甲斐あって、だんだんと会話する時間も増え私たちがアスラマから帰って来るまで寝ずに待っていてくれた日もあった。真剣に向き合おうとすれば相手にも気持ちが伝わるということを知った。

<インドネシア人学生の存在のでかさ>

一日目に泊まったディアナプラホテルから18日間一緒に行動を共にしてきた訳だが、インドネシア人学生には本当にいろいろな場面で助けてもらった。日本語授業の時には、私の慣れない英語を

必死で理解しようとしてくれて、インドネシアの生徒達にわかりやすく説明してくれた。いつも笑顔で陽気で、だけどすごく優しくいつも私たちのことを気にかけてくれた。彼らあってのインドネシアワークキャンプ。本当にそう思う。最後の最後まで一緒にいて楽しかった。Vickie, Derry, Joshu, Fenny, Ita, Emmyありがとう。またいつか絶対会いたい！

<関わってくれた全ての人達に感謝を>

今回ワークキャンプに参加して、出会えた人達・関わってくれた人達に心から感謝している。ワークキャンプに参加していなかったら見えてこなかった事もたくさんある。そしてメンバー14人ともインドネシア人学生とも出会えてなかった。日本に帰ってきて、こうして報告書を書いていると改めてワークキャンプに参加して、みんなと出会えて良かったと思う。そして引率教職員の先生方。日本でもインドネシアでも本当にお世話になりました。私がインドネシアに行きたいと言った時に、快く賛成してくれて背中を押してくれた親にも本当に感謝している。インドネシアへ行く当日の朝、寂しいと言いつつも笑顔で送り出してくれた。その姿を見て私も、この18日間を無駄にすることなく自分の成長に繋がるように、いろいろな事を吸収して日本に帰って来ようと思った。インドネシアに行って、衣食住に困らない環境で暮らせている事、今まで自分が当たり前だと思っていた事が全然当たり前ではなかった事、まだまだ自分が親に甘えて生活している事、自分が大切だと思っている人達が側にいてくれる事のありがたさ等いろいろな事に気付き、考えさせられるようになった。アスラマの子どもたちと出会って、日に日に仲良くなりマンデイも一緒にできるようになって、「おいで」と手を広げると来てくれる子どもたちの素直で可愛いところや、元気いっぱい歌を歌っているところ、思わず抱きしめたくなるような寝顔、全てが私の宝物になった。インドネシアでの経験は私にとって確実にプラスになり、いろいろな事に挑戦していこうというやる気に繋がった。インドネシアで見た物・感じた事を活かしていけるよ

うな未来にしたい。関わってくれた全ての人達に感謝します。出会ってくれて、ありがとう。

「Saya cinta BALI★」

Teruka Ishikawa (Teruka)

terima kasih untuk 18 hari ini. Saya bangga menjadi bagian dari IWC 25. IWC dan mahasiswa indonesia membuat saya bertumbuh. Saya selalu tidak sabar pergi ke asrama setiap hari, karena senyum anak-anak sangat manis. Tuan rumah saya sangat ramah, kakek dan nenek lucu, ibu sangat baik. Ibu selalu membutuhkan teh hangat setiap pagi.

Awalnya saya sulit berkomunikasi dengan mahasiswa Indonesia, sedikit demi sedikit kami bisa bicara satu sama lain dan terbiasa mengobrol. Kehidupan di Indonesia sangat nyata setiap hari, saya menikmatinya. Saya mendapatkan pengalaman. Saya tidak akan melupakan pengalaman ini seumur hidup saya. Peserta IWC adalah teman terbaik saya dan orang-orang yang ramah. Saya ingin bertemu mahasiswa Indonesia n tuan rumah saya, suatu hari saya akan kembali ke Bali lagi. Saya rasa saya akan mencoba banyak hal di Jepang, pertemuan ini dengan orang-orang Indonesia Work Camp mengubah masa depan saya. Saya akan bertumbuh tanpa melupakan apa yang saya lihat, apa yang saya rasakan, dan apa yang saya alami di Indonesia.... Senang bertemu dengan anda. terima kasih banyak.

「インドネシアでの貴重な体験」

経営学部 北坂 知沙 (ちさ)



<未知なる世界>

5月から始動したワークキャンプ。正直、筆記試験・面接では、応募したことが恥ずかしく申し訳ないと思うほど出来が悪かった。そのため、参加が決定したときの驚きと嬉しさを今でも鮮明に覚えている。

8月の旅立ちまで、事前研修やインドネシア語研修が始まり、結団式・懇親会・募金活動・合宿・日本食作りの練習など様々な事前学習を行った。情報が少ない中での準備は大変で不安だらけだった。しかしその中で、すごく笑顔で経験談をしてくれる24回の先輩たちや引率教職員が印象に残っており、未知なる世界への好奇心でいっぱいだった。

<インドネシアに来た>

デンパサール空港を出ると、風が涼しく、そこまで暑さを感じなかった。と同時に自分は今、インドネシアに居るんだ。という実感がなく、外国ではなくまるで沖縄にでも来たような感覚だった。

街に出てみると、インドネシアの交通事情に驚いた。一台のバイクに3,4人が乗っていたり、車の両脇をバイクが通って行ったりと日本では見れない光景が目の前に広がっており、「ここは日本では無いんだ」と初めて実感した。

インドネシア人学生は本当に優しく、歌が好きで歌唱力がすごかった。理解力も高く様々な場面で助けられた。

<到着>

インドネシアに来て4日目。やっとアスラマに着いた。しかし、到着が早かったため、子どもたちはお昼寝中だった。少しすると、小さい子どもたちが集まって来て、大きい子どもたちが楽器で演奏し、歓迎してくれた。

そして、すぐにホームステイ先が発表され、3人の男の子が家まで連れて行ってくれた。先輩たちが言っていたみたいに、重たいスーツケースを「自分で持つよ」と言っても「大丈夫」と言って、それをひきずりながら私の手をひっぱり案内してくれた。

夕方再びアスラマへ行くと、元気いっばいの子どもたちが待っていた。到着の時お隣に座っていた女の子が覚えてくれていて、「こっち」と言いながら隣の席を空けてくれた。すごく嬉しかった。村の人たちも集まり、バリダンスやガムラン演奏で盛大に入村式が行われた。

<ホームステイ>

人生初めてのホームステイ。ホストファミリーは、パパ（父）イブ（母）二人の息子の4人家族。そして、裏庭には可愛いたくさん豚さんがいた。離れを用意して笑顔で迎え入れてくれた。

しかし最初、イブと兄のウィラが病院に行くため不在で、パパも弟のリスクもどことなく寂しそうにしている、大変な時に受け入れてくれたと感じた。しかし、4・5日後、イブとウィラが帰って来ると家族が揃い賑やかになった。

美味しいピサングレンや紅茶を頂きながら、毎晩インドネシア語の本を片手に家族やパパやウィラのお友達と話をし、笑った。

離村式の時には、綺麗な民族衣装を着せてくれた。生地が薄かったため、少し肌寒かったが、イブの愛情がとても温かかった。家族みんな優しく、温かい人でこの家族に出会えて本当に良かった。

<ワーク>

IWC25の「ワーク内容は、新しく作る建物の基礎部分を創ってもらいます。重労働です」これは、事前学習の時にスクラマさんがおっしゃった

言葉である。全く、想像がつかなかった。「重労働とはどんなものだろうか?」「建物の基礎という重要な部分を私たちに任せて良いのだろうか?」という思いだった。

実際のワークでは、砂や石を運ぶために、ひたすらバケツリレーをした。炎天下の中、同じ作業ばかりだったが声を出したり、ときには歌を歌ったり、学校が休みのときは子どもたちが手伝ってくれたりして、大きな山だった砂は日に日に崩れて行き、全て運ぶことができた。今回のワークは基礎部分ということで形には残らないが、一番重要な部分をさせて貰った。立派な建物が建つだろうと信じている。

<プリンピンサリ村の生活>

プリンピンサリ村の生活は、毎日がイベントのようで楽しかった。ホームシックなどにはならなかった。目覚まし時計など要らないぐらい朝一で、いろんな動物の鳴き声が聞こえ起こしてくれた。挨拶をしながら村内を歩いていると、バイクに乗っている人にもっこりと挨拶してくれた。夜は暗く、放し飼いの犬に何度か驚かされたが空を見上げると星や光っている凧が綺麗だった。又、演奏練習しているガムランの美しい音色が聞こえてきた。

マンディは本当に冷たく、最初は慣れず気合が必要だった。虫が大の苦手な私だが、ヤモリもハエも不思議とそこまで怖いと思わなかった。人間って、しだいに環境に慣れ応じるものなんだと感じた。

<アスラマ>

アスラマにはすごく元気な子どもたちと様々な動物がいた。お皿を洗っているときの断水には困った。ある日、一日だけアスラマの子どもたちと一晩過ごす時間を頂いた。一緒に寝て、朝早く一緒に起き子どもの生活を体験した。この時、普段では見ることのできない子どもの姿が見れて、新鮮だった。

村を去る日の朝、初めて雨が降った。空はまるで私たちを表しているかの様だった。今まで、笑

顔溢れる子どもたちの目から流れる涙を見た。

ブリンビンサリ村を後にし、ディアナ・プラに戻るとエバリュエーションの準備が始まった。アスラマがもっと良くなる様に意見の出し合いをした。その際、あのアスラマで泊まったときの経験が活かされた。何度もミーティングを行い、これからのアスラマについて話し合い、エバリュエーション当日、私たちが思った提案をしっかりと伝える事が出来た。

<刺激～言葉の壁～>

このワークキャンプでは、様々な人から刺激を受けた。英語がぺらぺらなインドネシア人学生。日本語も積極的に覚えている姿を見ると、私もインドネシア語を一つでも覚えなければと刺激をもらった。又、アスラマのある子どもが日本語で自己紹介してくれた時は驚いた。こんな小さな子どもが日本語を発しているのだと。それに対しての私の語学力を悔やんだ。一生懸命伝えようとしてくれているのに、言葉が理解できずもどかしさを覚えた。

<感謝>

IWC25に参加できた事に感謝。Tangan&Tangan(手と手)。様々な活動を通して、ワークキャンプの特色である「協働」を学べた。これからの人生でこの様な経験をする機会には滅多に出会えないだろうと思う。そして、私は日本では出来ない体験をこの夏出来、新たな課題・目標を見つけることができた。すごく光栄なことである。ありがとうございました。

最後に、様々な段取りや手配をしてくれたスクラマさん。ずっと私たちの体調を気にしてくれた美和さん。事前準備の時から見守ってくれたIWC団長の松平チャブレン。エバリュエーションの際、英語文を作成してくださったり、アスラマツアーをしてくださった三宅先生。ずっと記録に残すため、ビデオを回してくれていた南出先生。一緒にワークをしたり朝の集いの際、良い話をしてくださった福田先生。松山さん。フォルマンくん。日本で見守ってくれていたキリスト教センタ

一の職員の方々。そして、すごく頼りになるインドネシア人学生。IWC25の皆。ありがとうございました。

Terima kasih!!! ~IWC25~

Chisa Kitasaka (Chisa)

Saying asurama, mahasiswa universitas Indonesia, bapak swikrama, ibu miwa, bapak forman, bapak, ibu, wira, rizka, apa kabar? Mudah-mudahan sehat-sehat selalu. Saya baik-baik saja di jepang.

Terima kasih telah banyak memberikan pengalaman dan kenangan indah. Saya mendapatkan banyak pengalaman menarik dari kegiatan lancer. Kemudian minta maaf karena saya tidak bisa bahasa Indonesia.

Saya sering membuka kamera digital dan ponsel dan melihat foto-foto yang diambil waktu itu.

Senyum cerah di anak-anak kita, mohon jantung di orang, ramah mahasiswa universitas Indonesia, enak pisang goreng di ibu, keindahan bintang di desa blimbingsari. Saya sangat merindukan negeri selatan Indonesia, dan rasanya ingin segera terbang ke sana. Saya suka irama hidup di Indonesia yang rasanya santai sekali. Saya suka bali waktu!!

Pada kesempatan ini juga saya mengucapkan terima kasih sebesar-besarnya atas segala kebaikan kepada saya selama di Indonesia sehingga hidup di Indonesia saya sangat menyenangkan.

Kalau ada biaya dan kesempatan, saya mau akan berkunjung lagi ke Indonesia.

「たくさんの出会いに感謝」

社会学部 北村 穂波（ほなみ）



<はじめに>

私が国際ワークキャンプに参加しようと思ったのは、テレビで日本とは全く違う世界の貧困な国の現状を見たことがきっかけだ。それから何となく貧困な国で生活している人のために、何かできないのだろうかと考えようになった。また、その現状を実際にこの目で見てみたいと思った。そして高校3年生の時、桃山学院大学のパンフレットに載っていた国際ワークキャンプに目が止まった。パンフレットに書かれていたワークの内容見で「行ってみたい!」と思った。だからワークキャンプに参加することは、以前から私の夢だったのだ。そしてそれを終えた今、私が感じたことを伝えたい。

<言葉の壁>

インドネシアに着いて最初に感じたのは言葉の壁だった。当たり前だがインドネシア人に日本語は通じない。そのために春から週に一回インドネシア語を勉強してきたのだ。

空港からホテルに到着し、初めてインドネシア人学生と顔を合わせ一緒に食事をした。しかし、インドネシア語も英語も出てこない・・・! 辞書を使いながら何とか会話できたが、少しショックだった。インドネシア語は仕方ないとしても英語は中学から勉強しているのに・・・英語なら少しくらいは話せるだろうと思っていたが発音が違うだけで伝わらなかった。また相手の話していることを理解できないことも多く、自分の語学力のなさを実感した。ホームステイ先ではインドネシア語しか使えなかったため、とても苦勞した。ホス

トファミリーと辞書を交互に使いながら話した。アスラマでも子どもが何か伝えようとしているのにわかってあげられないということもあった。しかし日が経つにつれて少しだがインドネシア語を覚えてきて簡単な単語くらいは話せるようになり、やはり語学を身につけるには日頃からその言葉を話すことが一番の近道だと感じた。出発前は言葉が通じなくても何とかなるだろうと思っていたし、実際何とかなった。しかし英語やインドネシア語が身につけていたらもっといろいろな話ができたのにな・・・と少し後悔している。だからこれをきっかけにこれから語学に励んでいきたいと思った。

<アスラマの子どもたち>

アスラマで10日間過ごして感じたのは、やはり親の愛は必要だということだ。私たちがアスラマへ着いた時、子どもたちはとびきりの笑顔で迎えてくれ、すぐ私たちのそばへ近寄ってきた。一緒に遊んでいる時や寝る前もぎゅーっと抱きついて甘えてくる。ご飯を食べている時は「私の隣に来て!」とせがんだり、マンディの時は「私と一緒に入って!」と腕を引っ張ったりする。私は子どもたちと過ごす中で最初は子どもがとても可愛くて一緒に遊んでいることがすごく楽しかったが、だんだん子どもたちの中にある寂しさが見えてきた。しかし私はこの子たちとずっと一緒にいることはできないし、親と暮らさせてあげることができない。だから私は何もできないけれど子どもたちと過ごす残りの時間は、とりあえず愛をあげようと思った。

アスラマに来て8日目、私たちは子どもたちの出身村であるバニユボ村を訪れた。それにはこの村出身のアスラマの子ども2人も同行し、その2人の家を見学させてもらった。事前に先生から村についての説明は受けていたが、目の前には日本とは全く違う光景があった。私は何と言っているかわからず、ただその光景を見ていた。しかしその家の人々は笑顔で私たちにたくさんのブドウを出してくれた。久々に家族と再会したスパルタという男の子はとても嬉しそうに私たちが向けるカ

メラに笑顔でポーズをとったり、そっくりな顔をした弟と楽しそうにボールで遊んだりしていた。去年のワークキャンプでこの村を訪れた時に一緒だった男の子は、先生が「今日は自分の家に泊まる？」と聞くと「僕が泊まると家族のご飯が減るからアスラマへ帰る」と言ったそうだ。アスラマへ帰るバスの中、スパルタはお土産のブドウを食べながらずっと、離れていく故郷の景色を見ていた。そしてしばらくすると、隣に座っている先生にお菓子を半分に分けてあげていた。家族と離れて寂しいはずなのに涙も流さず、そんな時でも周りの人への気遣いができるその子から私は強さを感じた。アスラマへ着くとスパルタはいつもの笑顔に戻っていた。私が自分のカメラを触っていると「僕の写真見せて！」と言ってきたので、さっき彼の家の前で撮った写真を見せると「これが僕の家！これが弟だよ！」と嬉しそうに友達に話していた。

お別れの日。みんな悲しくて泣いている中で、ある男の子が突然私に「紙とペンを貸して」と言ってきた。私が紙とペンを渡すと先生のところへ走って行き、しばらくすると戻って来た。そこには日本語とインドネシア語で「ほくたちをわすれないで(jangan lupa kami)」と書かれていた。それを見た瞬間、私は涙があふれてきて「OK！」としか言えなかったが、「絶対、絶対忘れない！」と思った。そしてインドネシア語をもっと勉強して必ずまた戻って来ようと心に決めた。

<幸せとは>

幸せとは何なのか。私は今まで貧困な国に住む人々は可哀想だと心のどこかで思っていた。確かにインドネシアで暮らす人々は日本と比べると、裕福な暮らしとはいえないかもしれない。しかしこのワークキャンプに参加し、実際に現地の人々と生活してみて感じたのは、みんな毎日幸せそうに暮らしているということだ。ホームステイ先の家族も、バニユボ村で暮らす人々も、アスラマで生活している子どもたちも、みんないつも笑顔だった。私はアスラマで暮らすある男の子に「ここ(アスラマ)が好き？」と尋ねると笑顔で「Ya! (う

ん!)」と答えてくれた。

私は貧困な国の人々が可哀想だと思っていた以前の自分が恥ずかしくなった。幸せはものがたくさんあることじゃない。幸せはきっと人によってそれぞれ違う。もし家族全員の十分な食べ物がない生活だったとしても、家族と一緒に暮らしていることがその人にとって一番の幸せかもしれない。貧しい生活=不幸では決してないのだ。私は日本のようにものがあふれている生活よりも、余計なものがないシンプルな生活の方が、大切なものははっきりと見えるのではないかと感じた。そして大切なものははっきりしているからこそ、インドネシアは心が温かい人たちが多いのだろうと思う。自分にとって本当に大切なものは何か、ということをもインドネシアの人々との生活で改めて見つめ直すことができた。

<最後に>

最後に感謝の気持ちを伝えたい。まず、ワークキャンプに参加したいという私の思いを受け止め快く送り出してくれた家族。インドネシア出発までの研修や準備を手伝ってくださった先生方、キリスト教センターの方々、IWCOBの学生さん方。そして今回引率してくださった先生方。どんな時も一緒だったIWC25のみんな。たくさんの人々の協力のおかげで無事IWC25を終えることができた。本当にありがとうございました。

そしてインドネシアで出会ったたくさんの人たち。みんなとの出会いがあったからこそ、私はインドネシアでとても良い経験をする事ができたのだと思う。Terima-kasih. みんなとは「sampai jumpa! (また会いましょう!)」と言って別れた。約束通り、私はまた必ずみんなに会いに行く。

この18日間は本当にあつという間だった。その中で私は、出会い、経験、学びなど多くのものを得ることができた。今までは日本の文化が自分の中での常識だったが、ワークキャンプを通して異文化を体験したことで自分の視野を広げることができた。そしてワークキャンプに参加できたことは私の人生の中できっと貴重なものとなるだろう。だからもしこの報告書を読んで少しでも興味

を持った方がいたなら、ぜひ次回のIWC26に参加してほしいと思う。また私もすべての人に感謝の気持ちを忘れず、この経験を生かして次のステップへ進んでいきたい。

Dihargai memori

Honami Kitamura (Honami)

Sekitar satu bulan berlalu sejak aku kembali ke Jepang. Saya masih mengingat hal-hal selama 18 hari. Dan saya berpikir “Saya ingin kembali ke Indonesia ...”.

Saya mengunjungi Indonesia untuk pertama kalinya di kamp kerja. Aku sedang belajar tentang Indonesia di Jepang. Tapi ketika saya benar-benar hidup di Indonesia, kadang-kadang terkejut. Namun, saya mengalami budaya yang berbeda, saya bisa memperluas wawasan saya. Aku merasa bahwa setelah kamp kerja, masyarakat Indonesia adalah bahwa hati yang sangat hangat. Semua orang Indonesia, menyambut kami untuk pertama kami bertemu. Mahasiswa Indonesia, orang desa Blimbingsari, anak-anak Asurama ...

Aku tidak bisa melupakan senyum semua orang.

Saya tidak dapat berbicara bahasa Indonesia begitu banyak. Jadi saya tidak bisa mengatakan pikiran saya kadang-kadang. Tapi saya sangat senang bahwa saya telah menghabiskan dengan semua orang.

Saya memiliki pengalaman yang sangat baik di Indonesia. Hal ini berkat banyak orang.

Karena ada banyak pertemuan yang baik, saya ingin mengunjungi Indonesia lagi. Saya berterima kasih kepada semua orang yang telah bertemu.

Saya berterima kasih kepada semua orang yang telah bertemu.

Saya lupa kenangan berharga kehidupan ini. Dan saya ingin mengejar impian mereka. Terima kasih. Mari kita bertemu lagi.

新しい自分

経営学部 鈴木 央生 (鈴木)



私は海外へ行くこと、ボランティアやワークキャンプなどすべてのことが初めてだった。ワークキャンプ（以下IWC）でインドネシアに行くことについては、期待よりも不安のほうが大きかった。「知らない人の中でうまく仲良くなれるだろうか」、「自分がみんなの力になれるだろうか」、日々の集まりの中でそのような不安は高まる一方だった。IWCのメンバーとなかなか打ちとけられず、また自分を出せず焦っていた。そのような関係をより良くするきっかけとなったのは合宿である。合宿ではもちろんインドネシアでの話がメインだったがそれよりもみんなと一緒に同じところに泊まることで自分たちのことを知りあえることができた。この合宿でインドネシアへ行くことへの不安は消え去り、期待とやる気でいっぱいになった。この合宿には感謝してもしきれないだろう。

<バリ到着>

日本を出発して飛行機で6時間、ようやくバリに到着した。空港を出たところには、ツアーの勧誘をする人でいっぱいだった。正直圧倒された。そしてホテルに向かう道ではインドネシアの大統領を模した大きな像などが大変多く見られた。宿泊したホテルはきれいできれいしている印象だった。日本と違うところは、飲み水が水道水ではなく入れ物に入った水であるということだった。

水道水は主に手や体を洗うためだけに使い、飲み水は全く別として扱われていた。その後、インドネシア人学生と交流した。この交流では自分の語学力のなさ、ジェスチャーの下手さでうまくインドネシア人学生と会話ができず、準備不足を悔やんだ。

<アスラマにて>

アスラマに到着した自分たちはまず、ホームステイ先へと案内された。ホームステイ先には自分と他の日本からの学生、インドネシア人学生1人という3人だった。この割振りに安心している自分がいた。他の学生は、みんな日本からの学生とインドネシア人学生が1人ずつだった。自分だけみんなより楽？な状況にいた。その環境の中で私はホームステイ先で周りに頼りっぱなしだった。自分は英語ができないからやってもらおうという他人任せにしている生活が数日間続いていた。そんな生活の中だったので、英語もインドネシア語も上達するわけでもなくインドネシア人学生と仲良くなることもなかった。そんな日々が続き、そのことを先輩に指摘された。このまま何も得ることなく周りに頼ってIWCを過ごしていいのか？そんな気持ちが自分の中で強く芽生えていくのを感じた。そこからホームステイ先では、パパやイブの話を通訳してもらわず、聞き取るようにし、それに反応するよう努力した。普段の生活でも同じホームステイ先のインドネシア人学生とたわいのない話でいいので会話するようにしていった。ほぼジェスチャーだったが徐々に自分の思いが伝わるようになり、喜びとともに最初からもっと積極的になっていなかったことに後悔した。

しかし、時間は戻るわけでもなく、高校訪問が始まった。高校訪問では自分たちの計画した日本語の授業をこなしていった。インドネシアの高校生は大変ノリがよかった。高校授業では、日本からの学生が日本語で説明し、その後インドネシア人学生が翻訳して伝えるという方法で授業を進めていった。インドネシア人学生は自分たちの説明に補足して高校生が盛り上がるように授業を説明してくれた。言葉が分からない状態だったがそ

れほどに高校生が盛り上げてくれるインドネシア人学生の臨機応変さにとても感謝した。

<子どもたちとのふれあい>

アスラマには、小学生までの貧しい子どもたちがたくさん生活している。自分の家族から離れて来ている子どもや、紛争で両親をなくした子どもたちが多く保護されていた。アスラマで生活している理由は、インドネシアでは貧しく、とても生活していくことができない状態の家が多数あるからである。兄弟のうち兄だけがアスラマに来ている家族などもあった。家族をバラバラにしなければ生活のできないのは日本ではなかなか考えられないことである。そういった状況にあるにも関わらず子どもたちはアスラマでの生活に満足していると話していた。なぜなら、衣食住が保障されているからである。さらに、アスラマには自分たちと同じようなボランティアが、様々な国からたくさん来てくれているかららしい。これは、アスラマの方々の努力によるものだと感じた。子どもたちは言葉が通じなくても私たちに楽しそうに話しかけてくれた。すぐに私たちの名前を覚えてくれて、日本の遊び道具も気に入ってくれていた。膝の上に乗ってくる子や抱きついてくる子、様々な子どもがいたが、どの子もすべて愛らしかった。私とは全く違う環境で生活している子どもたちだったが、中身はなにも変わらず、むしろ自分たちよりも明るく元気だったように感じた。

<スポーツ大会>

インドネシア10日目、午前中のパラサリ訪問を終え、午後からスポーツ大会を行った。スポーツ大会に関して私はとても不安だった。なぜなら、私はスポーツ班のリーダーであったからであるのと、インドネシアに来てからのスポーツ大会についての話し合いがあまり円滑に進めることができなかったからである。スポーツ大会の話し合いでは自分がみんなを引っ張って全員に理解してもらうことが大前提なのだが、インドネシア人学生への説明があまりに足らなすぎたのである。スポーツ大会前日の最後のミーティングでは、他の話

し合いもしなければならぬのに、段取りよく話し合いをすることができなかった。英語での説明がうまくいかず、先輩に助けをもらってようやく話がまとまるような状態だった。スポーツ大会本番では、インドネシア人学生が自分の指示していない部分までフォローしてくれて、子どもたちも楽しそうにやってくれていたので一応成功だと感じた。しかし、この成功は日本からの学生や、インドネシア人学生の助けによるものなのでさらに自分の非力さを感じる行事となった。

このスポーツ大会を通して、私はみんなの気持ちをひとつにまとめることと、自分の言いたいことを一致させる難しさを一番感じた。

<心の成長>

IWCでの経験を通して、自分がなぜこのプロジェクトに参加したのか自分自身の深層心理を読みとれた。IWCを通して消極的で変わろうとしない自分とおさらばしたかったのである。インドネシアで何かしたいというような気持ちではなく、全く違う環境や言葉の通じない生活を自ら体験することで、自分にできること、できないことを少しでも理解したいと感じたのだろう。さらに、今回は言葉の勉強が足りず、あまり通じあえなかったが、もし言葉が通じ意見を交わしあえるような状態で参加すれば、また新しい体験ができるはずである。この体験を次回につなげること、それが新しい目標である。インドネシアでの経験ひとつで今いる自分とは全く違う考え方になっていただろうと思う。よく分からないことも多いが、これからもっとたくさんの経験をするだけでもっと成長し、プラスになる部分があると思う。今ではインドネシアだけでなく、日本に帰国して今の毎日でも自分は少しずつだが成長しているのではないか、成長しようと思うことが成長そのものではないか、そのような考え方ができるようになった。そう、今こうしている間にも一步一步前に進んでいる自分があるのだ。

改めて、自分を成長させてくれたインドネシアの方々にお礼がしたい。

TERIMA KASIH!!!!

Saya suka Bali★

Hiroki Suzuki (Suka)

Terima kasih selama 21 hari.

Indonesia mampu menghabiskan hari penuh.

Saya pertama kali pergi ke luar negeri.

Aku benar-benar senang bahwa saya bisa pergi ke Indonesia.

Kami telah menerapkan berbagai program di Indonesia.

Program ini berjalan lancar karena para mahasiswa berada di Indonesia.

Mahasiswa Indonesia untuk bertindak fleksibel selalu membantu kita.

Kemampuan untuk mengambil tindakan yang baru saja terkejut tentang.

Mahasiswa Indonesia berbicara dengan saya selalu agresif.

Katakana dalam bahasa Inggris sederhana untuk melihat bahwa saya di Inggris.

Kami dengan berbagai gerakan.

Homestay orang menghubungi saya dengan lembut kepada kita.

Aku keluar untuk sarapan setiap hari.

Setiap pagi ketika anda pergi untuk menunda Asurama saya.

Risnsiki ekspresi member saya waktu untuk mengambil gambar sampai larut mala.

Orang-orang Indonesia yang kami memiliki pengalaman yang berbeda.

Kami tidak bisa berterima kasih juga.

Untungnya saya bertemu dan bahwa rakyat Indonesia IWC25.

Jika saya ingin mengucapkan terima kasih lagi jika ada akan ke Indonesia.

TERIMA KASIH BANYAK!!!!!!

インドネシアにて

国際教養学部 岡崎 涼（りょう）



2011年 夏

日本の温室でのびのびと育った18歳の少年が、自分の知る狭い世界から飛び出し煌めける新しい世界と出会った。これはその記録である。

私は、IWC25の日本の学生の中で自分が1番インドネシア人学生と打ち解けられたと思っている。また、はじめての海外であるにも関わらず、はじめての国際的交流への不安は殆どなく（実際心配だったのは飛行機が墜落、テロにハイジャックされないかくらい）未知の土地、違う文化に触れることができるという期待がとても大きかった。

まずインドネシア行き飛行機の機内食の美味しさに驚いた。海外滞在で一番悩むのは食物の不味さだという話を聞くが私は辛い物が大好きなのでむしろ好都合だった。インドネシアの料理は基本辛口なのだ。インドネシアへの期待が更に高まった瞬間だった。私はインドネシア語の授業を受けており簡単な挨拶や自己紹介ぐらいはできると自分に自信を持っていた。しかし初めてインドネシア人学生と顔を合わせた晩御飯の時、緊張してうまく話すことができなかった。自分の言葉が伝わらず、何度も聞き返された時は正直とてもつらかった。外国の人と話すのは初めてで、向こうからすれば普通に聞き返しているのだが、私からすれば怒りながら聞き返しているようにしか見えなくて、「怒らせてしまった…これから仲良くやっていけるのだろうか」といきなり大きな心配事が生まれてしまった。

最初のワークはソカでの植林だった。ソカにつ

いた時、広く雄大な自然に感動した。本やテレビでしか見たことのなかったような景色にとっても驚いた。滝を見に行く道がとても危なかったのも覚えている。私たちはインドネシア人学生達と協力してセゴンという木の苗を植えた。みんなよく働いて予定より早く終わったのには感心したし、最初のワークが効率良く進んで嬉しかった。その日の晩に同じ部屋に泊まったメンバーが、トイレにタランチュラが出たと大騒ぎして、既に就寝中の隊長を起こしに行ったのは良い思い出である。実際は、10cmくらいの小さなクモだった。（といっても日本の家庭で見かけるようなクモではなく、かなり毒々しい形相をしていた。）

アスラマに到着して最初に抱いた印象は、思っていたより綺麗ということであった。マンディ場を見たときも私たちが想像していたより遥かに綺麗で、これなら清掃班が作成した紙芝居を使用しなくてもいいなと思ったし、隊長や副隊長も同じ意見だった。

しかし、それは間違いだった。実際マンディ場が綺麗だったのは紛れもない事実だが、アスラマの子どもたちの多くは正しいマンディをしていなかったのだ。インドネシア人学生達と相談をして急遽紙芝居を使用することにした。インドネシア人学生の1人が人前で話すのがとても得意だったので、紙芝居の主な進行は彼に任せて、小道具の使用やページ送りを清掃班がするという形になった。その結果、子どもたちは楽しみながら話を真剣に聞いてくれた。ただマンディ指導は定期的にしたほうが良いと私は思う。早朝のマンディはとても寒くて苦痛かもしれないが、自分の体を清潔に保ち、できるだけ健康でいられるためにも子どもたちにはマンディをしてほしい。

インドネシアワークキャンプで印象に残ったのは、予定の変更と時間への認識である。例えばトラックで目的地まで移動するはずだったが一向にトラックが来る気配はなく、急遽小さなバスで移動することになったりした。その際の待ち時間は約1時間であった。日本なら怒られるでは済まない事態である。日本人が勤勉すぎると言われたら確かにそうかもしれないが、流石に1時間待つと、

みんな待つことで疲れ切ってしまった。(いつまで待てばいいのかわからないという状況は精神的に疲れた) 後で、現地の人に聞いたところによると、いくらインドネシアでも1時間遅れるのは酷い事態だそうだ。もし集合時間に遅れるとしても30分くらいが限度らしい。5分前集合が基本の私たちからすると、30分遅れて許されるのも十分凄い事だと思った。他には、プリンビンサリ村のイブ達 VS IWC25女子メンバーのサッカー対決という面白い企画があり、とても楽しみにしていたのだが時間になってもイブ達は現れず結局サッカー大会は中止となった。これは非常に残念だった。だが、インドネシアで忍耐力と何事も気楽に受け流す心意気は鍛えられたはずである。

アスラマでのワークは、三宅先生から今までのワークキャンプのなかでも大変なほうと聞いており、あまり体力に自信のない私は心配していたのだが、みんなで活動すれば疲れや辛さよりも楽しさを感じるが多かった。他愛の無い話をしながら重たい石を運んだり、時には歌を歌いながら瓦礫の排除をしたりした。日本でそういった建設的な労働作業をした経験は皆無である私でもみんなの役にたてたと思えるワークであった。

今回のワークキャンプの反省点をいくつか挙げたい。まず個人的な事であるがIWCの出発前日まで殆ど荷物(ここでいう荷物とは我々IWC25としての活動で使用するものではなく、着替えや生活用品ホームステイ先へのお土産など個人的に使用する物の事である)の準備をしていなかったことである。荷物の準備は余裕をもってしっかりするべきだった。今回のように行き先が初めて行く場所の場合は、その土地の気温や気候についてよく調べておくべきだとわかった。私は、インドネシアはとても暑い国だという特に根拠のない漠然なイメージだけで持って行く服を選んだ。長袖ではあるが生地はとても薄く風通しのよい物や日本の夏に着るようなTシャツだけを持って行った。上着や体温調節のための羽織物は一切持っていかなかったのだ。これは大きな間違いだった。なぜならインドネシアの朝と夜はとてつもなく寒かったからだ。体感的に日本の冬かそれ以上に寒

く感じた。幸いインドネシア人学生が上着を貸してくれたり、ホームステイ先のお店で上着を買えたからなんとかあったが、この反省を活かして、これから知らない土地へ行くときはその土地の事を納得が行くまで調べてから行くことにする。

先述したとおり私は辛い物には目がない。ある日の昼食にでたサンバルという香辛料は、刺激的な辛味の中にも広がる酸味で口の中を常にヒリヒリ痺れさせる。私にとって希代の発明と同等の価値がある素晴らしいものであった。勿論何度もおかわりを繰り返した。次の日の朝、腹痛と共に目が覚めた。サンバルの食べ過ぎにより胃を悪くし腹を壊してしまったのだ。当然その日のワークへは参加できず、みんなに迷惑をかけてしまった。自分の体調管理は自分で調整するように心掛けるべきだ。

交流会についての反省点も挙げたい。まず私とインドネシア人学生二人で司会をしたのだが、事前に十分に話し合えていなかったことから、プログラムの順番変更及びプログラムの取り消しがスムーズにいかなかった。私がギターを担当する出し物がいくつかあったのだがギターのチューニングが直前で変わってしまうというハプニングが起こった。別に日本で何度かライブをされていてそういった事態にはなれているはずだったがギターのパーツ事態に異変がありそれに対して迅速かつ正しい対処をとることができなかった。結局その出し物は中止にした。これは交流班班長としても1人のギタリストとしても悔しかったし情けなかった。何かハプニングがあった時に焦らないのはとても難しいことだが、そういう時こそ落ち着けるように普段から焦ったり取り乱したりしないように気を付けることにする。

もうひとつ、私はホームステイ先の家族やインドネシア人学生とよく打ち解けたと思うが、その反面アスラマの子どもたちと接した時間が他のメンバーに比べて少ないように思える。アスラマの子どもたちのためのワークキャンプなのに子どもたちの事を一番に考えることができなかったのは反省すべき点である。以上、今回のワークキャンプの反省点である。

インドネシア人学生についての話もしたい。外国人の友達ができたとするのは私にとって初めてのことでありとてもうれしいことだ。違う国で生まれ、違う文化で育ち、違う言葉を話す彼らと意思疎通ができたというのは驚くべきことであり喜ぶべきことだ！彼らは音楽が大好きである。そして歌がとても上手である。インドネシア人学生の1人に私の好きな歌を教えて、一緒に演奏したりした。言葉が通じただけで感激したのだが、私の好きな歌を歌ってくれたのはとても感動した。彼が一所懸命に歌詞を覚えている姿を見て、日本でのバンド練習風景を思いだしたりした。2年後彼は日本に来ると言っていた。その時に、また一緒に曲を演奏する約束をした。お互い今より更なる成長を遂げていることを祈る。

そして日本に帰ってきてからの生活は変わったと思う。以前まで一日三食食べるということは殆どなかったのだが、(昼ご飯をお菓子で済ませるという恥ずべき生活をしていた)今では一日三食食べている。さらに、友人が待ち合わせに遅れた場合も以前ほど露骨に不貞腐れたような態度をとることは少なくなった。性格もおおらかになった気がする。物事をお気楽に考えられるようになったのだ。楽観的に生きるのは身体的精神的負担が少なく、体が軽く感じる。インドネシアにはボランティアとして行ったのだが、沢山の人に支えられ助けられ、沢山のものを得たと感じている。

最後にインドネシアワークキャンプに協働してくださったチャブレン、三宅先生、福田先生、南出先生、松山さん、美和さん、スイクラマさん、フォルマン、日本の学生、インドネシア人学生ありがとうございました。

Kepada kampung halaman ke-2 Indonesia

Okazaki Ryo (Ryo)

Saya bias tumbuh berkembang di Indonesia. saya banyak bertemu dengan orang. Saya

mengalami hal yang tidak bisa saya rasakan di Jepang. Saya ingin menyampaikan rasa terima kasih saya.

Terima kasih kepada anak-anak asrama yang ingat nama saya. saya ingin bermain banyak dengan kalian. saya tidak sabar menunggu nanti kalian jadi seperti apa.

Kepada mahasiswa-mahasiswa Indonesia terima kasih telah akrab dengan saya. Memori yang tidak bisa saya lupakan seumur hidup. Saya senang dianggap sebagai orang Indonesia. Terima kasih telah mengajari saya bahasa Indonesia. Saya pakai bahasa Indonesia itu, tetapi tidak ada yang tertawa. Saya ingin mengajari bahasa Jepang yang menarik. Saya tidak lupa kalian Tlong ingat dan jangan lupa saya.

Kepada mahasiswa-mahasiswa Jepang, terima kasih banyak karena telah merepotkan kalian.

Terima kasih telah menganggap saya sebagai anggota. Waktu bersama dengan kalian saya merasa tenang. Mulai sekarang saya ingin terop bersahabat dengan kalian. Berkat Anda saya bisa tinggal dengan senang di Indonesia .

Kepada semua orang yang bertemu di Indonesia terima kasih banyak. Dengan bertemu kalian hidup saya berubah. Saya anggap Indonesia sebagai kampung halaman ke-2. Negara yang mengagumkan.

たくさんの出会いの中で得たもの

社会学部 小杉 磨未奈（まみな）



<参加動機>

私は、小学校の時にダウン症の子と出会いました。それから自然と福祉や障害のことに興味を持ち始め、将来は困っている人の役に立つ仕事に携わりたいと思うようになり、桃山学院大学の社会福祉学科に進むことに決めたのです。大学生活で私は、子どもから高齢者、または障害者の方々とさまざまな世代の人たちと関わりを多く持ちたいと思っています。また日本だけでなく海外でボランティアをして海外の人々とも関わりを持ちたいと思っていました。そんな時に、国際ワークキャンプ以下IWCに行ってきた先輩の話聞く機会がありました。最初はただ茫然と聞いているだけでしたが、話を聞いている内に「私もインドネシアに行ってボランティアをしたい」と強く思うようになり、この時に、「絶対にインドネシアに行く」と心に決めました。

このIWCに応募する期間は入学してすぐのことだったため、大学生活にまだあまり慣れない私は、参加するのに少し不安がありました。でも私がインドネシアに行きたいという強い気持ちは決して変わることはありませんでした。インドネシアに行くると聞いたとき本当に嬉しかったです。ここから私の新しい大学生活が始まりました。

<バリに行くまで・・・>

インドネシアに行くこと決まってから、毎週月曜と木曜の放課後にインドネシアの文化や言葉を勉強するようになりました。夏休みになるとほぼ毎日のようにみんなで集まり、日本語の教材を作ったり、交流会の歌やダンスの練習をしたりして、

時には真剣にみんなで話し合ったりもしました。こんなに必死になって物事を考えたり意見を出しあったり、協力して作業をしたりした時間は、今思えばなかなかできないことだったと思います。本当だったら何もなくて毎日同じことの繰り返しで過ぎていったであろう私の夏休みも、今回IWCに参加することによって、毎日充実した日々となりました。

私たちはインドネシアに行くまでにたくさんの人に助けられました。事前学習をして下さった先生方、私たちをいつも見守ってくれたキリスト教センターの人々、またIWCのOBの方々、募金をしてくれた人々、家族の人、いろんな人が私たちを支えてくれていたおかげで無事にインドネシアに出発することができました。本当にありがとうございました。

ついにインドネシア出発の日・・・。

<バリ>

私は今まで海外に行ったことが一度も無かったため、人生初の海外がインドネシアとなりました。行く前は、初海外ということですごくワクワクする気持ちもありましたが、言葉の問題など、不安な気持ちもありました。空港に着き、ホテルに行ってからインドネシア人学生と出会うまであまりインドネシアに来たという実感がわきませんでした。でもインドネシア人学生がインドネシア語を日常的に話しているのを聞いて、本当に自分は今インドネシアに居るのだと改めて感じました。インドネシア人学生とは、始めはあまり会話が続きかず、インドネシアの本と向き合って片言の言葉で話すのが精一杯でした。この時に、もっとインドネシア語を勉強すべきだったと少し後悔しました。でもミーティングなどを重ねていく度に会話も増えていき少しずつ仲良くなることができました。18日間を一緒に過ごしてからは、最初会った時には考えられないぐらい強い絆がいつの間にかできていました。言葉の壁はあるけれど、伝えたいことを必死で伝えようとする気持ちが本当に大切なことだとインドネシアに行ったことによ

て思うことができました。

<ホームステイ>

最初の何日間は、上手くコミュニケーションがとれず、ただ家に帰って寝て朝を迎える状態が続きました。「これではだめだ」と思い朝少し早めに起きて少しでも自分たちから積極的に会話をしよう決めました。それから、私は自分から会話をしようとなっていていき、少しずつだけどホストファミリーとの距離も縮まり、また子どもたちとも仲良くなることができました。小さいことかもしれないけど、会話が増えていくごとに本当に私は嬉しさをすごく感じていました。ある日、ホストファミリーと会話をしていたとき「インドネシアに来たらいつでも帰っておいで。待っているから。」と言われました。この言葉を言われたとき、本当の家族のようになった気がして涙が出そうなくらい嬉しかったです。今まで頑張って積極的に会話をしてきたことが良かったとこの時本当に思いました。最初の何日間は、言葉の壁に悩むことがあったけど、最後には良い関係になれて本当に良かったと思っています。またいつかホームステイ先に行くことがあれば、次はインドネシア語を上手にしゃべれるようになってもっともっとホームステイの家族と会話をしたいです。長いようであっという間に過ぎた10日間でしたが、本当に私自身良い経験になりました。

<アスラマの子どもたち>

私が初めてアスラマの子どもたちと遊んだ時、ずっと私のそばを離れない女の子がいました。その時私は、「本当に子どもは可愛い」としか考えていませんでした。でも後からその女の子にはお母さんがいないということをインドネシア人学生から聞きました。最初はただ「子どもと仲良くなって楽しく過ごそう！」そんな甘い考えで接していました。でもアスラマの子どもたちの事情を聞いて、もっと子どもたちと多く関わって、親の愛をもらってない分、私は子どもたちに多くの愛を与えて、少しでも胸の痛みや、心の傷を癒すことができたらと思いました。アスラマの施設は親が

いない子や、貧困で親と暮らせない子など色々な問題を抱えた子どもたちが生活している環境です。でも問題を抱えているなんて全く感じさせないぐらい、子どもたちはいつも笑顔で明るくてすごく活発で、私のほうがいつも子どもたちから笑顔と元気と愛をもらっていました。子どもたちの笑顔を見るだけで私は本当に幸せな気持ちになりました。

ある日、アスラマの子どもの出身村であるバニュポ村(=貧困の村とも言われている所)に行く機会があり、その村の出身であるアスラマの男の子3人と一緒に行くことになりました。ある1人の男の子が、家に着いてお父さんと弟に会った瞬間、今まで私が見たことがない満面の笑顔と、お兄ちゃんの顔になっていました。その家族の絆を見た時、本当に色々な思いがこみ上げてきました。今まで私はアスラマにいる子どもたちはいつも元気で明るくて幸せに暮らしているように見えていたけど、このとき本当はそれが違うと考えさせられました。本当は家族と過ごしたい、でも過ごせない。そんなことが多々ある環境を目の当たりにして、私はすごく胸が苦しくなりました。またその時、今まで考えもしなかった日本での生活を私は考えました。ご飯を食べたい時に食べたり、トイレもお風呂もある環境。家族と一緒に暮らしたり、学校に通えたり一つひとつの生活が私の中では当たり前となっていました。でもそれは本当に幸せな事であり、感謝すべきことであると、この村に行くことによって気づくことができました。日本は本当に恵まれている環境です。でもこの村のように、ご飯を思うように食べることができなかつたり、子どもと暮らしたくても暮らせない環境の家もあります。このことを決して忘れてはいけないと思いました。また、こういう生活をしている人が世界にはたくさん居ることをもっと多くの人に知ってもらい、ご飯を食べることや家があることなど、日本では当たり前のことかもしれないけど、そうゆう一つひとつのことに多くの人が感謝を持って生活して欲しいと感じました。この村は確かに貧困の村かもしれないけれど、本当に人の温かさ溢れている村でもあると感じました。

プリンピンサリ村でもそうでした。見知らぬ人ばかりなのに会うたびにあいさつを笑顔でしてくれる。本当に優しさ溢れる国だと思いました。

出会いがあれば、必ず別れもある。日が経つごとに子どもたちとの仲も深くなっていき、帰る日が近づくごとに帰りたくないという気持ちが強くなってきました。でも時間は過ぎていき、ついに別れの日がやってきました。別れる前にある男子に「決して私のことを忘れないで！」と片言の日本語で言われたのを今でもすごく思い出します。その時自然と涙があふれ出てきました。私はこの別れ際に子どもたちの悲しそうな顔を見るのが本当に辛かったです。出会ったら別れる。そんなことを毎回のよう子どもたちは繰り返しているんだと思うとまた心が痛くなりました。私はバスに乗り子どもたちの手を振る姿が小さくなるごとに涙が止まらなくなりました。子どもたちに自分は何ができたのかは分かりません。でも1人でも多くの子どもたちがアスラマに私たちが来たことを覚えていてくれてたら、それだけで嬉しいと思っています。本当に子どもたちからたくさんのお話を学びました。人として本当に大切なこと、人を思いやる気持ち、素直な気持ち、温かい心、優しさ、そして愛、多くのことを教えてもらいました。子どもたちに出会えたことに感謝しています。ありがとうございます。そしてこれからもあの明るい笑顔で元気に過ごして欲しいと心から願っています。

<出会いに感謝>

私はこのワークキャンプを終え、日本に帰ってきてからインドネシアで過ごした日々を思い出してばかりいます。暇があればアスラマの子どもたちの写真を見たりして思い出に浸ってばかりです。それだけ私にとってインドネシアで過ごしたこの18日間は人生の中で本当にかげがえのない日々となりました。日本ではあまり感じる事がなかった人の温かさに触れることができたり、日本では当たり前のようにごはんを食べたり、お風呂に入ったり、家族が居たりそういう一つひとつ

の生活が本当に有難いことでありまた、一つひとつのことに感謝すべきだと気づくことができました。こんな気持ちになれたのは、多くの人に出会ったからです。本当に出会えた人達に感謝しています。特に、6人のインドネシア人学生にはたくさん助けてもらってばかりでした。本当にありがとうございます。また、引率の先生方には大変お世話になりました。温かく私たちを見守ってくれて本当にありがとうございます。またインドネシアで出会ったアスラマの子どもたち、イブ、ホームステイの家族、スィクラマさん、ワヤンさん、美和さん、フォルマン。この出会いは私にとって宝物です。そして春から長い時間一緒に過ごしてきたIWC25の仲間！IWC25のメンバーがいつのまにか私の中では家族のような存在となっていました。このメンバーだったから色々なことも協力してできたと思うし、色々なことを乗り越えることができたと思います。IWC25のメンバーに出会えたことに、本当に本当に感謝しています。嬉しい時も、悲しい時も、楽しい時も、ずっと一緒に過ごしてきた日々は決して忘れません。みんな大好きです!! ありがとうございます。

この報告書には収まらないぐらいたくさんさんの経験をしました。この経験は私にとって学ぶことが多く、また今まで感じてなかったことを感じたり、考え方が変わったり、自分自身成長することができるすごく貴重な体験でした。

これから先の人生の中で色々な壁にぶち当たる時が来るかもしれません。でもこのIWCで学んだことをバネにどんな困難な壁でも乗り越えていきたいと思います。

この沢山のひととの出会いを胸に刻み、これからの大学生活を送って行きたいです。

Terima kasih !!!!

Mamina Kosugi (Mamina)

Terima kasih untuk 18 hari yang telah terlewati. Saya bertemu dengan banyak orang saat

berpartisipasi dalam camp kerja ini. Mahasiswa Indonesia, Mr Shikurama, Warren, Miwasan, holman, homestayfamily, anak-anak Asurama, ibu, mahasiswa jampang, ada begitu banyak.

Telah bertemu semua orang yang saya sangat menghargai itu.

Mahasiswa Indonesia mendapat bantuan dari adegan itu terutama penuh.

Terima kasih.

Kata-kata pertama yang saya merasa semua komunikasi yang sulit dan tidak.

Tapi perasaan dapat membawa anda dalam pikiran jika Anda mampu belajar dan mampu menyampaikan.

Di Jepang, Indonesia telah mampu menyentuh merasakan kehangatan dari orang-orang tanpa banyak.

Saya telah bertumbuh dan berkembang saat saya bertemu dengan banyak orang selama 18 hari di Indonesia, yang setiap hari bersama dengan saya.

Aku ingat bahkan sekarang di Indonesia setiap hari dan kembali.

Selma 18 hari saya tidak untuk dilupakan selamanya.

Saya menyelesaikan camp kerja ini dengan dukungan dari banyak orang.

Terima kasih banyak.

Indonesia yg terbaik dan saya cinta Indonesia!!!!

インドネシアの思い出

国際教養学部 鈴野 祐介 (ゆうすけ)



私が今回国際ワークキャンプに参加しようと思ったきっかけは、海外でワークキャンプに参加して、少しでも世界を知りたいと思ったからです。今回の報告書には私がバリで体験した現状や人々、自然などについてまとめました。レポートとしてはふさわしくない文体になってしまっている箇所もありますが、ご了承下さい。

<ワークキャンプ初日>

日本を出発してから6時間30分の飛行で熱帯の島、バリ島に到着した。入国審査を済ませて Denpasar 空港を出ると、現地の責任者であるスイクラマさんが迎えてくださいました。そこからバスに乗り、ディアナプラホテルへ移動してインドネシア人学生と合流した。彼らはこのIWCで全てのプログラムを共同して行う同士である。合流からすぐにミーティングが始まり期待と緊張の中で第一日は終わっていった。

<バンガロー>

IWC二日目、ソカビーチにあるバンガローに移動した。そしてソカ村へ行き植林をする場所の見学をした。ソカの森の中を歩くと、そこらじゅうに犬が放し飼いにされていて恐ろしく感じました。日本ではあり得ないことです。バンガローに帰ると、大量のヤモリが天井にはりついているのを発見し驚きました。特に、大きな声で「トッケー」と鳴くトッケイというヤモリが出たときは仰天しました。またバンガローの入り口にカブトムシや大きなクモがいて、焦ったことも度々ありました。そういった驚きの数々も、インドネシアの

大自然を体験した喜ばしいできごとであったと感謝しています。

<植林>

見学の次の日から植林が始まり、ソカの山の斜面にアルベチア（南洋桐）の苗を植えていきました。作業は朝から始まったのですが、しばらくすると気温が40度を超える炎天下にみまわれました。熱中症対策として大量のスポーツドリンクの粉末や塩飴を持って行ったつもりだったのですが、いくらあっても足りない程の暑さでした。一緒に作業をしていたインドネシア人学生のデリーやフィッキー、ジョシュア、イタ、エミー、ジェシカからもインドネシア語で‘hari ini panas’「今日は暑い」と何度も言っていました。

インドネシアの林や森は輸出のために伐採され続けて森林は破壊されていったのである。そこで、数年前にインドネシア政府が5年以上の木の伐採を禁じ、森林の回復を試みているようなのだが、このような過酷な環境の中で植林をしてみると、伐採され続けて荒れ果ててしまった林森を回復させるのは大変な重労働だと実感することができた。私たちの植林の目的は、森林の回復のためではなく、アスラムの運営を支えるためなのだが、このワークを通して、紙や木材などの限りある資源を大切にしなければならないことが改めてわかった。朝から始まった作業のあと、近くのバナナ畑で昼食をとることになり、そこに現地の方々が弁当を運んで下さいました。重労働で非常に疲れた体に弁当はとてもおいしく現地の方々の暖かさに感謝しました。

<夕食>

パンガローでは夕食の時には必ずミーゴレン（インドネシア風の焼きそば）やナシゴレン（焼き飯）が出てきました。味は日本の焼き飯や焼きそばとは違い、スパイスが沢山使われてました。インドネシアの食文化と日本の食文化の違いがわかりました。食事の後もミーティングが行われ今日一日の反省をし、これからの日程の段取りについて説明を受けました。

<体調不良>

私はワークキャンプ三日目で体調に異変が起きました。私は日本にいるところから軽い喘息を患っており、現地での環境の変化によって喘息が悪化してきたのです。三日目の昼食の時に喘息がひどくなりました。インドネシア人学生も心配して、現地の言葉で「大丈夫か」と言ってくれました。その後、現地で看護婦として私たちをサポートしてくれた石井美和さんとスタッフたちが、車で一時間程の場所にあるヌガラ病院に連れて行ってくれました。そこで石井さんが病院の医師に私の体調を説明してくれてすぐに治療が出来ました。その後は喘息も治療のおかげで和らぎ、次の目的地のプリンビンサリ村に向かうことができました。私はこの日に予定されていたホームステイに参加できると思っていたのですが、石井さんから「病み上がりの状況での参加は危ない」と言われしばらくは施設のゲストハウスに泊まることになりました。

また当分は作業に参加しないよう助言され、正直つらい気持ちになりました。私は少しでもみんなの役に立ちたいと思い、みんなが作業から帰ってくる時には水を用意して待っていたりもしました。今回の体調不良では、海外では体調を維持するのがいかに重要わかりました。

<アスラム>

私たちが今回行ったのはプリンビンサリ村にあるアスラムと言われる場所です。ここは虐待や貧困などの理由で親と一緒に生活できなくなった子どもたちが生活する施設です。

この施設に入って私が受けた印象は、子どもたちが「たくましい」ということでした。身体的なことはもちろんのこと精神的にも自立心があって、みんなパワーがあって、笑顔が素晴らしく、元気いっぱいみんなと共同で生活していました。日本ではまだ自立心のない小学生位の子どもたちも自立心を持って行動し年下の子どもたちの世話をしていたのを見て日本とインドネシアの教育の違いを目の当たりにし印象に残りました。

でも少し大人びている子どもも多く、そんな子ども

たちの事をもっと知りたいと思いました。

<人生初のホームステイ>

プリンピンサリに入ってから三日目に喘息も和らぎ、石井さんからホームステイに行く許しをもらいました。人生初のホームステイという不安と期待を抱えて、アスラマから少し離れたホストファミリーの家に行きました。私のホストファミリーとはプリンピンサリ村の入村式の日すでに会っていて知ってはいたのですが、どのように挨拶をすればいいか戸惑いました。いざホストファミリーの家に着くとイブたちの家族が笑顔で迎えてくれました。この時、イブが「喘息は大丈夫？」と聞いてくれたことがわかり、私も「もう大丈夫」とインドネシア語で答えることができました。十分ではありませんでしたが、インドネシア語を勉強して行って良かったと思いました。

私はこの家で今までとは違う体験をしました。特に印象に残ったのがトイレです。用を足した後は水をすくって流すというもので、最初はかなり抵抗があったのですが、ホームステイを続けていくうちに慣れていきました。これらの生活様式の違いもホテルにいるだけでは分からない貴重な体験だったと思います。

またイブが毎朝作ってくれたピサンゴレン（バナナ揚げ）と紅茶は、本当にイブの優しさが味に出ていて大好きでした。そして、ホームステイの最終日にイブの作ってくれた手料理は特に美味しく感じ、インドネシアをもっと好きになるきっかけにもなりました。それから、私がプレゼントした日本のお土産のこけしを、とても喜んでくれてうれしかったです。私は今回お世話になったホストファミリーが大好きで、いつも彼らの幸せを願っています。

<日本語授業>

日本語の授業は直前に綿密な打ち合わせで変更になった内容をしっかりメモしましたが、不安でいっぱいでした。アスラマからバスでムラヤの高校に行き、いざ教室に入ると、生徒のみんなは元氣いっぱい、キラキラした目で私たちの授業を

真剣に聞いてくれました。

日本語の「ビンゴゲーム」や「告白ゲーム」の時は、教室がひっくり返ると思うくらい盛り上がってとてもうれしかったです。生徒たちは日本語で挨拶したりして日本語が大好きらしく大変驚きました。インドネシアでは日本語ができると、お金を稼ぐことに直結すると事前研修でも聞いていましたが、ここまで授業にも浸透しているとは思いませんでした。

<ワーク>

私たちのワークはアスラマの敷地内に建てる新しい宿舍の土台の基礎工事でした。

私は途中から参加をすることが出来、さっそくバケツリレーで土を土台の部分に運ぶ作業をしました。この作業ではインドネシア人学生が、いつも以上の張り切りを見せ、私たちを指揮したりもしてくれました。さらに作業の時にアスラマの子どもたちがバケツリレーに参加してくれて凄いスピードで土を運ぶことが出来大変助かりました。日本の子どもなら多分黙って見ているだけだと思いますがアスラマの子どもたちは自ら手伝いに来てくれて、日本とインドネシアの自主性の違いを感じました。

今回の作業で土台を作ることが出来、この後の作業をするボランティアの方々に受け継ぐことが出来ました。私は今この建物がどうなったのか気になります。

<バニユボ村>

私たちはこのアスラマに来ている子どもたちがどのような村から来ているのか見に行きました。その村はバニユボ村というバリ島の北部にある乾燥した場所です。

この村に着いて印象に残ったことは、本当に乾燥して埃っぽいことです。この村は水がないために乾燥に強イブドウを栽培しています。あたり一面がブドウの農園でした。また今でも強烈に覚えていることは、ブドウの栽培のために使われた農薬が生活排水に大量に入っているということです。現地の人はこの水を何のためらいもなく水浴

びに使ったり、料理に使っているのを目の当たりにして衝撃を受け、バリ島の貧富の差や生活環境の違いを考えさせられる事になりました。この村の現状は日本では考えられないことです。

<感謝>

私がこのワークキャンプで感じたことは、感謝の気持ちがどれほど大切かということです。表面的には分からなくても、より周りを見ると、私のために動いてくださった人がたくさんいたことに気がきました。特に私が感謝しているのは、喘息の時に病院に連れて行ってきてくれて医師に病状を説明してくれた石井美和さんとスタッフの方々です。私は石井さんやスタッフたちがいなかったら、喘息を完治させることはできなかったかもしれません。今回の喘息の時は、早急に病院に連絡を取ってくれて本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

またホストファミリーのみなさんにも大変感謝しています。私が喘息が収まり始めてホームステイに入った時も「喘息は大丈夫か」と言ってくれたことや、冷たい水でマンディ（水浴び）が出来ない時もわざわざお湯を沸かしてお湯のシャワーが出るようにしてくれたことは本当にうれしかったです。

また、私が喘息で病院に行ったときに心配していた先輩や、インドネシア人学生の方々にも大変感謝しています。私は日本に帰ってからも感謝の気持ちを大切にしていこうと思いました。

Terimakasih!!

Yusuke Suzuno (Yusuke)

Selamat sore!! Nama saya Suzuno Yusuke. Apa kabar? Aku baik-baik!!

Saya dapat pengalaman yang baik di Indonesia. Keluarga tuan rumah homestay berbicara dengan kenangan terbaik adalah sangat. Pertama saya tidak bisa berpartisipasi dalam homestay untuk

asma. Ketika berpartisipasi dalam homestay disembuhkan dari asma adalah benar-benar bahagia. Keluarga angkat bertemu di sana adalah kekhawatiran atas benar-benar menyesal saya pikir Anda tahu saya sangat lembut dan prihatin tentang asma-Nya. Kembali dari "Asma" Asurama sehari-hari adalah benar-benar senang mendengar saya baik-baik saja.

Hal ini juga yang paling berkesan adalah bahwa teh dan memberi kami yang baik Pisangoren Hawa pagi sebelum pergi ke Asurama. Saya sekarang melihat ke depan untuk awal Pisangoren ini saya mengalami kesulitan di pagi hari. Terima kasih banyak untuk keluarga angkat Anda homestay.

Saya juga memiliki kesempatan untuk pergi ke Bali.

Tangan dan Tangan ～手と手～

社会学部 畑中 沙織 (さおり)



<参加動機>

私は、この国際ワークキャンプ・インドネシア（以下IWC）の存在を入学当初から知っていました。入学時にもらった資料にあった報告書を見て、単純に、行きたい!!! と思いました。というのも、私は大学生になったら「色々な経験をして、色々な人に出会い、たくさんのことを学びたい」「何か他の人とは違うことを大学生生活4年間でたくさん経験したい」「チャレンジしたい!!」と思って入学したからです。他のプログラムも見ました。どれも魅力的でしたが、IWCの報告書を見て「これだ!!」と思い参加しました。IWCの魅力は、

事前研修、事後研修がしっかりあるところだと思います。放課後に集まるのは大変です。夏休みもほとんど研修でした。でもその分みんなの距離は縮まったし、現地での1つ1つのプログラムへの気持ちも高まりました。既存のプログラムをするよりもみんなで考えて、作ったことをする方が意味が深くなると思います。そしてやりっぱなしや、行って終わりではなく、帰国して来てからも事後研修としてみんなで話合う。そして次へつなげていく！それがIWCの魅力だとわたしは思います。

<ソカの植林>

IWCで去年から始まったプログラムです。まず、事前研修ではどんなところかも想像できませんでした。ただ日中は40度を超えるという情報から、「とりあえずめっちゃ暑いなだろう。」ということは分かりました。ソカでの植林はインドネシアについて最初の作業でした。初めてみる景色に感動しました!!! 日本では見たことのない、本物のジャングルでした。1番驚いたことは、暑くなかったことです。日中は40度超えているのですが、湿度が低くて、風があるので木陰にいるととても爽やかで気持ち良いのみんなで力を合わせてです。作業も順調に進みました。例えば、水をどうやって効率よく運ぶかで考え出したのが、バケツリレーです。日本だときっとスプリンクラーや長いホースが設置されているのですが、そんなものはありません。みんなで列を作って上から下へと運びました。私はこの時初めてバケツリレーをしました。1人では大変なこともみんなでしたらうまく進むし、そして楽しい!! そのことを身にしみて感じました。去年のIWCメンバーが植えたセゴンの木も見せてもらいました。立派に成長していて、これが紙などの資源になるんだと思うと自分たちが植えたセゴンの成長がすごく楽しみになりました。大自然に囲まれて、みんなで歌を歌ったり、お弁当を食べたりして過ごした休憩時間も忘れられません。

<インドネシア人学生>

このIWCに、必要不可欠なのは、インドネシ

ア人学生の存在です。しかし、事前研修の時からみんなで1番心配していたのは、インドネシア人学生との意思疎通でした。まず、私は英語が苦手だし、インドネシア語も自己紹介程度しかできない。どうやって18日間インドネシア人学生と一緒に過ごしていこうか、本当に不安でした。でもインドネシア人学生に会ってそんな不安は吹き飛びました。みんな元気いっぱい!!! ついていけないくらい元気でした。みんな社交的だし、私のへたくそで文にもなっていない英語を一生懸命理解してくれようとしてくれました。一緒に歌を歌ったりして言葉は通じなくてもそうやって仲を縮めていきました。それでも今回1番身に染みて感じたのが、自分の語学力のなさ。言いたいことはいっぱいある、聞きたいこともいっぱいある、もっといろんなこと話したいのに、言葉にできない。本当に悔しかったし、自分を情けなく思いました。よく、「英語は絶対に必要だ!」と先生やいろんなひとに言われるけど、実際にその状況に置かれ、自分の言いたいことが伝えられない悔しさや、もどかしさを感じて、「語学力は必要だ」、「語学ができるだけでもっといろんなことに挑戦できる!」と身に染みて感じました。つたない英語を理解してくれたインドネシア人学生に本当に感謝です。私は、インドネシア人学生のジェシカとホストファミリー先に滞在しました。日本語授業で私たちが考えてきた英語の原稿を夜ベッドの中で必死にインドネシア語に訳してくれていたのを知っています。その時、このプログラムはインドネシア人学生がいないと本当に成り立たないと痛感しました。ジェシカも疲れているのに夜遅くまでやってくれている姿を見て、本当に感謝の気持ちでいっぱい、「ありがとう、ありがとう」とずっと言っていました。

<アスラマと子どもたち>

私たちが、18日間の間10日間を過ごさせてもらった施設、アスラマ!! 活動の拠点はこのアスラマとなります。初めてここに訪れたときたくさん子どもたち待っていてくれて、私たちの重い荷物を運んでくれたのを思い出します。最初はアス

ラムが思っていたより綺麗で遊具もたくさん設置されていて、想像していたのと違ったので少し驚きました。しかし滞在するにつれて、改善点もみえてきました。子どもたちはすごく元気で笑顔やキラキラした目は落ち込んでる時や体調がよくない時も勇気づけられました。家庭の問題や経済的な問題、家族と一緒に暮らせないこと、色々な問題を抱えているのにそんなことも忘れるようなとびっきりの笑顔でした。アスラムには、子どもたちの面倒をみてくれる母親的存在の「イブ」たちがいます。朝早くから子どもたちの食事を作ったり、洗濯をしたりイブたちの生活はとても大変なものです。私たちが来ることによって、私たちの分の食事余分に作らないといけなないので、イブ達にはすごく迷惑をかけました。すこしでもイブのお手伝いをしようと自分から仕事を探しに行ったり、少し早めに来て運ぶのを手伝ったり自分たちなりにできることを常に考えていました。子どもたちに喜んでもらえるように、少しでも役に立てるように、と行ってアスラムに行きましたが、逆に子どもたちと一緒に過ごすことによって自分たちが励まされたり、考えさせられたり、癒されたりしました。今でも子どもたちの写真をみるたびに、すごく温かい気持ちになり、「頑張ろう!!」という気持ちになります。また何年か後に子どもたちの成長を見に、アスラムへ行きたいです!!

<ホームステイ>

私がこのIWCの中でも苦勞したり、喜んだりしたことの1つがホストファミリーとの交流です。私のホストファミリーのペアは日本人学生ではなく、インドネシア人学生でした。最初発表されたとき、「何で?!」と思ったのが本音です。だって、わたしは英語ができません、インドネシア人学生との会話は全て英語です。ホストファミリーと交流するどころか、ペアのインドネシア人学生であるジェシカともうまく会話ができない。ジェシカとホストファミリーはもちろん現地の言葉で盛り上がって会話をしています。その中にはもちろん入れず、すごく孤独感を感じました。初日の夜1人部屋で泣きそうになったのを覚えていま

す。このまま10日間過ごすのか?と想像したら、「早く帰りたい!」とこのとき初めて思いました。先生にもこの胸の内を相談しました。そしたら「沙織なら何とかできるやろ!お前ならできる。」と言われました。このとき思いました、「自分はここまで何をしに来たのか?」って。そこから気持ちは変わり、「やっつろうやないか!!」という気持ちになりました。それから毎晩英語辞書、インドネシアの指差し帳を片手にそして全力のジェシカでジェシカとホストファミリーと会話するのに必死になりました。自分の言いたいことが伝えられない悔しさをこのとき感じ、本当に心の底から「語学力は必要だ」と思いました。「もっとインドネシア語勉強してきたら」、「もっと英語がはなせたら、、、」と何回も思いました。それでもイブはいつも私に話しかけてくれて、ジェシカもイブの言っていることを必死に英語で伝えようとしてくれたりしました。「素敵な家族に会えてよかった。」と思いました。最後の夜に、イブから「インドネシアではここがあなたの家よ、私は沙織のイブよ」と言われた時、涙が止まりませんでした。「本当に素敵なお家族に出会えた!!」と思いました。ここでの10日間は私の中でもすごく濃いものになりました。

<最後に>

「このワークキャンプに参加してよかった!!」まずこのことを言いたいです。そして全ての人に「ありがとう」と言いたいです。みんながいたからこそここまでやってこれた。このワークキャンプは色々な人に支えられて、そして自分たちで作っていくものだと思います。自分の意見もいっつつ、まわりの意見も聞く、とてもむずかしいことだと思います。その分できたときの達成感はずごいものです。初めてインドネシアに行って異文化を体験しました。そしてインドネシアでたくさんの人と出会い、たくさん温かさに触れました。朝歩いているだけでたくさんの人とも挨拶をかわしました。日本ではどうでしょうか?バリでは、お昼は昼寝をして、夜は家族と団らん。日本ではどうでしょう?いつも時計と向き合い、時間に追

われています。経済的には日本のほうが恵まれているかもしれませんが。でも人との触れ合いや挨拶、内面的なものではインドネシアの方が豊かなのかもしれません。ここで経験したこと、感じたことを思い出で終わらせるのではなく、色々な人に伝えていき、また活かしていきたいと思います。そして参加して1番思ったのが、想像したり、聞くだけではなく、実際に自分で経験すること、感じる事が何事にも大切だということです。これからの大学生活、たくさんの人と出会い、色々なことに挑戦して、たくさんのことを経験したいと思います。このことに気付けたのも、このIWCに参加したからだと思います。1回生の夏に思いきって参加して本当によかったと思いました。みんなありがとうございます。Terima kasih!

Terima kasih

Saori Hatanaka (Saori)

Terima kasih banyak untuk delapan belas. Saya sangat khawatir karena saya tidak bisa berbahasa Indonesia. Tetapi kalian telah membantu saya untuk berkomunikasi dan kalian telah mencoba untuk mengerti. walau bahasa Indonesia saya buruk dan untuk berbicara pun saya masih menggunakan kamus. hari demi hari saya semakin menyukai tinggal bersama dengan kalian. kalian sudah seperti keluarga saya yang sesungguhnya. saya sangat menyukai hari ini. dan saya telah mencoba untuk makan durian pertama kali dalam hidup saya. Terima kasih atas kesempatannya. dan saya juga sangat menyukai pisang goreng buatan ibu. Akhirnya, keluarga tuan rumah, mahasiswa di Indonesia, guru, orang Asurama, terima kasih kepada semua siswa Jepang. Anggota iwc25 cocok untuk semua orang. Bahasa Inggris juga dituturkan di Indonesia, saya ingin bermain di Indonesia untuk

mempelajari lebih lanjut. Berpartisipasi iwc25 yang benar-benar baik. Terima kasih untuk.

《参加学生のレポート》

Derry Lisandra (Derry)



Hajimemashite watashiwa Derry desu, STIM daigaku no gaksui desu. I am one of the representatives that were invited from GKP for IWC25. I am very grateful to God for mercy, blessing, and an opportunity so that I could follow until the end of the IWC25 event. It is a pleasure for me to join this program, because the program is only held once a year and not many people can join it, it is very unfortunately miss this program and I hope can follow this program again.

I learned many things from children at the orphanage. I learned to always be grateful for my life circumstances, with what I have, I also learned to live independently, I learned to appreciate everything that both small and big things. Learn to accept with great care over the current situation I have, grateful for learning about the meaning of life. Many new experiences that made me realize how precious life is and a lot of things I could do even though it seems impossible. Besides studying I also get a warning to myself that I got from their lives of children who are in nursing, how their children is brave and strong although no one besides their parents. They remain happy and glad, be grateful to their circumstances. And

always ask myself and ask the parents. This is amazed me how selfish and does not he care to the people around me. But although their circumstances are such, they have a zest for life, struggle and discipline, they do not complain there are no negative words from them outgoing. Very unusual in my opinion is still fairly young in age but was able to act and think above the age children with them. I also do not forget the kindness and hospitality of the father and the mother of Cornelius family when I lived there with Ryo. Every morning we always made tea and snacks that so many. They are willing to get up early for us who follow the Japanese camp. We should consider their family and we'd like to stay at home and own family. Thank you for Om and Tante Cornelius. During 18 days of camp, I also studied a variety of Japanese culture and language. A lot of interesting experiences that I experienced with Japanese students. I was very amazed with the students from Japan themselves. They were so enthusiastic and eager in preparing this event. Their seriousness in this camp, how they make the show the show so it can run smoothly. I am very grateful because now I have Japanese friends, they're like my best friend. Learn many things from their discipline, their timeliness and its many other things. I hope this IWC program can continue in the future, because a lot of something that we I learned through this. It was so many unforgettable experiences and the things we can share with others.

Once again I thank you very much to home friends, Japanese friends; Professor Miyake, Pastor Isao, Fukuda Sensei, Minamide Sensei, Matsuyama Sensei, Yamau, Suzuki, Okachin, Ryo, yusuke, Akkun, Saori, Miya, Teruka, Mamina, Honami, Yu, Yayoi, Chisa, Yuma and friends from Indonesia Bapak Nengah, Ibu Miwa, Kak

Forman, Viki, Jos, Veni, It and Emi. I will not forget you forever. God Bless u all.

Emy Ekasari (Emy)



Hi my name is Putu Emmy Ekasari, but you can call me Emmy. I'm from Dhyana Pura University. I was one of the students that invited from GKPB to join the work camp. The first, I'd like to thank to God because of Him I could join and pass this work camp well and certainly because of He is blessing for us. And than Id like to thank to St. Andrew University for giving me and all my friends from Indonesia to join this work camp. Also, I'd like to thank to Widhya Asih Foundation for inviting and giving the opportunity to me.

That was a pleasure for me could join this program because this program only held once a year so that it wasn't any students could join it. And of course that was my first time. I was very happy during this program, so many things that I could get and learn. In the first time I arrived in Blimbingsari, I was so strange but day by day I was really enjoyed to be there. When I arrived in Blimbingsari, there was welcome party and all children in orphanage showed their performance. In there I had a new family and lived in Wayan Suserah familys, also I had new friends from Japan and all children in Widhya Asih orphanage. They are

very kind and always help the other. It was unforgettable moments.

This camp really opened my mind, heart and eyes because of the daily life of the children. They always do anything together like clean their area, eat, pray, play, and many others. They did it together, It made me knew what an important to share with the other and I learned how to love and care not only with our self or may be if you had boyfriend, but the important thing are how we love, care and share each others. Also they never forget to express their gratitude to God. Sometimes I think what a wonderful life that I had, I lived in adequately family and if I'd like to buy something I just asked my parents to buy, so the next day I could get it. But it was different with the children, they couldn't get it because they didn't live with their parent and they are from poor family too. From that experience I realized there are still a lot of people who are living below the poverty who need help from our hand as far as we can. I believe God always help us and carry on what we do if we really want to help each others. So that I learned how I can grateful my life condition in happiness or sadness. I learned to care about the people around me and of cause how to appreciate everything whether it's small all big.

When I follow that program so many thing that I did together with Indonesian and Japanese students. I learned Japanese culture & language. Many interesting experiences that I had with them. I was very amazed with their enthusiasm in this camp. Every day, we always together start from working, eating, meeting, and going around the village. It was very exciting to do. We also visited some schools

in Negara city and teach the student about Japanese lesson. They were very interesting to follow it.

I hope this program can continue to help the other people who need and improve again, I'll never forget this moments and all of friends in IWC 25. I'll miss you so much. Hope we can meet and join again next year. Don't forget me.

Jseeica Geifenny (Jseeica)



Shallom!!, I am Jessica Geofenny but you can call me Jessica or Fenny, I am one of the representative from STIE Triatma Mulya College that was invited from GKPB for IWC 25th. Thanks for the opportunity, so I can devote the energy, love, and thoughts for this. Those things are so wonderful and unforgettable moment to me.

IWC 25th is the most wonderful camp in my life. There is a kind of cultural exchange in this camp. I felt very proud of the opportunity that has given me to join in this camp. Actually no words can describe how precious and how cool this camp that can change my life ever. Actually this camp has opened my eyes directly or indirectly. I previously less aware and concerned that Bali has some poor circumstances. This is very, very different from our tourism destination such as in the Kuta and Nusa Dua

although equally in one province. I had never gone to the poor circumstances before but “I DID IT” in IWC 25th. As an Indonesian, I realized that I have to do something for my country. I was selfish and had no any cares about everything before, but during this camp I have changed. Previously followed this camp, I was unconcerned with the situation of the people around me. But now the activities of this camp have brought a change to me personally.

I got a lot of valuable experience in an orphanage in Blimbingsari. The first time I visited the orphanage I had felt was not interested and disgusted with some poor children over there. Because they looked dirty and I think they would bring diseases that would bring in impact for me. So I think it would be better if I kept the distance with children in the orphanage. But, I felt that these children also need love more than now, I can saw that at the time, when Indonesian students with Japanese students gave attention and care to the children, I can saw the joy radiating from their faces. And honestly I feel very touched and felt lucky for the love has given by my family. I felt, I have to start loving them like I love my own family. Because of our good actions are thankfulness for what Jesus has given to us. The moment has already changed my perspectives for my life. I have to be more, more and more grateful for everything that I have got today.

And at the time when I was at the home stay, I feel very comfortable because Mr. Tjiwa and family have welcomed us with sincerity. As if I was in my own home. And also in the morning, Me and Saori has given snacks such as fried bananas, fried tofu, and the Ibu also make us hot tea, and we are also given coconut and durian. Katarina is very funny and always

greeted us when we went home. Mbak Ima and Bli Putu are very good and enjoyable person. Thank you for your kindness Bapak, Ibu, Mbak Ima, Bli Putu, Katarina.

I learned a lot about Japanese culture and Japanese language in this camp. I am very glad to take this opportunity. I won't never forget the things that I've got. I did learn about the IWC 25th Students committee, how they did to prepare the events. So we feel motivated to participate and cooperate in this event and we saw this brought a positive impact on our Indonesian students, especially for me. Those things were awesome. I felt that I have so many wonderful friends that can appreciate us so well. They were like my BIG NEW FAMILY. Arigatou!!!! And we are still contact each other via email and facebook. I think, it is Great relationship between Indonesian students and Japanese students.

That's all my impressions. Someday, we (Indonesian Students) will be going to Japan. But we're still waiting the exact time. Waiting for us, God Bless You then. ARIGATOOO GOZAIMASU. Miss you and Love you Chara Family *bighug.

Ni Putu Ari Devita (Ita)



My name is Ni Putu Ari Dewinta and my friends usually call me Ita. I'm student of Dhyana Pura University. First of all, I would like to

say thank you very much to St. Andrew University and Widhya Asih Foundation for giving me chance to join the 25th Indonesia Work Camp (IWC). It's really such an amazing experience I could join the IWC because I've gotten many things from it.

At the beginning, I felt so uneasy to gather with the Japanese friends and lecturers because I knew that I couldn't speak Japanese very well. But along with the day all things became so fun because the Japanese friends and lectures were so warm and friendly. Many things that I could get and learned during the 18 days we're together in IWC.

The first thing that I've gotten, I learned to make communication with the Japanese friends although our language ability were so less, but we tried our best to understand each other and finally we made it. We also learned about the different culture that we have and tried to make our self felt comfortable each other during the 18 days we gathered together with the new friends. We learned to help each other, the feeling of tired, sadness, and happiness we felt it together.

The second thing, I learned to use my heart. Everything that you do, if you not used your heart inside it than it's won't be complete. Maybe I as a young generation sometimes didn't want to know or care about what happened around me but from this camp I learned to do everything with all of my heart and soul and also being more sensitive about my surroundings.

And the last one I learned to give thanks. I'm so grateful that God always blessing me in everything. I'm so grateful to get the opportunity to do something useful in IWC. I also grateful for met my new friends from Japan.

My suggestion for IWC, I hope there will have many Japanese university students that can

speak English, so the communication can be easier between the camp participants. I hope the IWC won't be stop and always continue, I believe that IWC in the future will create something more than before.

From the 25th IWC implementation, I've gotten many great things and I would never forget it forever. Thank you so much for the opportunity that you gave to me. And I want to say thank you very much to the Blimbingsari people because they have accepted me with their warmth and friendliness where that's couldn't be change by everything. I'll never forget you guys and the 25 IWC too. I wish I could see you next time and now I have new families' member and those are all of you. You're all my family. I love you guys, GOD bless you always.

Joshua A. Kansil (Joshua)



Helloww, I am Joshua, but you can call me Josh. I'm one of representative from STIM Dhyana Pura College that was invited from GKPB for IWC 25th. Thanks for the opportunity, so I can know the meaning of togetherness in my life and memories that I will never forget in my life. IWC 25th is a very good camp because we can create a togetherness of one another and can know each other's culture. I am very happy because I am given a chance to join in this IWC 25th. I'm very happy at IWC 25 in

progress, had hesitated in me to follow this 25th IWC, because it is difficult to blend in with the Japanese students. Maybe because of language, and different cultures. But all of which I doubt in myself it was wrong. I was able to mingle with them.

Although I am not fluent Japanese and use English language which they understand, potluck with all of that and we understand them. Many experiences that I earned from this program. At the time of planting trees in the area Soka (Tabanan), I was pleased how a partnership going on there. Us together to plant trees in order to make the greening of the area. Although the day was very hot but from the smile that radiated from one another, creating a different feeling inside that is arising spirit. No matter how har the work we if we take it with a happy heart and spirit in self all that would be very easy. When we arrived at Blimbingsari, I'm glad we were welcomed there. Then suddenly there is a sense of concern that arises in my heart. Look at the cute kids do not have parents. They smile and it makes me realize it might be a lesson for me, and I thank God because I am still lucky to have parents who take care of me from baby.

I would like to thank to Bapak Wayan dan Ibu Ketut, because it could give us the opportunity to stay in the Bapak Wayan family. Ibu Ketut was very kind to us, she always provides food in the morning before we start the activity. Me and my friend Okachin very happy, because Bapak Wayan and Ibu Ketut been good to us both. Thank you for all you've given and I will always love you and miss you. I learned a lot from this 25th IWC. I know and a lot more to learn about Japanese culture and language. I am delighted to be joining in this program. We feel motivated to participate and cooperate in

this event and we see this positive impact on our Indonesian students, especially for me, and I am happy to have new friends and good friends who appreciate our hearts well. And we are still interconnected via email and facebook. I think it is the relationship between Indonesian students and students of Japanese. It is all my impression at the IWC 25. Maybe someday our Indonesian students will go to Japan, but we are waiting for the right time. Arigatou gozaimasu. Love and miss you so much. God Bless you All.

Vickie Vu Vross (Vickie)



Hajimemashite watashi wa Vickie desu, STIE Daigaku no gakusei desu. I am one of the representatives that were invited from GKPB for IWC 25. I am very grateful to God for mercy, blessing and an opportunity so that I could follow until the end of the IWC 25 event.

Is a pleasure for me to join this program, because the program is only held once a year is not many people (students) can join it. I am very unfortunate miss this program and I am very grateful to be able to join it. I felt this camp really opened my heart and my eyes when I joined this camp. I realized and shocked that there are still a lot of friends and our brothers and sisters who are living below

poverty line who need help with our hands in their life both in terms of material and non material. Through this program are many lessons, things and unforgettable moment for me. I learned from the children in orphanage. Through them I learned to always be grateful for my life condition. I learned to care about the people around me. I learned to appreciate everything whether small or large. That's all I got from my friends orphanage.

One day my heart was touched when I saw one of the orphans that body was dirty because he had just cleaned the cage, look at the situation of children I was very sad, I cried in my heart, no one advised him to take a bath, there was no figure of a father and mother love, attention and care for him. I think they lack compassion. I also realized how selfish and cares not me against the people around and I want to change it. Starting from the incident I was trying to share my love to my friends at the orphanage. But, although in their situation like that, they have a spirit of life, struggles, and high discipline, they did not complain there were no negative words that came out of their mouth. It is extraordinary to me at a fairly young age but had to act and think above the same age as of children with them.

I also did not forget the kindness and friendliness the father and mother Murti family when I lived there with Yamau and Suzuki. Every morning we are made coffee, tea, martabak, indomie etc. We were treated like their family and we'd like to stay at home and the family of my own. During 18 days of camp I also learned Japanese culture and language. Many interesting experiences that I had with Japanese students. I was very amazed with their

enthusiasm in this camp, how they arrange and prepared the event so that it could run smoothly. Everything was planned and arranged neatly by them until even the smallest things. They are a good example for us. They are VERY FANTASTIC. I am also very grateful because now I have friends from Japan, they're like my best friends. It's excited and we are still contact each other via email.

I hope this IWC program can continue in the future, because a lot of something precious that we get through this program. Really so many unforgettable experiences, moment and the things that we can share with others. Once more I thank you as much as possible to the orphanage friends, residents Blimbingsari including home stay father and mother, my friends from Japan Professor Miyake, Pastor Isao, Sensei Fukuda, Minamide Sensei, Sensei Matsuyama, Yamau, Suzuki, Okachin, Akkun, Ryo, Yusuke, Saori (love u), Miya, Teruka, Mamina, Yuma, Honami, Chisa, Yu and Yayoi and also my friends from Indonesia Bapak Nengah, Ibu Miwa, Kak Forman, Dery, Joshua, Veni, Ita and Emy. I will never forget you all. I hope we can meet again in Japan or Indonesia. God Bless you all. Miss and love you, then. ALIGATOU GOZAIMASU. GOD BLESS YOU.

第25回 インドネシアワークキャンプ 学生預り金精算書

単位:円

収入の部			支出の部		
参加徴収金		2,550,000	旅費 (ガルーダ・オリエントホリデーズ・ジャパン支払分)	@110,300 × 15	1,654,500
			(内訳) 航空運賃	@75,050 × 15	
学生負担	@140,000 × 15	2,100,000	開空施設使用料2,650円・航空保険 600円・燃料サーチャージ 32,000円	@35,250 × 15	
			海外旅行傷害保険料	@2,000 × 15	30,000
			入国税25ドル準備の外貨両替	@1,990 × 15	29,850
			インドネシア出国時空港使用料	@1,388 × 15	20,820
参加補助金			現地での宿泊、食費、交通費、消耗品費その他 (YAYASAN WIDHYA ASHIIH支払 学生負担分)		420,255
対学生補助(45万円は課外活動等補助費)	@30,000 × 15	450,000	ソカ支出分		
			2泊宿泊費、食事代8/23~8/25	≒90,501	
			プリンピンサリ村支出分		
			食事代8/25~9/3 交通費8/29、8/31、9/2訪問、食料等買出しその他(バケツ6個、テントレンタル料)	≒122,286	
			デンパサール支出分		
			昼食代 トラックレンタル、バス代 パロンダンス鑑賞、寺院拝観料、K高原入場料、パティックシャツ代	≒207,468	
			ディアナブラホテル支出分		
			(4泊宿泊費、夕食4、昼食2、AGAPE FESTIVAL)	@25,106 × 15	376,590
			(消耗品)ユニフォーム(ネーム入り)	@2,756 × 15	41,340
			(消耗品)速乾Tシャツ(オリジナルプリント入り)	@1,400 × 15	21,000
			(損害保険料)特別プログラム(飯盒炊爨)時の保険(15/20学生負担)	@54 × 15	810
追加徴収金(予定)		45,165			
合 計		2,595,165	合 計		2,595,165

注: 不足金45,165円については、参加者一人当たり3,011円を追加徴収する。

第26回国際ワークキャンプ (インドネシア)参加のお勧め

第26回国際ワークキャンプ（インドネシア）の参加者を募集する予定です。

【このキャンプの特色】

国際ワークキャンプは、桃山学院創立100周年・大学開学25周年記念事業の一環として1987年以來実施している「アジアの人々の協働から学ぶ」プログラムです。

このプログラムの意義は、本学学生と現地学生で編成するキャンプ隊を、関係者の支援を基に、これまでの実践を継承しながら、学生たちが主体的に運営し、バリ・プロテスタント・キリスト教会設立の児童養護施設の建設・設備整備・運営に参加することにあります。

それは、事前の学習・訓練・準備によって始まります。現地の子どもたち、現地学生、施設・教会関係者、村の人々、ホームステイ先の方々との労働・交流などの様々な活動、そして事後の報告書作成・報告会の開催を通してなされる「協働」についての総合的な体験学習です。同時に、日本とインドネシアの関係についての学習、バリの歴史・文化に直接触れる実生活の中でのインドネシア語学習の機会となっています。

【 期 間 】 2012年8月末～9月初旬の18日間(予定)

※国際情勢等の変化によっては中止・延期・期間の変更・期間の短縮もあり得ることを踏まえておいてください。

【キャンプ地】 インドネシア・バリ州ジュンブラナ県ムラヤ郡プリンビンサリ村、第2 ウィディア・アシ（児童養護施設）

【ワーク内容】 プリンビンサリ村の児童養護施設整備工事

【主 催】 桃山学院大学、バリ・プロテスタントキリスト教会

【共 催】 ディアナ・プラ大学

【注意事項】月・木の5限インドネシア語クラス10回・インドネシア文化クラス10回必修となります。

【単位認定】4単位認定されます。(共通自由科目「海外研修－国際ワークキャンプ」)

【参加自己負担金】【140,000円】

〈ため替レートの関係で若干変化しますが、大学並びに教育後援会の援助により、
標記の金額が自己負担分となります。〉

パスポート取得、予防接種等に関する費用、任意の海外旅行保険代は自己負担です。

キリスト教センター集会室で行われる事前説明会にお越し下さい。(4月中旬頃を予定しています。)

ご質問等は……キリスト教センター内 チャペル事務室まで

編集後記

ワークキャンプから帰国して1ヶ月後、私たちは報告書に取り掛かりました。みんな報告書作成に関して初心者だったため、探り探りで報告書を進めていきました。報告書が完成していくとともに、みんなで集まる機会も減っていきました。肌で寂しさを感じながらそれをみんな口に出すこともなく、黙々と作業に打ち込み、みんなで協力して、報告書を作り上げる事ができました。ワークキャンプから報告書作りまで私たちを支えてくださったすべての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。この報告書がIWC26以降の事前準備に役立てば嬉しいです。最後に、この報告書を手にとってくださいありがとうございます。この報告書を読んで、インドネシアワークキャンプに少しでも興味を持っていたできれば幸いです。

国際ワークキャンプ報告書編集委員
岡野峻佑、中川美弥、中西由茉、鈴木央生

第25回 国際ワークキャンプ(インドネシア) 報告書

発行日：2011年12月

発行：桃山学院大学 キリスト教センター

編集：国際ワークキャンプ報告書編集委員会

〒594-1198

大阪府和泉市まなび野1番1号

TEL. 0725-54-3131 (代)

印刷：和泉出版印刷株式会社

〒594-0083

大阪府和泉市池上町四丁目2番21号

TEL. 0725-45-2360 (代)



St. Andrew's University

IZUMI, OSAKA, 594-1198, JAPAN